曽根遺跡群

高上石町遺跡

福岡県前原市大字高上字石町所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第44集

1993

前原市教育委員会

曽根遺跡群

高上石町遺跡

たか　うえ　いし　まち

福岡県前原市大字高上字石町所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第 44 集

9・10号甕棺合葬墓

８号甕棺墓人骨出土状況

序

国指定史跡「曽根遺跡群」は、弥生時代後期の方形周溝墓（平原遺跡）と古墳時代中期の古墳群（ワレ塚・銭瓶塚・狐塚）によって構成されていて、さらにこのうち平原遺跡から出土した銅鏡や玉類などの一括遺物も国の重要文化財に指定されております。

曽根遺跡群には、指定されている遺跡群の他に、異なる時期の遺跡も多く存在していることは以前から知られておりました。石ヶ崎遺跡などがその代表的な遺跡ですが、これまで当教育委員会が実施した調査も、主に指定遺跡に対するもので、この遺跡群の性格をすべて明らかにするまでにいたってないのが現状です。

その意味において、今回報告する高上石町遺跡は貴重な資料となりました。

この甕棺墓群については、以前の緊急の調査によってその存在は確認されてはいましたが、より詳細な資料が得られたという点で、今回の調査の意義は大きいと考えております。遺跡全域の調査ではないので今後も継続的に対応してゆく必要がありますが、部分的とはいえ、正式な調査で、「伊都国王墓」と言われる三雲南小路遺跡とほぼ同時代の墳墓群が明らかとなったことは、曽根遺跡群の性格の一端を解明しただけでなく、「伊都国」を語る上でも貴重な成果であったと思います。

本書が、私達の郷土「いとしま」の歴史と、そこに存在する貴重な文化財へのご理解をいただく一助となれば幸いです。

また、この報告書を刊行するにあたり、調査段階から関係機関をはじめ多くの方々のご協力をいただきました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

平成5年3月31日

前原市教育委員会
教育長　樗　木　昭　生

例　　言

1．本書は、福岡県前原市大字高上字石町234番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．今回の調査は、1989年（平成元年）度井原地区県営ほ場整備事業にともなう発掘調査である。

3．調査は、前原町教育委員会（現前原市教育委員会）が主体となって実施した。

4．本書に用いた地図は、前原市都市計画課保管図である。

5．本書に掲載した実測図は、林　　覚が実測・製図した。

6．写真撮影は、林が行なった。

7．本書の執筆は付論を除いて林が行ない、付論については九州大学医学部解剖学教室の中橋孝博先生に玉稿をいただいた。

8．本書の編集は、林が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ．調査にいたる経過 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．概要 …… 5
　2．遺構と遺物 …… 6
　　（1）甕棺墓 …… 6
　　（2）甕棺 …… 18
　　（3）縄文式土器 …… 32
Ⅳ．まとめ …… 33

付 論 目 次

福岡県前原市高上石町遺跡出土の弥生時代人骨について（中橋孝博） …… 37

挿 図 目 次

第1図　周辺遺跡分布図（1／20,000） …… 2
第2図　高上石町遺跡の調査地点とその周辺（1／2,500） …… 4
第3図　調査区全体図（1／100） …… 折り込み
第4図　3・4・5・6号甕棺墓実測図（1／30） …… 7
第5図　7・8号甕棺墓実測図（1／30） …… 8
第6図　9・10・11号甕棺墓実測図（1／30） …… 9
第7図　12・13・14号甕棺墓実測図（1／30） …… 12
第8図　15・16・17号甕棺墓実測図（1／30） …… 13
第9図　18・19号甕棺墓実測図（1／30） …… 14
第10図　20・21号甕棺墓実測図（1／30） …… 15
第11図　22・23・24号甕棺墓実測図（1／30） …… 17
第12図　3号甕棺実測図（1／12） …… 18
第13図　4号甕棺実測図（1／12） …… 19

第14図　5・8号甕棺実測図（1／12）……20
第15図　10号甕棺実測図（1／12）……21
第16図　14・15号甕棺実測図（1／12）……22
第17図　16号甕棺実測図（1／12）……23
第18図　19・20・22号甕棺実測図（1／12）……24
第19図　23号甕棺実測図（1／12）……26
第20図　6・7号甕棺実測図（1／8）……27
第21図　9・11号甕棺実測図（1／8）……28
第22図　12・13号甕棺実測図（1／8）……29
第23図　17・18号甕棺実測図（1／8）……30
第24図　21・24号甕棺実測図（1／8）……32
第25図　縄文式土器拓影（1／3）……33
第26図　甕棺墓主軸方向……34
第27図　成人棺の傾斜角度……34

図　版　目　次

図版1　調査区全景
図版2　3号甕棺墓
　　4号甕棺墓
図版3　5号甕棺墓
　　6号甕棺墓
図版4　7号甕棺墓
　　8号甕棺墓
図版5　8号甕棺墓人骨出土状況
　　9・10号甕棺墓
図版6　9・10号甕棺墓
　　10号甕棺墓人骨出土状況
図版7　10号甕棺墓出土人骨近景
　　11・12・13・14号甕棺墓
図版8　13号甕棺墓人骨出土状況
　　15・16号甕棺墓

図版 9　15号甕棺墓
16号甕棺墓
図版10　17・18・19号甕棺墓
同　上
図版11　19号甕棺墓人骨出土状況
20・21号甕棺墓
図版12　22号甕棺墓
22・23号甕棺墓
図版13　24号甕棺墓
図版14　3・5号甕棺
1．3号甕棺上甕
2．3号甕棺下甕
3．5号甕棺上甕
4．5号甕棺下甕
図版15　4号甕棺
1．4号甕棺上甕
2．4号甕棺下甕
3．4号甕棺（支え用）
図版16　8・10号甕棺
1．8号甕棺上甕
2．8号甕棺下甕
3．10号甕棺
図版17　14・15号甕棺
1．14号甕棺上甕
2．14号甕棺下甕
3．15号甕棺上甕
4．15号甕棺下甕
図版18　16・19号甕棺
1．16号甕棺上甕
2．16号甕棺下甕
3．19号甕棺上甕
4．19号甕棺下甕

図版19　20・22号甕棺

1．20号甕棺上甕

2．20号甕棺下甕

3．22号甕棺

図版20　23号甕棺

1．23号甕棺上甕

2．23号甕棺上甕

3．23号甕棺下甕

図版21　6・7号甕棺

1．6号甕棺上甕

2．6号甕棺下甕

3．7号甕棺

図版22　9・11号甕棺

1．9号甕棺上甕

2．9号甕棺下甕

3．11号甕棺上甕

4．11号甕棺下甕

図版23　12・13号甕棺

1．13号甕棺上甕

2．12号甕棺下甕

3．13号甕棺上甕

4．13号甕棺下甕

図版24　17・18号甕棺

1．17号甕棺上甕

2．17号甕棺下甕

3．18号甕棺上甕

4．18号甕棺下甕

図版25　21・24号甕棺

1．21号甕棺上甕

2．21号甕棺下甕

3．24号甕棺上甕

4．24号甕棺下甕

図版26　墓壙埋土中の縄文式土器

Ⅰ．調査にいたる経過

1989年（平成元年）虎井原地区県営ほ場整備事業は、3工区・総面積30haにわたって実施されたが、その過程で客土に用いるための土砂の不足が問題となり、それを確保するために数ヶ所の土取り場の候補地が上げられ、その一つに今回発掘調査を実施した高上石町遺跡が含まれていた。

当該地の現況は畑地であるが、かつて耕作中に甕棺墓が発見され二度の発掘調査を実施しており(註1)、甕棺墓群の存在の可能性が極めて高い場所であったため、直ちに試掘調査を実施したところ、はたして甕棺の墓壙と見られる遺構が検出された。

これを受けて関係機関で協議をした結果、早急に発掘調査を実施し、その後対応を決定することとなった。

発掘調査は1989年（平成元年）4月11日から5月18日まで実施したが、調査区内だけで22基の甕棺墓が極めて良好な状態で存在していることが明らかとなり、かなりの規模の甕棺墓群が形成されていることが確実という結果を得たため、協議の結果、土取りを行なわず現況で遺構を保存することとなった。

なお、調査の組織は、次のとおりである。

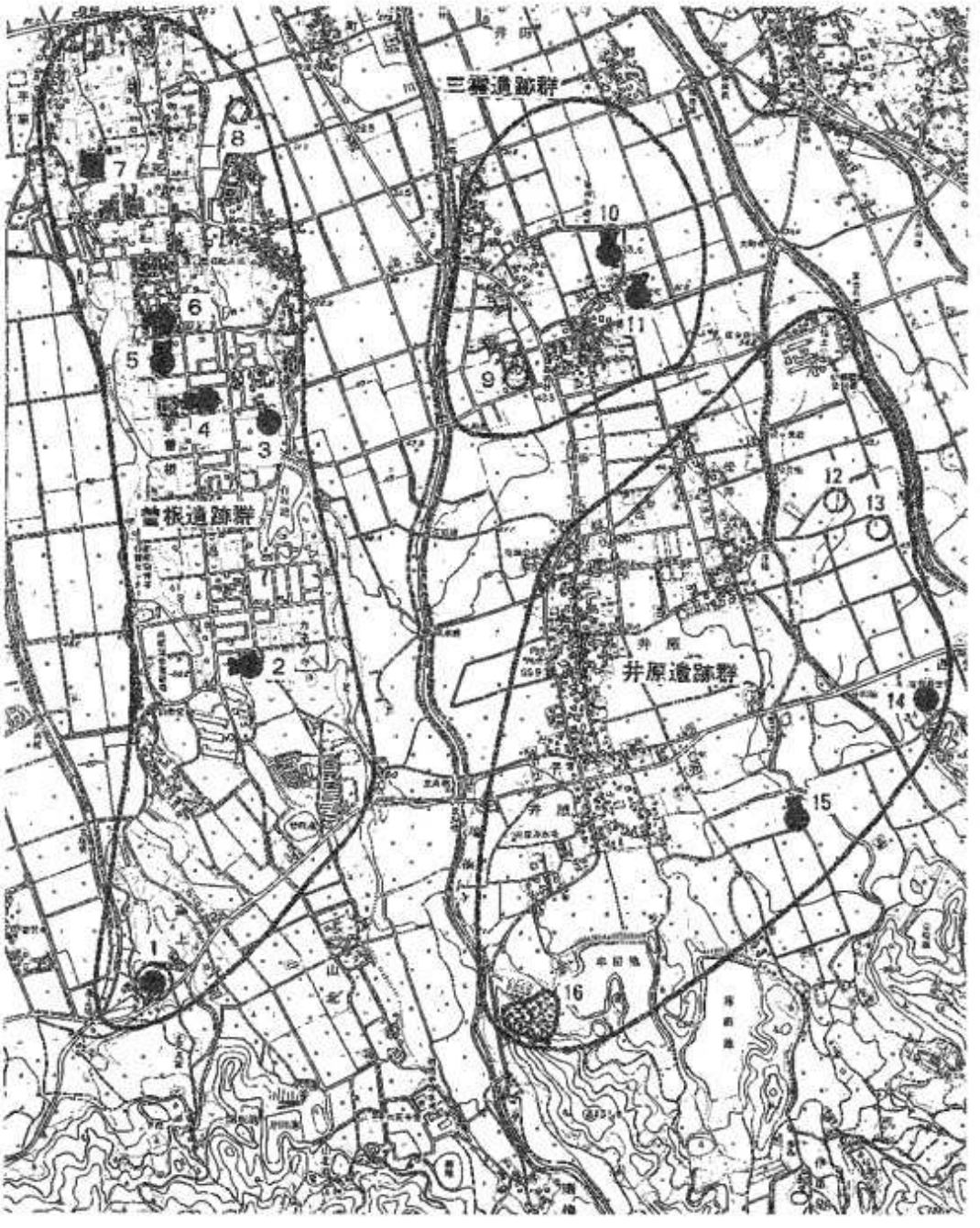
調査主体　前原町教育委員会（現前原市教育委員会）

総　括	教育長	河原吉美
	文化課長	岸原重美
	文化財係長	吉村耕治
庶　務	文化振興係長	中園俊二
調　査	文化財係主事	林　覚

調査・整理作業員

青木輝代、岡田りつ子、柏田聖子、小金丸利枝、谷口裕子、中村順子、野村松江、原野アサ子、原野スミ、平山富士子、藤森啓子、本田タツ子、牧井定代、三島美也子、八木ヤスノ

註　1．林　覚編「曽根遺跡群Ⅳ」（前原町文化財調査報告書　第27集　1988年）



1．高上石町遺跡　2．高上大塚古墳（消失）　3．狐塚古墳　4．銚瓶塚古墳
5．ワレ塚古墳　6．先山古墳（消失）　7．平原遺跡　8．石ヶ崎遺跡
9．三雲南小路遺跡　10．端山古墳　11．繁山古墳　12．井原ムクナシ遺跡
13．井原塚廻遺跡　14．古賀崎古墳　15．井原1号墳　16．正恵古墳群

第1図　周辺遺跡分布図（1／20,000）

Ⅱ．位置と環境

曽根遺跡群は、脊振山系雷山山麓から北に向かって舌状に張り出した、通称「曽根丘陵」と呼ばれる、東西幅500～600m・長さ約2.5km・標高30～60mの台地上に位置している。

この遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけての墓地遺跡が主体となって構成されており、その主なものは、石ヶ崎遺跡（弥生時代前期から中期の支石墓・甕棺墓群）、平原遺跡（弥生時代後期の方形周溝墓。国指定史跡）、先山古墳（古墳時代中期の前方後円墳？。消滅）、ワレ塚古墳（古墳時代中期の前方後円墳。国指定史跡）、銚瓶塚古墳（古墳時代中期の前方後円墳。国指定史跡）、狐塚古墳（古墳時代中期の円墳。国指定史跡）、高上大塚古墳（古墳時代後期の前方後円墳？。消滅）などである。

石ヶ崎遺跡は、その発見や調査の実施が我が国における支石墓調査の先駆けとなったことで有名な遺跡である。

46.5cmの径を有する巨大な内行花文鏡４面を含む39面の銅鏡を出土した平原遺跡は丘陵の先端に近い所に位置している。この方形周溝墓は、中国の史書であるいわゆる「魏志倭人伝」の中に見られる「伊都国」の王墓とされているものであるが、超大型のものを含む大量の銅鏡が破砕した状態でしかも棺外に埋納されるという、極めて特徴的な遺跡であり、弥生時代後期の「倭国」において、地方の勢力が否定され統一されてゆく過程を示しているようでもある。

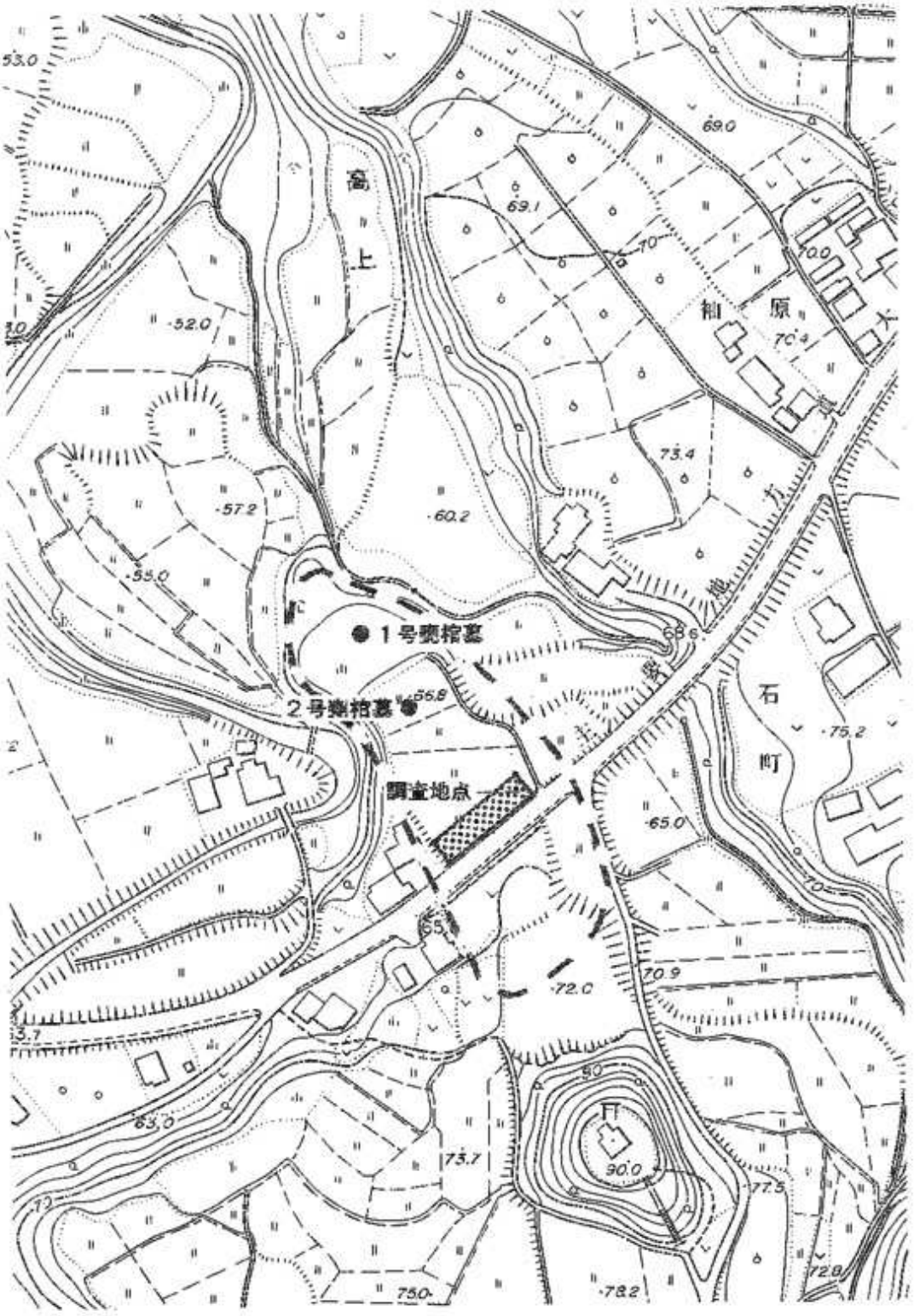
曽根遺跡群を構成する古墳群は、古墳時代中期から後期にかけて築造されていて、このうち、全体が調査された狐塚古墳は古式の横穴式石室を主体部とする葺き石を持った円墳であることが明らかとなり(註2)、前方部などが調査された銚瓶塚古墳では葺き石や周溝が確認され埴輪などが出土し(註3)、さらに高上大塚古墳からは鮑角製刀装具が出土している(註4)。

高上石町遺跡は、この曽根丘陵の基部、雷山山系の麓の北西に面したゆるい傾斜面に位置している。

曽根丘陵の東側には、南の脊振山系に源を発する河川によって形成された扇状地が広がっており、「伊都国」の中心地と考えられている三雲遺跡群と井原遺跡群が所在している。

三雲遺跡群は、弥生時代・古墳時代を中心にした多くの住居跡群や墳墓群によって構成されていて、弥生時代中期の「王墓」とされる三雲南小路遺跡(註5)や、４世紀に築造されたと考えられている端山古墳と鎮山古墳の２基の前方後円墳などがその中心となっている(註6)。

その南に隣接する井原遺跡群は、位置は未確認ではあるがこれも弥生時代の「王墓」である井原鑓溝遺跡をはじめとして、三雲遺跡群と同様に重要な遺跡が点在しており、その主なものは、多くの集落遺跡のほか、多数の馬具や須恵器が出土した古墳時代後期の円墳である古賀崎古墳(註7)、全長42mの規模をもつ前方後円墳の井原１号墳(註8)、古墳時代前期の低墳丘墓群である正意古墳群(註9)などである。



第2図　高上石町遺跡の調査地点とその周辺（1／2,500）

さらに、三雲・井原両遺跡群の西方には稜線が福岡市との境となる標高416mの高祖山があるが、この山は奈良時代に怡土城が築かれた地として知られている。高祖山の南には日向峠があり、当時の重要拠点である太宰府へ通じる交通上の要衝となっており、怡土城築城の目的の一つが太宰府の防衛にあったことが良くわかる。

高上石町遺跡の南には県道大野城二丈線が通っているが、この道路は、東の大野城市・春日市から福岡市の西南部を経て日向峠にいたり、前原市の南をぬけて、二丈町・唐津市へと通じるもので、海岸ぞいを走る国道202号線のバイパスとして利用されていて、現代の道とはいえ、末盧国・伊都国・奴国をつなぐ陸路となっている。そして、沿線に点在する遺跡、たとえば、西の唐津市菜畑遺跡や二丈町曲り田遺跡、東の福岡市早良区や春日市周辺の遺跡群さらには太宰府の存在などを考えると、古代においても重要な交通路になっていたことを感じさせる地域である。

註　2．林　　覚編「曽根遺跡群」（前原町文化財調査報告書　第7集　1982年）
　　3．鍋島さとみ編「曽根遺跡群Ⅲ」（前原町文化財調査報告書　14集　1984年）
　　林　　覚編「曽根遺跡群Ⅳ」（前原町文化財調査報告書　第27集　1988年）
　　4．岡部裕俊「前原町立伊都歴史資料館」（前原町教育委員会　1987年）
　　5．柳田康雄「三雲遺跡　南小路編」（福岡県文化財調査報告書　第69集　1985年）
　　6．福岡県教育委員会「三雲遺跡群　Ⅰ～Ⅳ」（福岡県文化財調査報告書　1980～83年）
　　7．岡部裕俊「古賀崎古墳」（前原町教育委員会　1986年）
　　8．岡部裕俊編「井原遺跡群」（前原町文化財調査報告書　第35集　1991年）
　　9．川村　博「正恵古墳群」（前原町文化財調査報告書　第2集　1980年）

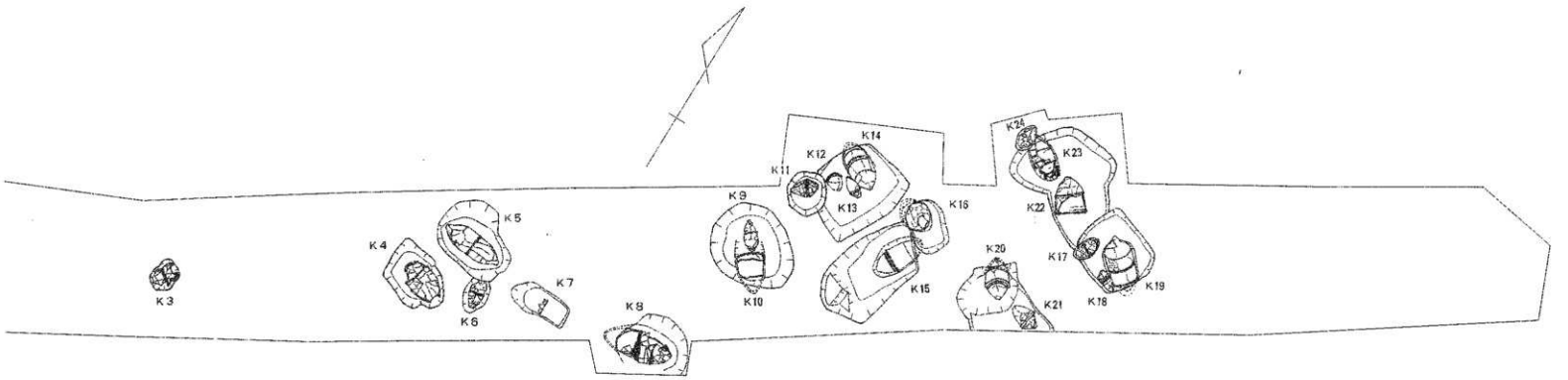
Ⅲ．調査の記録

1．概要

今回の調査面積は約200㎡で、調査区内に22基の甕棺墓を検出した。内訳は、成人棺12基、小児棺10基で、同一墓壙に複数の甕棺（成人棺と小児棺）を埋置したものが3基確認された。

前述のとおり、今回の調査区の北側で、かつて2基の甕棺墓（1号、2号甕棺墓）を調査していることや、遺構の出土状況、さらには道路で切断された南側の畑地となっている丘陵部のなどから推測して、長さ170m・幅60m程度の墓域を形成していると考えられる。したがって、全体では200基を超える甕棺墓が存在していた可能性がある。

今回の調査地点から北側は畑地となっているが、旧地形を大きくは削ってはいないようで、



第3図　調査区全体図（1/100）

かなりの数の遺構が残っていると思われる。しかし、南側は道路や畑地造成のために大きく地形が変わっているようで、こちら側での遺構の存在はその可能性が低い。

また、調査した甕棺墓のうちいくつかの墓壙から押し形文土器が出土しており、この甕棺墓群が縄文時代の遺構の上に形成されていることが明かとなったが、調査中からの協議の過程で、土取りせずに残されることになったので、縄文時代の遺構については調査を実施していない。

なお、今回出土した22基の甕棺について、以前に調査した甕棺墓を「1号・2号」としている関係から、3号から24号までの番号を付すことにした。

2．遺構と遺物

(1) 甕棺墓

3号甕棺墓（第4図　図版2）

甕形土器2個を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N132°Wで埋置されているが、傾斜角度は不明である。

遺構は大きく削られており、残存する墓壙は主軸方向0.8m・幅0.8m・深さ0.17mで、甕棺も上甕・下甕ともに残っているのはわずかである。

4号甕棺墓（第4図　図版2）

上甕に鉢形土器を用いた、成人用の、上甕がやや挿入された合わせ口甕棺であるが、基本的には接口式で、上甕の口径が小さいのを補うために、さらにもう一個の土器を用いて上甕にするとともに支えにもしていた。主軸N70°Wで埋置されているが、傾斜角度は残存部が少ないためやや正確さに欠けるが現状で－5°で下甕がやや上位となる。

遺構上半は大きく削られていて、甕棺も半分以上が失われている。残存する墓壙は主軸方向1.16m・幅1.35m・深さ0.4mであるが、平面で観察すると、一辺1.2mほどの方形の墓壙内にさらに横穴を掘って下甕を挿入しているのが分かる。

5号甕棺墓（第4図　図版3）

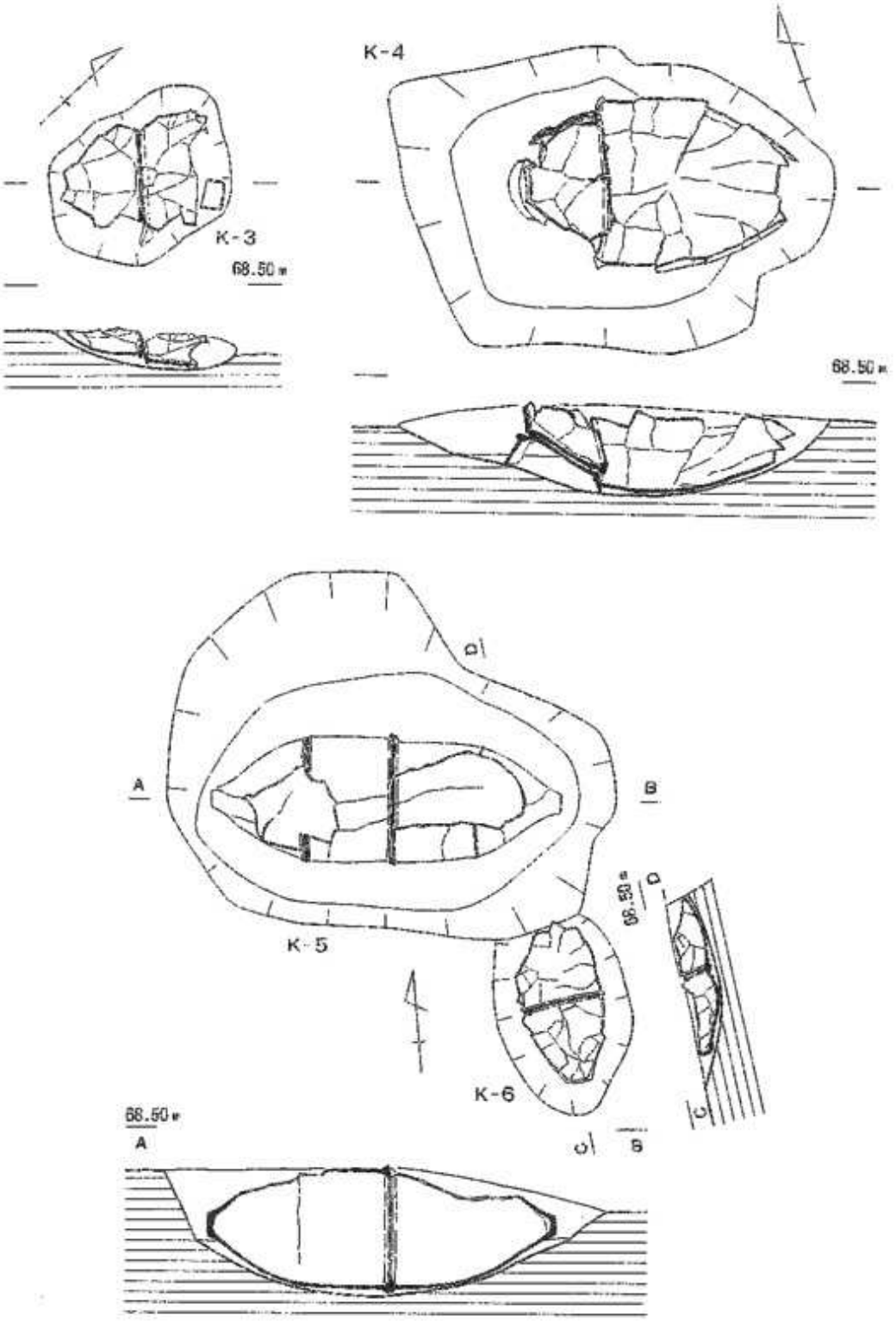
甕形土器2個を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N85°W・傾斜角度－2°で埋置されている。

遺構の上半が削られてはいるが、甕棺は一部が棺内に崩落しただけでほぼ完全に残っている。墓壙は長径1.7m・短径1.4mの楕円状で、そこから東側に横穴を掘って下甕を挿入していたのが分かる。

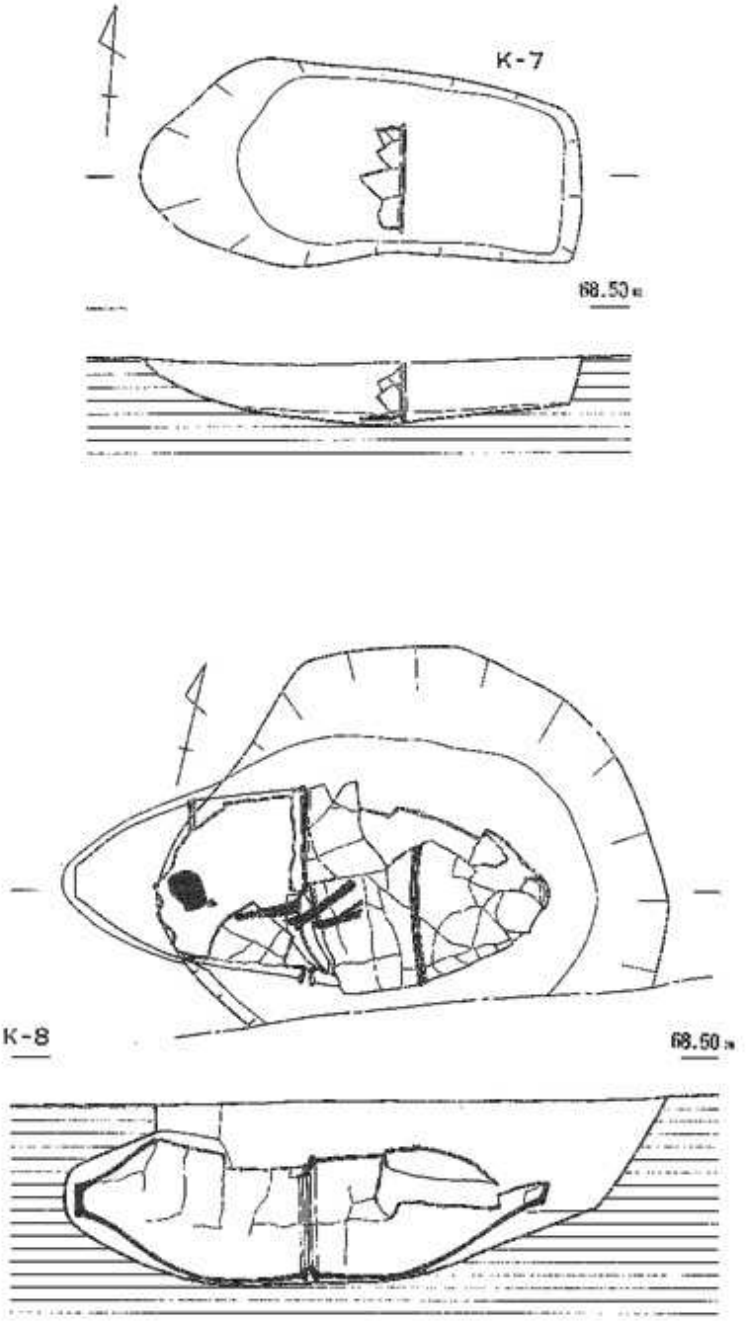
6号甕棺墓（第4図　図版3）

甕形土器2個を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N172°E・傾斜角度－6°で埋置されている。

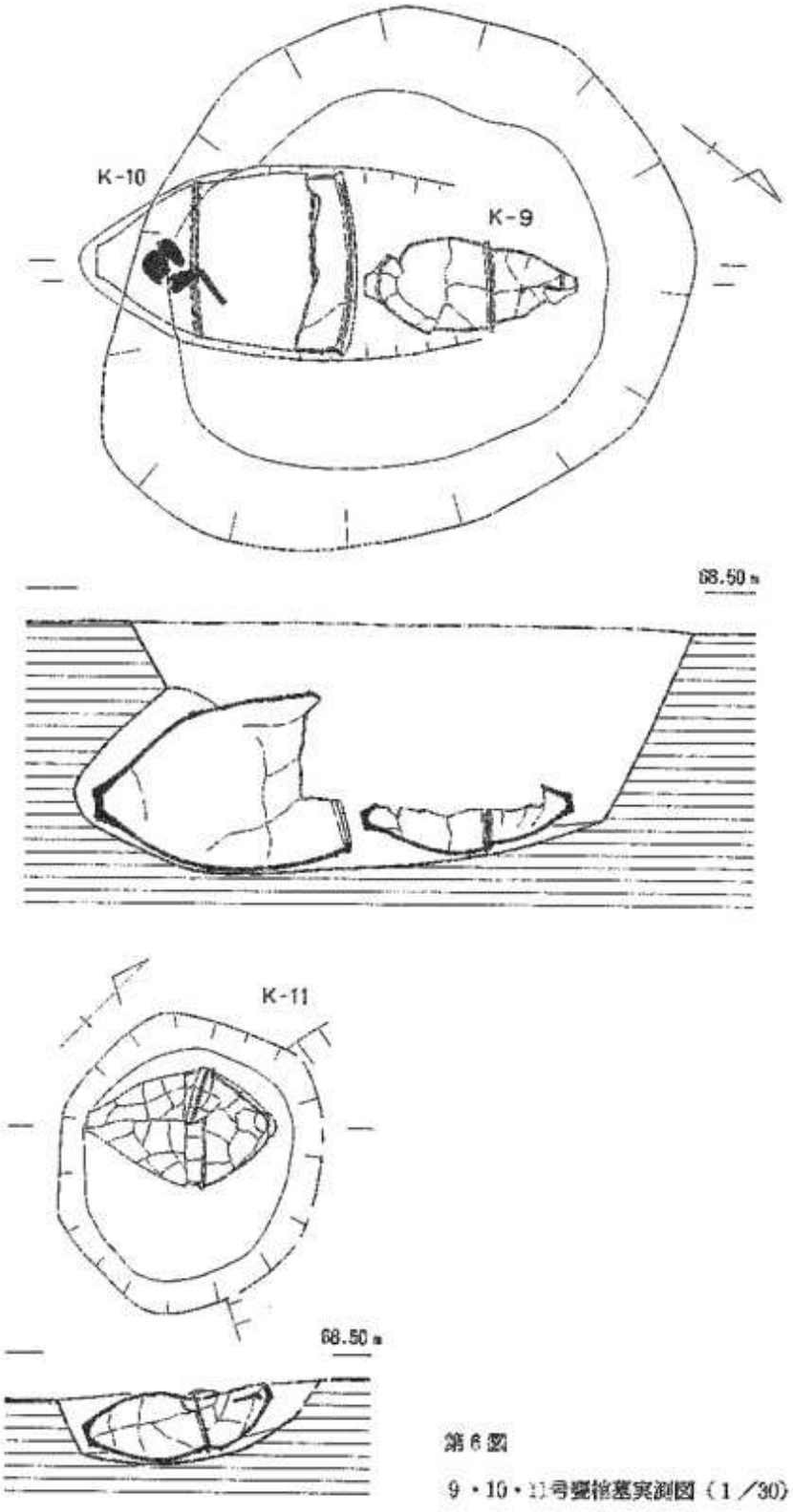
墓壙は5号甕棺墓に切られていて、さらには遺構上半が削られており、残存するのは主軸方向0.93m・幅0.66m・深さ0.2mで、甕棺も上甕下甕ともに上部2／3ほどが失われている。



第4図　3・4・5・6号甕棺墓実測図（1／30）



第5図　7・8号甕棺墓実測図（1／30）



第6図

9・10・11号甕棺墓実測図（1／30）

7号甕棺墓（第5図　図版4）

小児用の、単棺式甕棺墓で、主軸N36°Eで埋置されており、傾斜角度は不明だがほぼ水平であったと思われる。

遺構は大きく削られていて、墓壙は主軸方向1.66m・幅0.8m・深さ0.24mが残るだけで、甕棺もはげしく攪乱を受けており、墓壙内で全体の20%程度復元できる分の採集はできたが、原位置を保っていたのは口縁部のごく一部だけであった。

8号甕棺墓（第5図　図版4・5）

甕形土器2個を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N76°E・傾斜角度1°で埋置されていて、棺内からは頭蓋骨などの熟年男性の人骨が出土した。

遺構の上部及び南側の一部が削られているが、甕棺はほぼ完全に残っていた。直径約1.8mの円形の墓壙の西側に0.6m程の横穴を掘り、下甕を挿入している。

人骨の残りは悪く、頭蓋骨と下肢骨の一部が出土したのみであるが、その位置からして、下甕を横穴に挿入ののち遺体を頭から入れ仰向けに膝を曲げた状態で安置していたと思われる。

9・10号甕棺墓（第6図　図版5・6・7）

9号甕棺墓と10号甕棺墓は、同一の墓壙内に主軸をそろえて埋置されており、同時に埋葬されたのは明らかである。

9号甕棺墓は、甕形土器2個を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N37°W・傾斜角度5°で埋置されている。上甕に穿孔が見られる。

10号甕棺は、甕形土器を用いた、成人用の、単棺式の甕棺墓で、主軸N37°W・傾斜角度7°で埋置されている。棺内からは頭蓋骨などの成人女性の人骨が出土したが、その位置からして、遺体は頭から入れて安置していたと思われる。蓋の痕跡は検出できなかった。

墓壙は、長径2.48m・短径2.03mのややいびつな円形で、その南東側に横穴を掘って10号甕棺を挿入している。二つの甕棺の位置関係は、中心線こそややずれてはいるものの、主軸の方向は全く一致している。

11号甕棺墓（第6図　図版7）

下甕に甕形土器、上甕に上半を打ち欠いた壺形土器を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N46°E・傾斜角度17°で埋置されている。

12・13・14号甕棺墓を切って墓壙を掘っており、それぞれが重なった部分では11号甕棺墓の墓壙をきちんと検出できなかったが、両者の墓壙の形や土器の残存状況からして、11号の方が後から営まれたのは確実である。

墓壙は上部が削られていて、径約1.2mの円形で、深さ0.3m程が残存している。

土器はしゃげた状態で検出され、欠損部は少ない。

12・13・14号甕棺墓（第7図　図版7・8）

成人棺1基と小児棺2基が同時埋葬されている。9・10号甕棺墓とは位置関係が異なるが、互いを傷つけずに近接して埋納されているところから同時に埋葬されたとして差し支えないと考える。

墓壙は2.50m×2.05mの方形プランで、その西側に横穴を掘って、14号甕棺の下甕を挿入している。横穴の位置が墓壙内でやや北側に偏っているところからも、3基の甕棺の同時埋葬が当初から想定されていたことが推測される。

14号甕棺墓は、甕形土器2個を用いた、成人用の、下甕を上甕に挿入した、挿入式の合わせ口甕棺墓で、主軸N121°E・傾斜角度35°で埋置されている。甕棺を挿入するために、口縁部を、下甕で外側、上甕で内側をそれぞれ打ち欠いている。棺内から人骨の小片が出土した。

13号甕棺墓は、下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N118°E・傾斜角度－12°で埋置されている。棺内から、残りは非常に悪いが、幼児の人骨が出土した。

12号甕棺墓は、下甕に肩部から上を打ち欠いた壺形土器、上甕に甕形土器という変則的な土器の用い方をした、小児用の、下甕を上甕に挿入した挿入式の甕棺墓で、主軸N126°E・傾斜角度43°で埋置されている。棺内から、人骨の小片が出土した。

この3基は、故意であるかあるいは埋土の移動によるものか不明であるが、傾斜角度が互い違いであることが特徴的である。

15号甕棺墓（第8図　図版8・9）

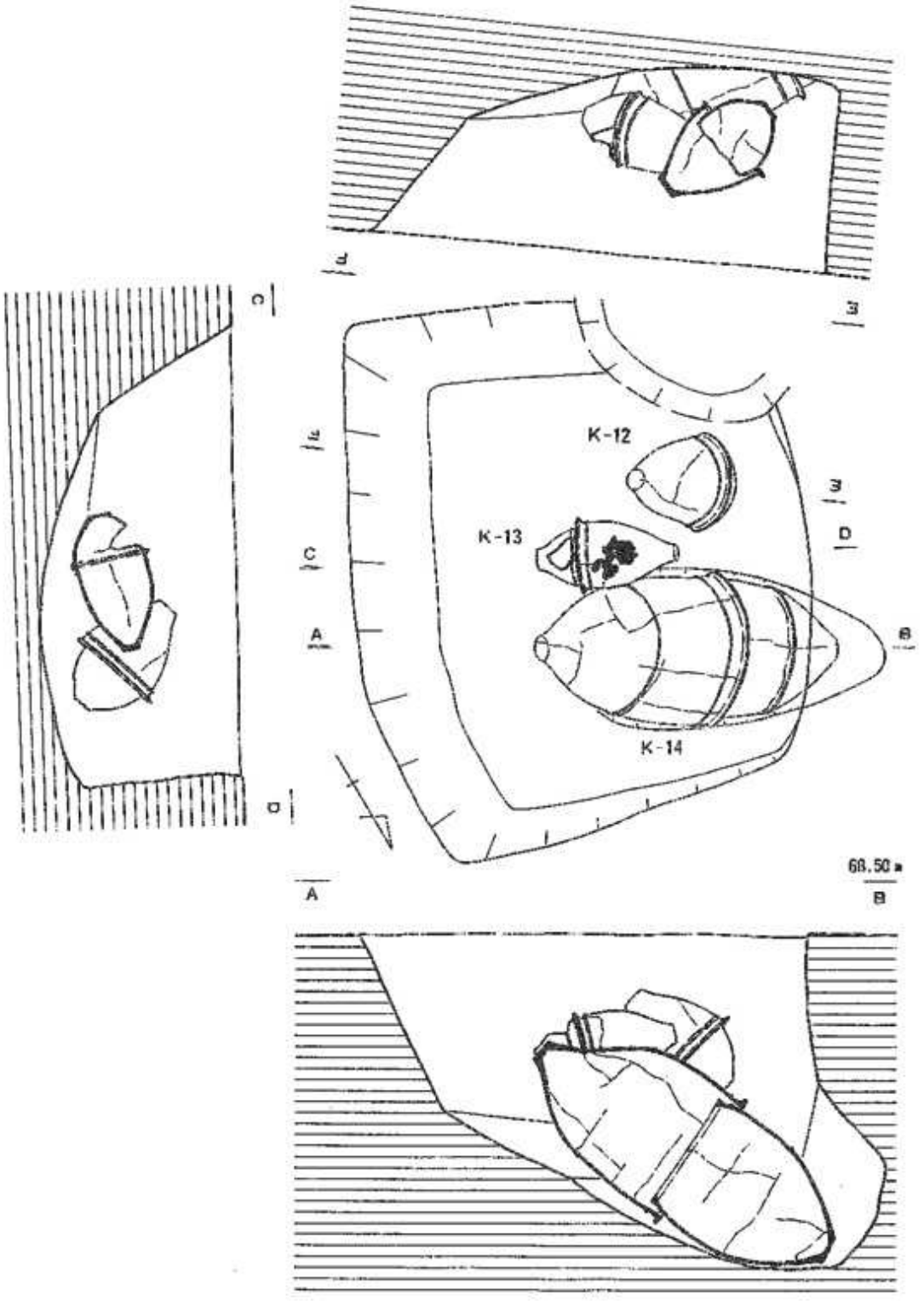
下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N155°W・傾斜角度－3°で埋置されている。合わせ口部分は、黄褐色の粘土によって目貼りされていた。

墓壙は2.23m×1.70mの方形プランで、その北側に横穴を掘って下甕を挿入している。遺構の残りが良く、墓壙の最深部で1.15mあって上からの影響が少なかったとみえ、甕棺は完全な形で検出された。

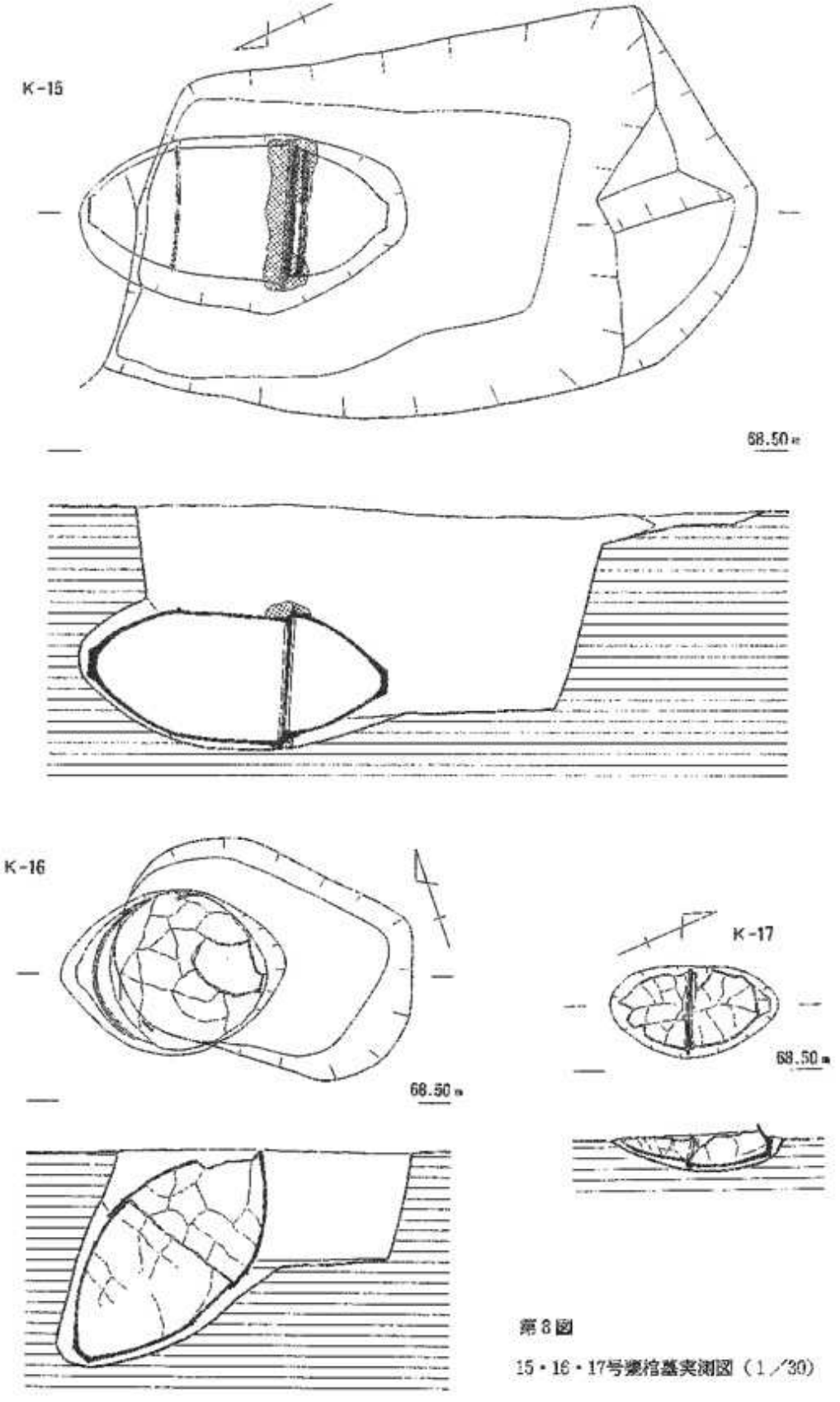
16号甕棺墓（第8図　図版8・9）

甕形土器2個を用いた、成人用の、下甕を上甕に挿入した挿入式の合わせ口甕棺墓で、主軸N109°E・傾斜角度47°で埋置されている。下甕上甕ともに、口縁部を完全に打ち欠いて使われている。

墓壙は、1.42m×0.93mの隅丸方形のプランで、その西側に横穴を掘って下甕を挿入している。遺構上部は削られていて、上甕の底部は失われている。



第7図　12・13・14号棺墓実測図（1／30）



第8図

15・16・17号甕棺墓実測図（1／30）

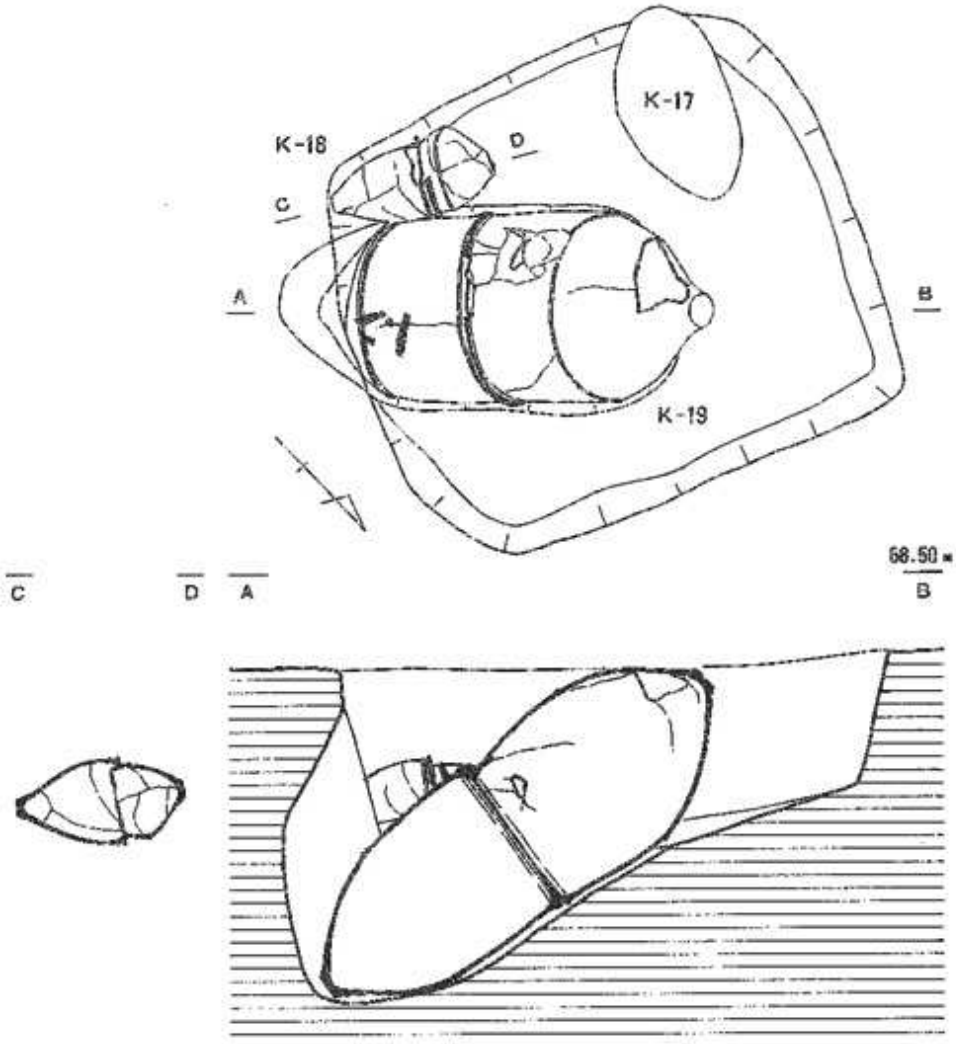
17号甕棺墓（第8図　図版10）

甕形土器2個を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N157°W・傾斜角度9°で埋葬されている。

この甕棺墓は、18・19号甕棺墓の墓壙を切って営まれているが、遺構は大きく削られており、残存する墓壙は長径0.77m・短径0.42mの楕円形で深さはわずか0.17mで、甕棺も下甕が半分以上、上甕は8割方失われている。

18・19号甕棺墓（第9図　図版10・11）

この甕棺墓も、複数埋葬墓である。ただし、18号甕棺墓は墓壙の隅に埋納されており、19号より埋葬時期が遅れた可能性があり、19号の上甕の損傷はそれを示しているのかもしれない。しかし、方形の墓壙を乱すことなく埋納されているところから、合葬墓であるのは確実である。



第9図　18・19号甕棺墓実測図（1／30）

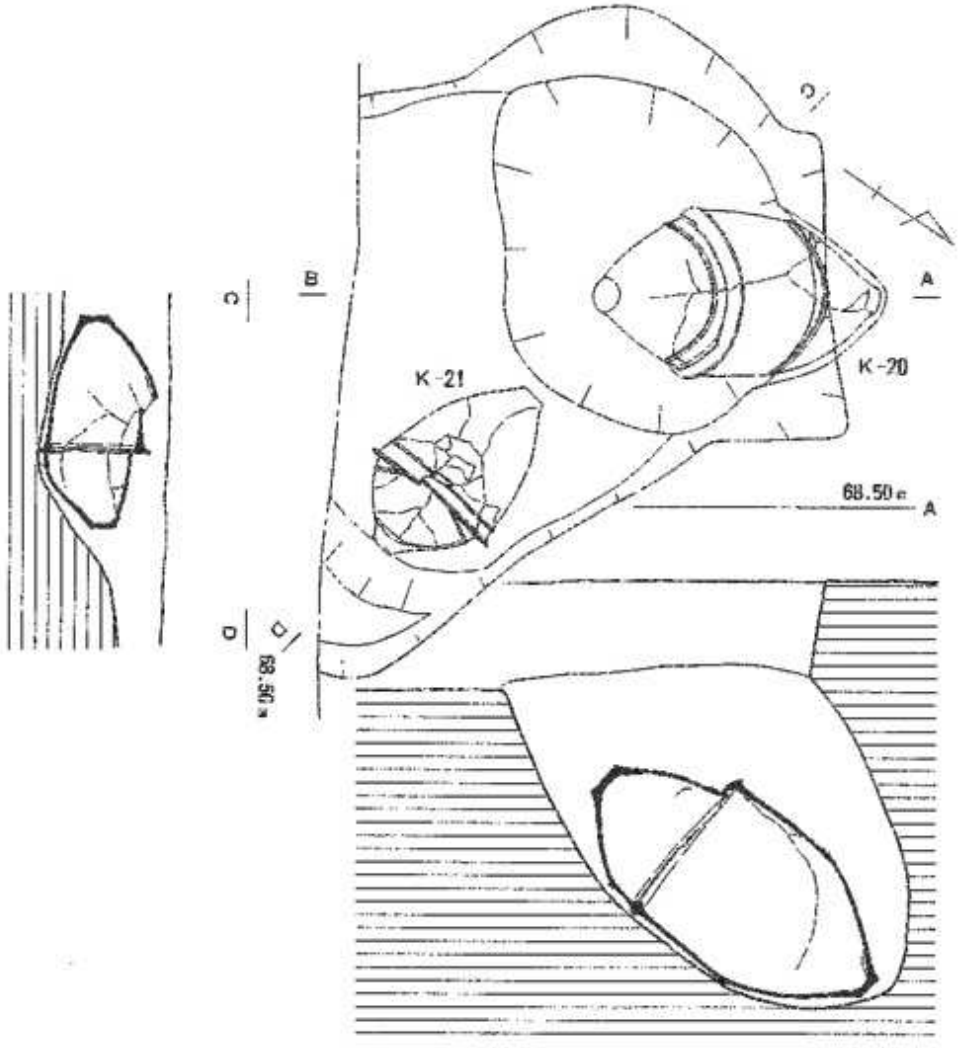
19号甕棺墓は、甕形土器2個を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N47° W・傾斜角度38° で埋置されている。棺内から、人骨片が出土した。

18号甕棺墓は、下甕に甕形土器、上甕に頸部から上を打ち欠いた壺形土器を用いた、小児用の、上甕が下甕にやや挿入された合わせ口甕棺墓で、主軸N62° W・傾斜角度4° で埋置されている。

墓壙は、1.96m×1.73mの方形で、その南東側に横穴を掘って19号甕棺墓の下甕を挿入しており、その方向が墓壙の対角線方向というのが印象的である。

20号甕棺墓（第10図　図版11）

下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた、成人用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N145° E・傾斜角度38° で埋置されている。



第10図　20・21号甕棺墓実測図（1／30）

墓壙は、21号との切り合いによって不明なところがあるが、1.5m×1.3m程度の方形であったと思われ、その北西側に横穴を掘って下甕を挿入している。ただし、断面で見るかぎり、横穴を掘ったというよりは、墓壙を斜めに掘ったといった状況である。

21号甕棺墓（第10図　図版11）

下甕に甕形土器、上甕に肩部から上を打ち欠いた壺形土器を用いた、小児用の、接口式の甕棺墓で、主軸N99°E・傾斜角度0°で埋設されている。

墓壙は、先述の20号との切り合いや調査区外にかかったということで不明であるが、二段に掘り込まれていたと考えられる。

また、この墓壙床面と同一レベルで礫が検出されたが、調査区外にかかった別の遺構のものであろうと考えている。

22号甕棺墓（第11図　図版12）

甕形土器2個を用いた、成人用の、単棺式の甕棺墓で、主軸N143°E・傾斜角度10°で埋置されている。蓋の痕跡は確認できなかった。

墓壙は、18・19号甕棺墓に切られていて、さらに23号甕棺墓との切り合いによって、不明であるが、一辺1.6m程度の方形に近いものであったと思われる。

また、前後関係では、残存の状況からして、23号甕棺墓より後に営まれたと考えられる。

23号甕棺墓（第11図　図版12）

下甕に大型の甕形土器、上甕に小型の甕形土器2個を用いた、成人用の、合わせ口甕棺墓で、主軸N127°E・傾斜角度3°で埋置されている。棺内から、人骨の小片が出土した。

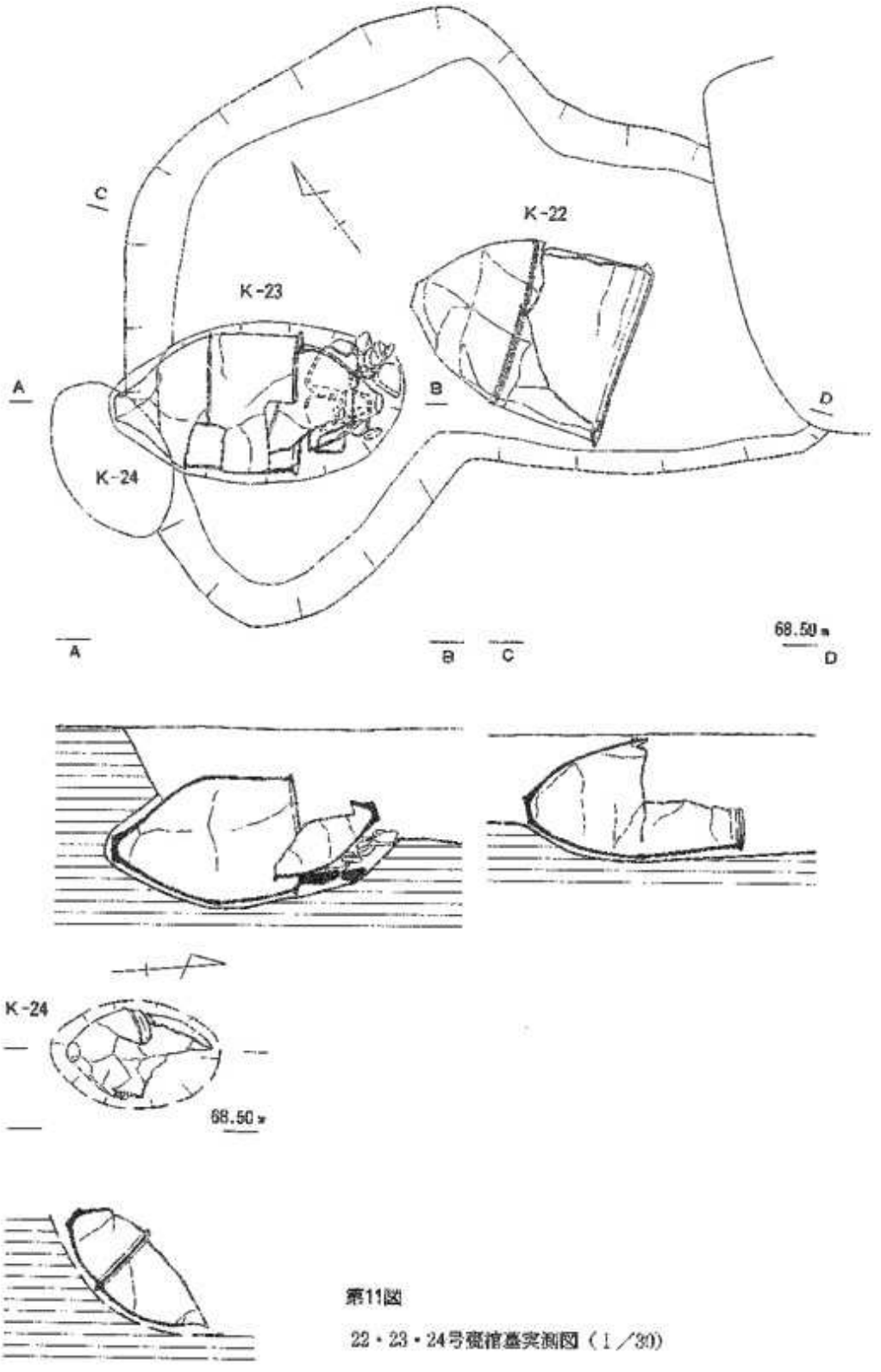
上甕が変則的なため、充分に蓋をすることができず、礫によって上甕を支えている。

墓壙は、22号との切り合いで不明なところがあるが、長径2.87m・短径1.8m程の不定形で、その北西側に横穴を掘って、下甕を挿入している。

24号甕棺墓（第11図　図版13）

下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた、小児用の、接口式の合わせ口甕棺墓で、主軸N175°E・傾斜角度42°で埋置されている。棺内から、人骨片が出土した。

23号甕棺墓の下甕を取り上げる際に検出したため、明確な墓壙は確認することができなかった。23号甕棺墓の土壙による破壊を受けていないので、23号甕棺墓より後に営まれたのは確実である。甕棺墓は、ほぼ完全な形で残存していたが、調査中に、下甕の半分ほどと上甕の一部が崩落してしまった。



第11図

22・23・24号横穴墓実測図（1／30）

(2) 甕棺

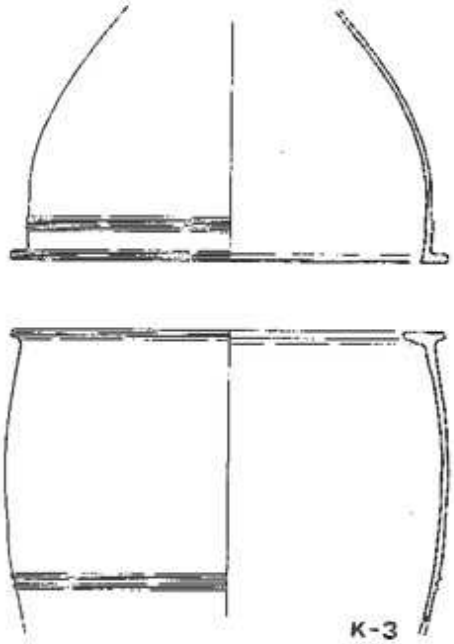
出土した22基の甕棺墓に用いられた甕棺について、成人棺と小児棺とに分けて、個別に説明を行なうことにする。

3号甕棺（第12図　図版14）

遺構が大きく削られていたため、上甕、下甕ともに残存部位は少ない。

下甕は、甕形土器で、胴部下半は失われているが、復元口径62.4cm・復元胴部最大径63.8cmを測る。口縁部は内側に大きく発達したT字状を呈し、胴部中位に二条の三角突帯を付している。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが焼成は良好である。外面口縁部付近に黒斑が見られる

上甕は、鉢形土器で、底部付近は失われているが、復元口径63.0cmを測る。口縁部はL字状を呈し、口縁下に二条の三角突帯を付している。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好である。外面下部に黒斑が見られ、外面の一部に黒色顔料がわずかに残っている。



第12図　3号甕棺実測図（1／12）

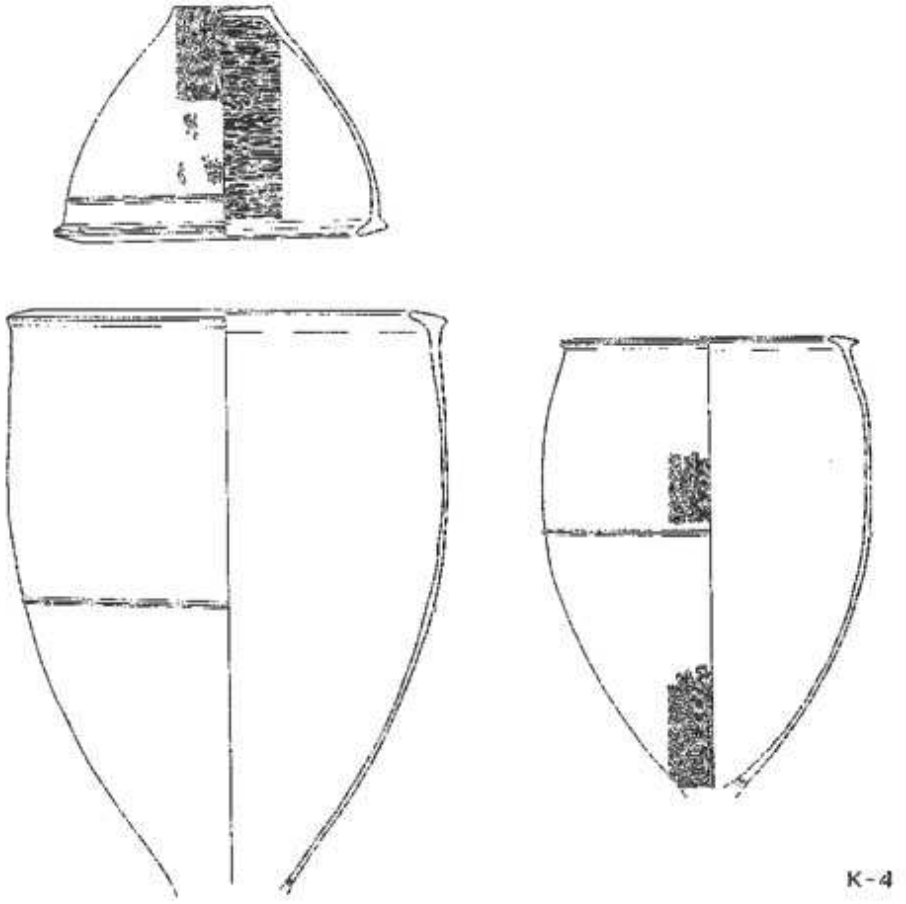
4号甕棺（第13図　図版15）

下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた甕棺墓であるが、上甕の口径が下甕に比べて小さいため、それを補うために、別の甕形土器を上甕の補助と支えに使っている。

下甕は、底部を欠いているが、口径67.3cm・胴部最大径67.4cmを測る。外傾するT字状口縁は内側に大きく発達しているが外側のそれは小さく、胴部中位に一条の三角突帯を付している。器面調整は、内外面ともにナデで仕上げている。胎土にわずかに砂粒を含むが、焼成は良好である。胴部中位の内外面に黒斑が見られる。

上甕は、器高35.7cm・口径50.8cm・底径15.0cmを測る。内側に発達した、外傾するT字状口縁下に一条の三角突帯を付しており、底部はやや上げ底気味である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目の後上半をナデ消し、内面は横方向のヘラ磨きを施しており、内面底部付近に指頭圧痕が見られる。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、外面底部付近に黒斑が見られる。顔料が塗布されており、内面下半と外面の一部に黒色、内面上半と口縁部上面に赤色の顔料が見られる。

補助と支えに使われていた甕形土器は、底部を欠いているが、口径45.6cm・胴部最大径50.1cmを測る。わずかに外傾するT字状口縁を持ち、胴部中位に一条の三角突帯を付している。下



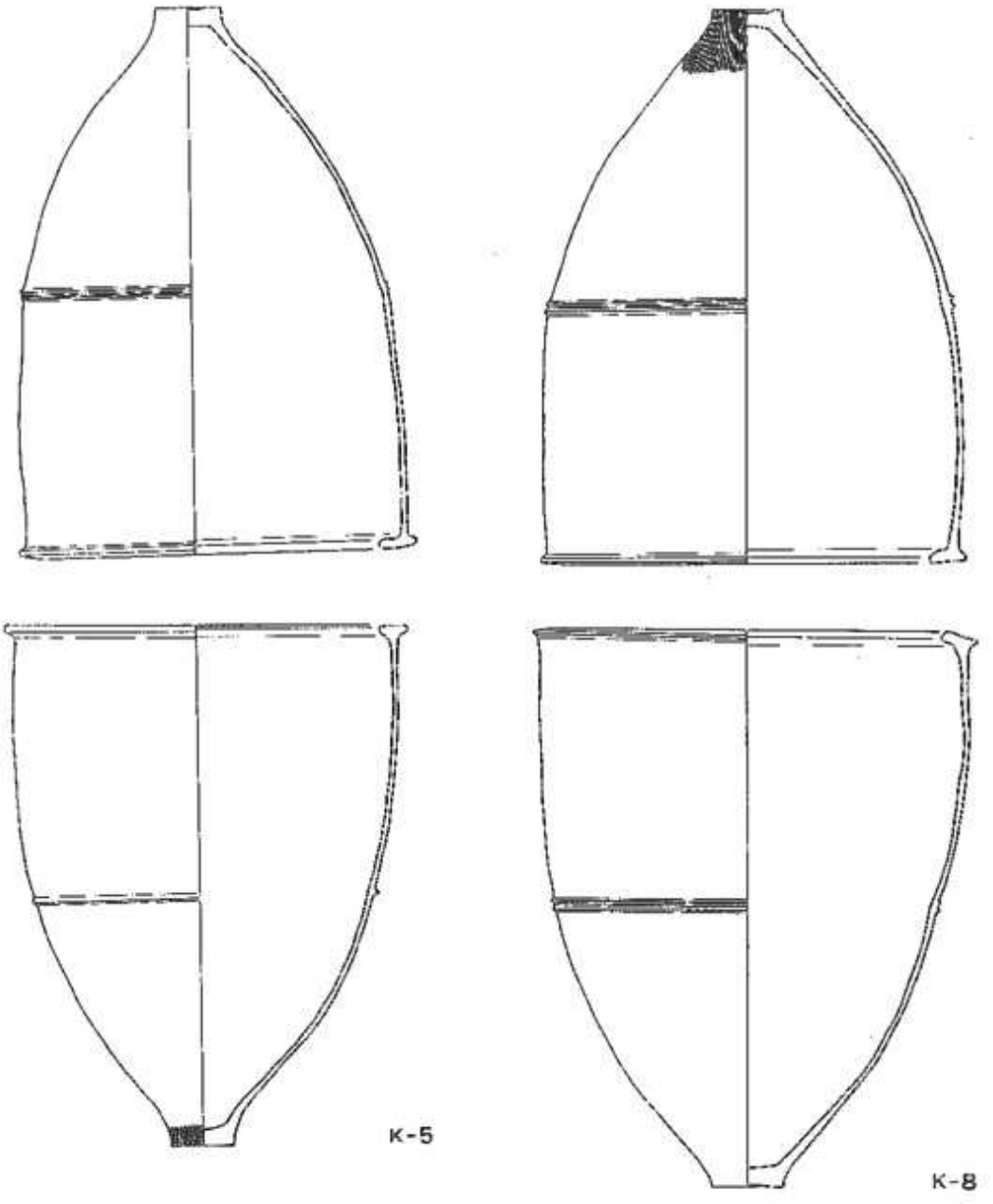
第13図　4号甕棺実測図（1／12）

甕に比べて、口縁下のすぼまりは強い。器面調整は、外面は縦方向のハケ目の後ナデて仕上げているが、突帯上方と底部付近にハケ目が残っている、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、底部付近の内外面に黒斑が見られる。外面に、塗布された黒色顔料が残っている。

5号甕棺（第14図　図版14）

下甕は、甕形土器で、器高83.6cm・口径63.4cm・底径10.1cm・胴部最大径60.6cmを測る。口縁部はT字状を呈し、胴部中位やや下方に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げているが、外面底部付近にハケ目が残っている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。内外面ともに、黒色顔料の塗布が見られる。

上甕は、甕形土器で、器高86.9cm・口径62.4cm・底径10.6cm・胴部最大径60.6cmを測る。口縁部は内側に発達したやや外傾するT字状を呈し、胴部中位に二条の連接する三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面口縁部付近と内面底部付近に黒斑が見られる。内外面ともに、黒色



第14図　5・8号甕棺実測図（1／12）

顔料の塗布が見られる。

8号甕棺（第14図　図版16）

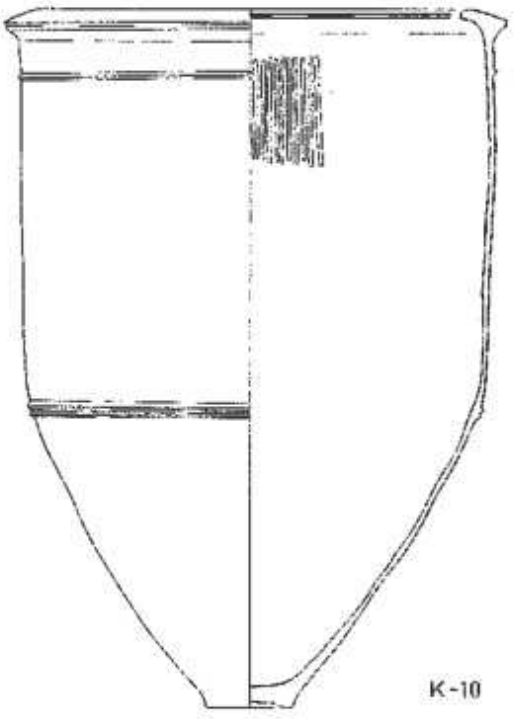
下甕は、甕形土器で、器高91.1cm・口径71.9cm・底径11.6cm・胴部最大径69.8cmを測る。口縁部は内側に大きく発達した外傾するT字状を呈し、胴部中位に二条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、

焼成は良好で、外面胴部下半に黒斑が見られる。内外面とも、黒色顔料が見られ、刷毛状の工具で塗布したのがよくわかる部位もある。

上甕は、甕形土器で、器高90.9cm・口径69.1cm・底径11.2cm・胴部最大径68.2cmを測る。口縁部は内側に大きく発達したやや外傾するT字状を呈し、胴部中位に二条の三角突帯を付し、底部は上げ底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げているが、外面底部付近に縦方向のハケ目が残っている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面胴部上半に黒斑が見られる。外面に、赤色顔料を塗布したのではないかと思われる部位がある。

10号甕棺（第15図　図版16）

9号甕棺と合葬された、女性の成人人骨が出土したものである。



第15図　10号甕棺実測図（1／12）

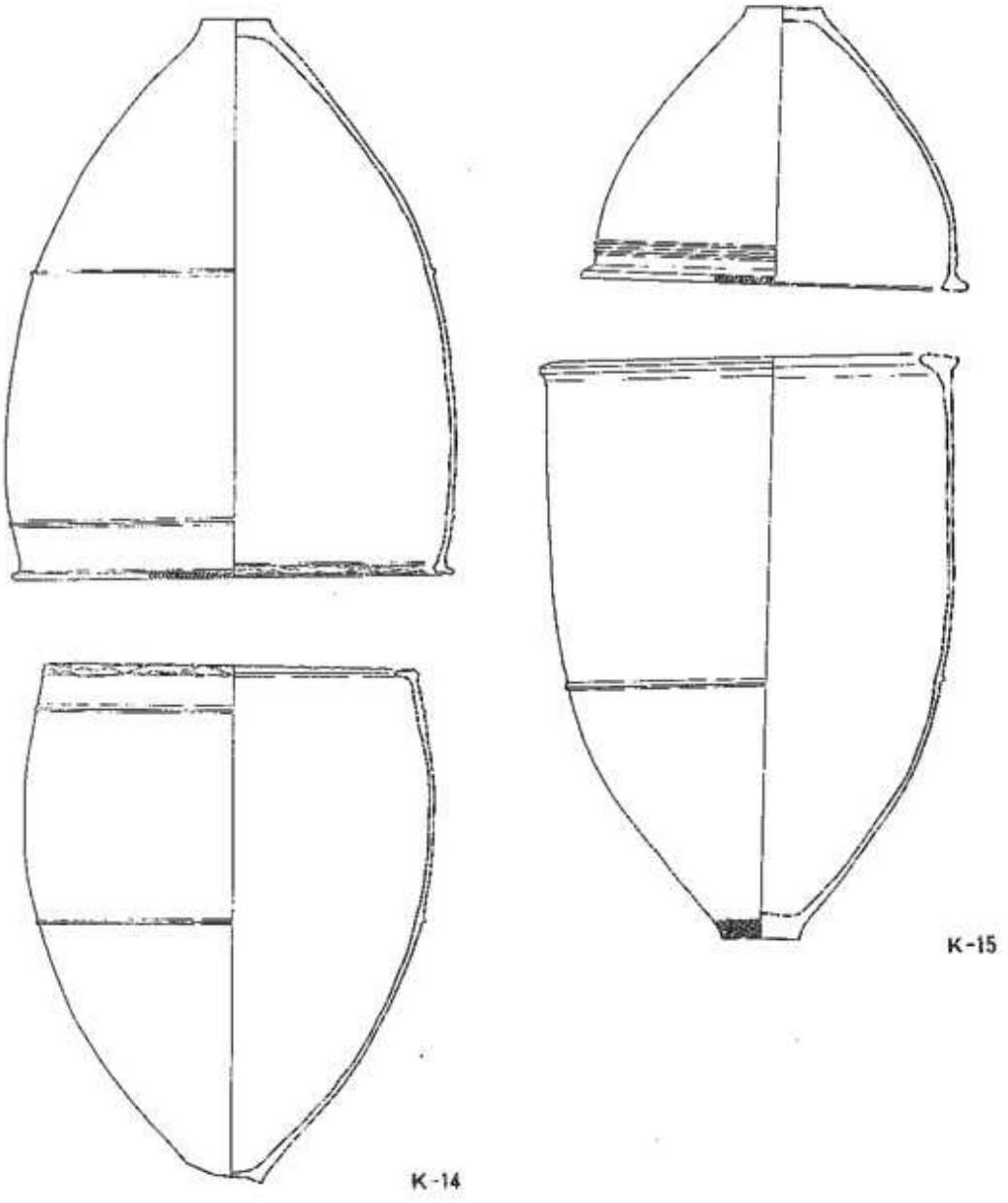
甕形土器を用いた単棺式で、器高100.3cm・口径72.3cm・底径12.5cm・胴部最大径67.8cmを測る。口縁部は外傾する充実したT字状を呈し、口縁端部は窪んでおり、内側のそれはより明瞭である。口縁下に一条、胴部中位やや下方に二条の三角突帯を付し、底部は上げ底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げているが、内面口縁部付近に幅約15cmにわたってへら状工具によるミガキが見られ、暗文状になっている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。内外面ともに、黒色顔料を塗布している。

14号甕棺（第16図　図版17）

12・13号甕棺と合葬されたものである。

下甕は、甕形土器で、器高82.4cm・口径58.4cm・胴部最大径64.6cmを測る。口縁部はやや内傾するT字状を呈していたと考えられるが、上甕に挿入するために外側を打ち欠いている。また、底部も打ち欠いており、土壙内には欠損部位は無かったので、少なくとも埋納時には失われていたのは確実である。口縁下と胴部中位にそれぞれ一条の三角突帯を付し、口縁下はかなりすぼまっている。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好である。内外面ともに、わずかに黒色顔料の痕跡らしきものが見られるが、全面に塗布されていたかは疑問である。

上甕は、甕形土器で、器高89.0cm・口径69.8cm・底径10.8cm・胴部最大径71.0cmを測る。口縁部はやや内傾するT字状を呈していたと考えられるが、下甕とは逆に内側を打ち欠いており、



第16図　14・15号甕棺実測図（1／12）

外側の口縁端部には刻み目を施している。口縁下と胴部中位やや下方にそれぞれ一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、内面と外面上半に黒斑が見られる。黒色顔料は確認できない。

15号甕棺（第16図　図版17）

下甕は、甕形土器で、器高93.4cm・口径66.7cm・底径12.6cm・胴部最大径64.6cmを測る。口縁部は内側に発達したやや外傾するT字状を呈し、肩部中位やや下方に一条の三角突帯を付し、

底部は平底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げているが、外面底部付近に縦方向のハケ目が残っている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面胴部上半と底部付近に黒斑が見られる。内外面とも、黒色顔料がかなりの部分で残っており、全体に塗布していたと思われる。

上甕は、鉢形土器で、器高44.6cm・口径61.6cm・底径12.1cmを測る。口縁部は外側に発達したL字状を呈し、外側端部に刻み目を施している。口縁下に連接する二条の三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をかなり含むが、焼成は良好で、外面底部付近に黒斑が見られる。突帯付近や口縁部上面の一部に丹塗りの痕跡があり、内面には黒色顔料が残っている。

16号甕棺（第17図　図版18）

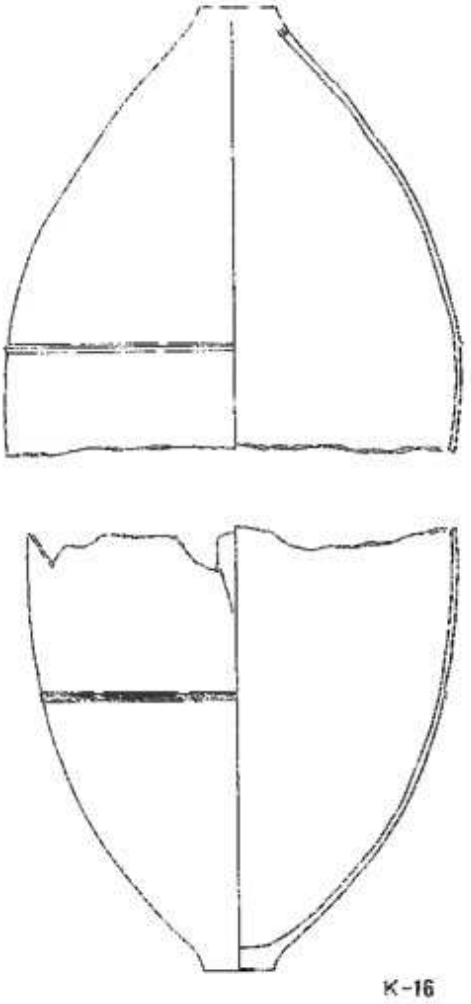
甕形土器二個を用いた合わせ口甕棺墓であるが、下甕を上甕に挿入するために、下甕、上甕ともに口縁部を完全に打ち欠いている。

下甕は、器高69.2cm・口径66.0cm・底径10.9cmを測る。胴部中位に二条の三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、外面口縁付近に黒斑が見られる。

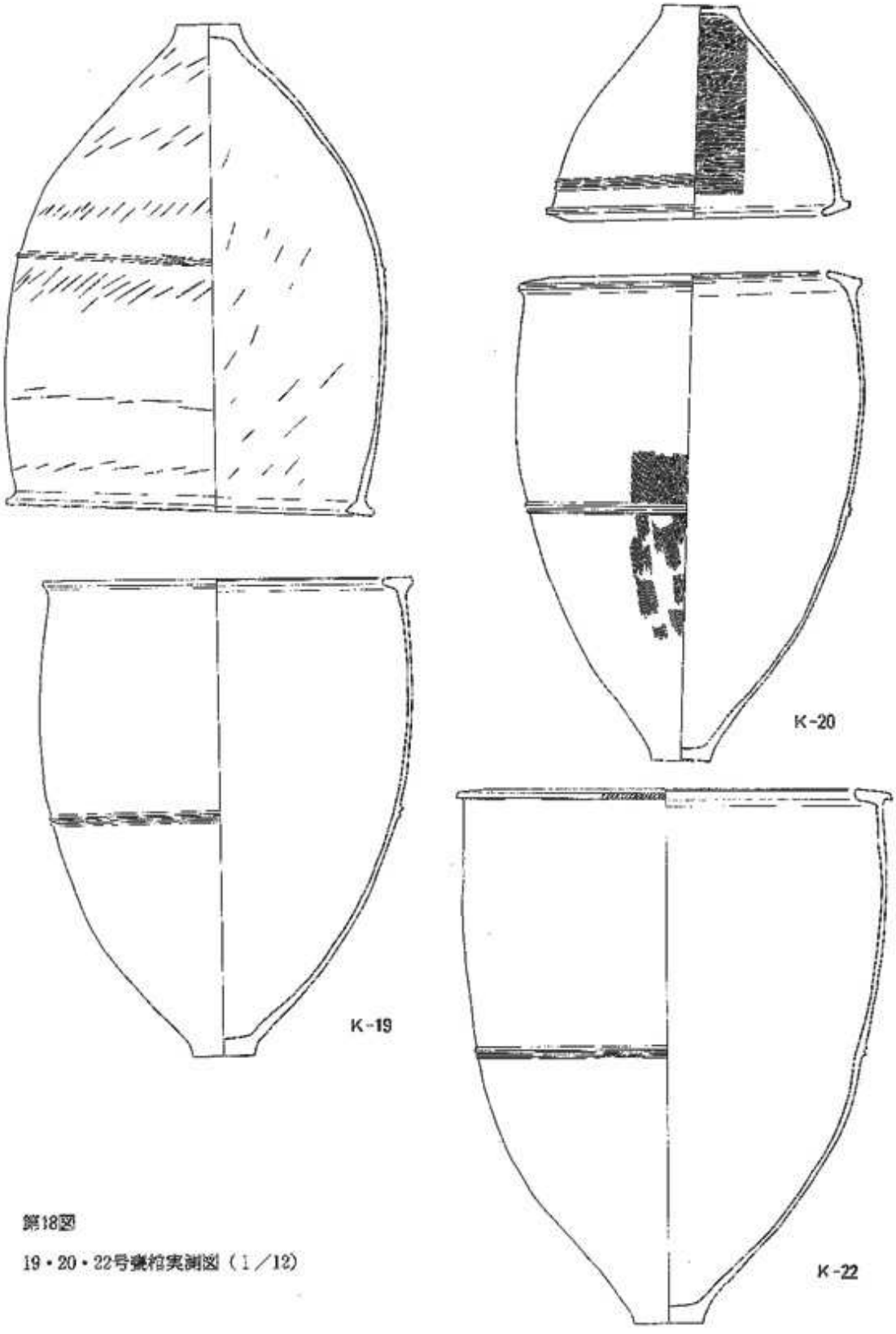
上甕は底部が失われており、口径69.2cmを測る。頸部中位に一条の三角突帯を付すが、かなりの部分で脱落しており、しかも埋土中にはほとんど検出されなかったことから、埋納当初から失われていたと思われる。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、外面底部付近と内面胴部下半に黒斑が見られる。

19号甕棺（第18図　図版18）

下甕は、甕形土器で、器高90.3cm・口径69.5cm・底径11.8cm・胴部最大径69.9cmを測る。口縁部は内側に発達したやや外傾するT字状を呈し、胴部中位に二条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、内面のかなりの部分と外面中位に黒斑が見られる。



第17図　16号甕棺実測図（1／12）



第18図

19・20・22号甕棺実測図（1／12）

上甕は、甕形土器で、器高92.3cm・口径69.2cm・底径12.1cm・胴部最大径71.2cmを測る。口縁部はやや外側に発達したT字状を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を付しているがその端部は連続していない。底部は平底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げているが、内外面とも板状工具の痕跡が残っており、特に外面のそれは、文様として施しているようである。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、内外面とも胴部下半に黒斑が見られる。

20号甕棺（第18図　図版19）

下甕は、甕形土器で、器高90.1cm・口径64.8cm・底径11.1cm・胴部最大径64.6cmを測る。口縁部は内側に大きく発達した外傾するT字状を呈し、胴部中位やや下方に連接する二条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。口縁下のすぼまりはやや強い。器面調整は、内外面ともナデで仕上げているが、外面の胴部中位突帯部付近にハケ目が残っている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面胴部上半と内面上半および底部付近に黒斑が見られる。内外面に黒色顔料が残っている。

上甕は、鉢形土器で、器高39.8cm・口径56.6cm・底径13.9cmを測る。口縁部は内側にやや発達した外傾するT字状を呈し、口縁下に二条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、口縁部から外面にかけてはナデで仕上げているが、内面は横方向のヘラ磨きを施している。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、底部の内外面に黒斑が見られる。口縁部上面や内面口縁部付近に黒色顔料が残り、口縁部付近には丹塗りも見られる。

22号甕棺（第18図　図版19）

甕形土器を用いた単棺式の甕棺で、器高94.5cm・口径76.5cm・底径12.1cm・胴部最大径74.3cmを測る。口縁部は内側に大きく発達したT字状を呈し、外側端部に刻み目を施している。胴部中位に二条の三角突帯を付しているが下側の突帯はその端部が連続していない。底部は一部を残すのみであるが平底であったと思われる。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をかなり含むが、焼成は良好で、外面上半と内面底部付近に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っている。

23号甕棺（第19図　図版20）

上甕に、小型の甕形土器を２個使用している。

下甕は、甕形土器で、器高80.9cm・口径76.8cm・底径10.9cm・胴部最大径60.8cmを測る。口縁部は内側にやや発達したT字状を呈し、胴部中位に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。口縁下のすぼまりがやや強い。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、外面上半と底部付近に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っており、全体に塗布されていたと考えられる。

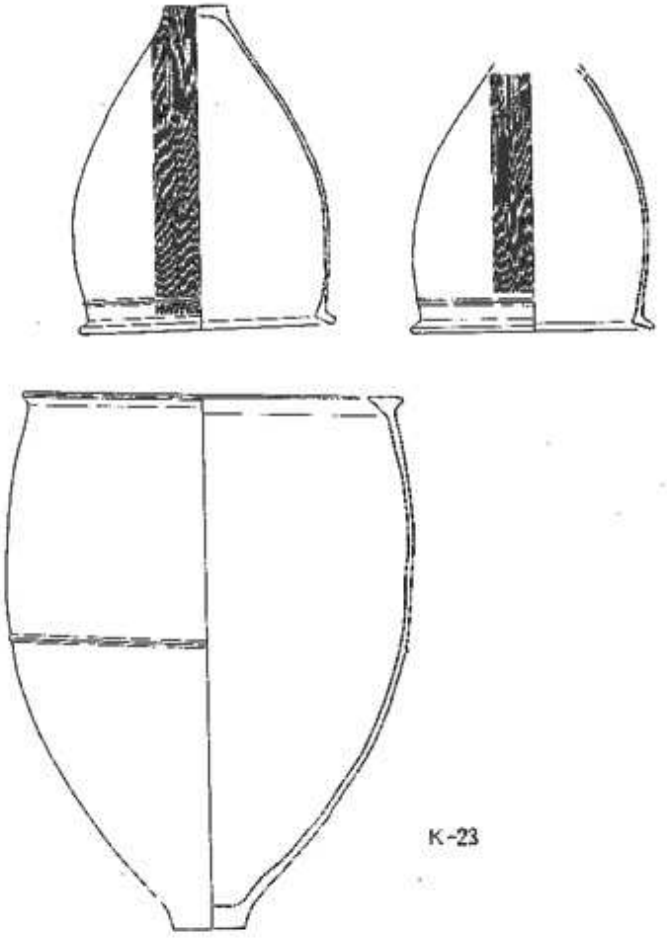
上甕の一方は、器高48.7cm・口径38.3cm・底径9.2cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施

し、口縁部から内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、外面の胴部中位と底部付近に黒斑が見られる。

上甕の他方は、補助的に使用されたもので、底部は検出しなかった。口径36.4cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付している。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。

両者ともに、外面に煤の付着が見られ、日常使用土器の転用であることが分かり、内外面ともに黒色顔料の塗布が見られる。

以上が、成人棺についての所見である。つづいて、小児棺について記述する。

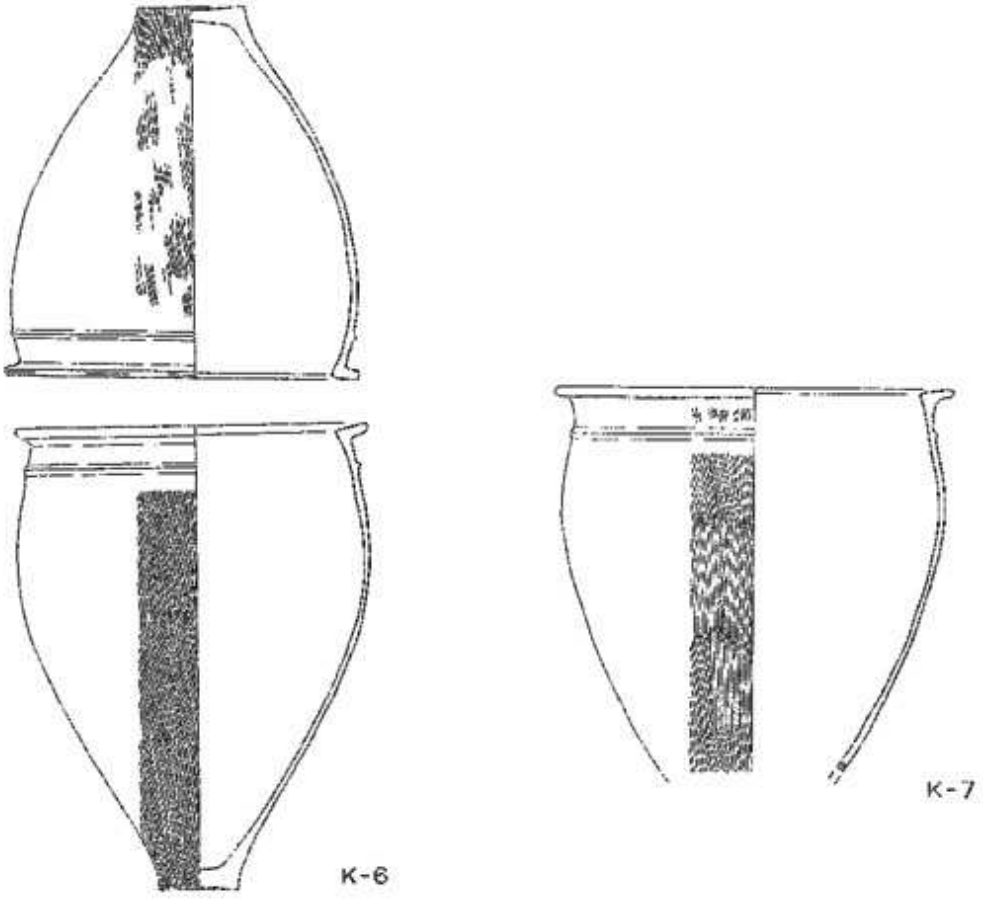


第19図　23号甕棺実測図（1／12）

6号甕棺（第20図　図版21）

下甕は、甕形土器で、5号甕棺墓によって底部から1／3ほどを壊されていたが、5号甕棺墓の埋土の中からかなりの部分が発見され全体を復元することができた。器高47.9cm・口径36.3cm・底径8.3cm・胴部最大径36.4cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、外面の突帯から下は縦方向のハケ目を施し、突帯から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面底部付近に黒斑が見られる。内外面とも全体に黒色顔料の塗布が見られる。

上甕は、甕形土器で、器高37.7cm・口径36.5cm・底径10.9cm・胴部最大径35.7cmを測る。口縁部はやや小さめでわずかに内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、外面の突帯から下は縦方向のハケ目ののちナデており底部に



第20図　6・7号甕棺実測図（1／8）

近いところのみ鮮明に残り、突帯から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、底部の内外面に黒斑が見られる。外面に赤色顔料の塗布が見られる。

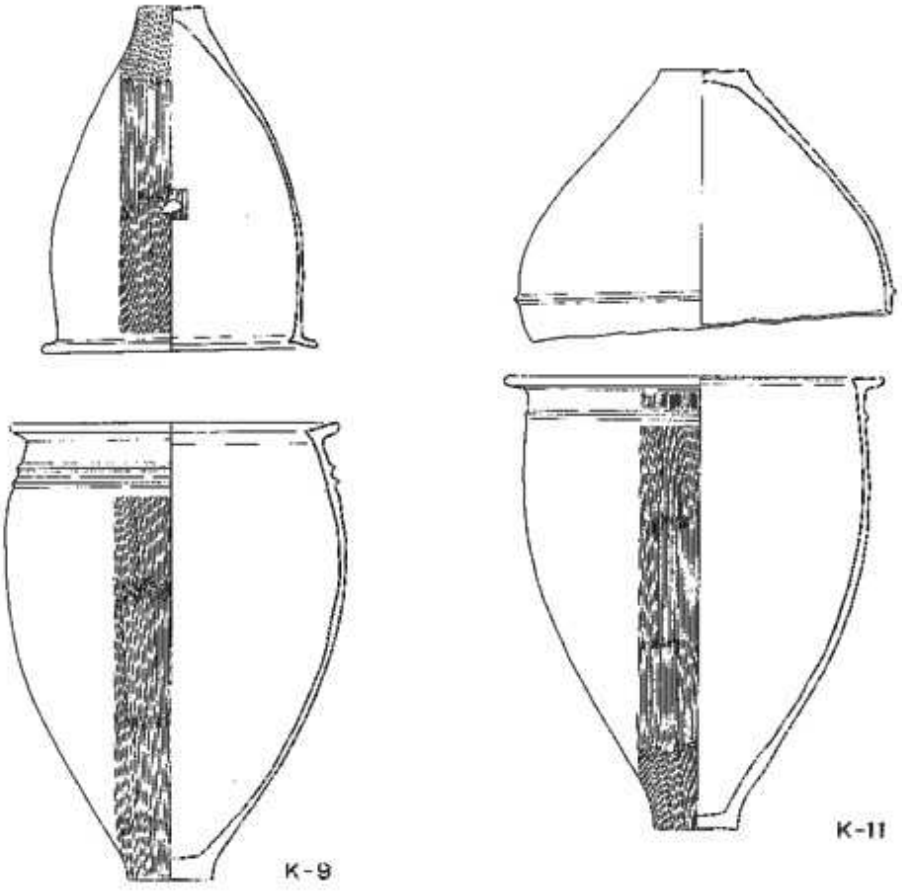
7号甕棺（第20図　図版21）

甕形土器で、底部は完全に失われており、口径41.1cm・胴部最大径39.5cmを測る。口縁部はわずかに内傾するL字状を呈し、口縁下に三角突帯を付している。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。内面に黒色顔料の痕跡が見られるが、外面では確認できない。

9号甕棺（第21図　図版22）

10号甕棺と同時に合葬された甕棺である。

下甕は、甕形土器で、器高47.3cm・口径34.2cm・底径8.6cm・胴部最大径35.2cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、口縁下に二条の三角突帯を付し、底部は平底で、口縁下のすぼまりがやや強い。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で、外面の胴部中位と底部付近に黒斑が



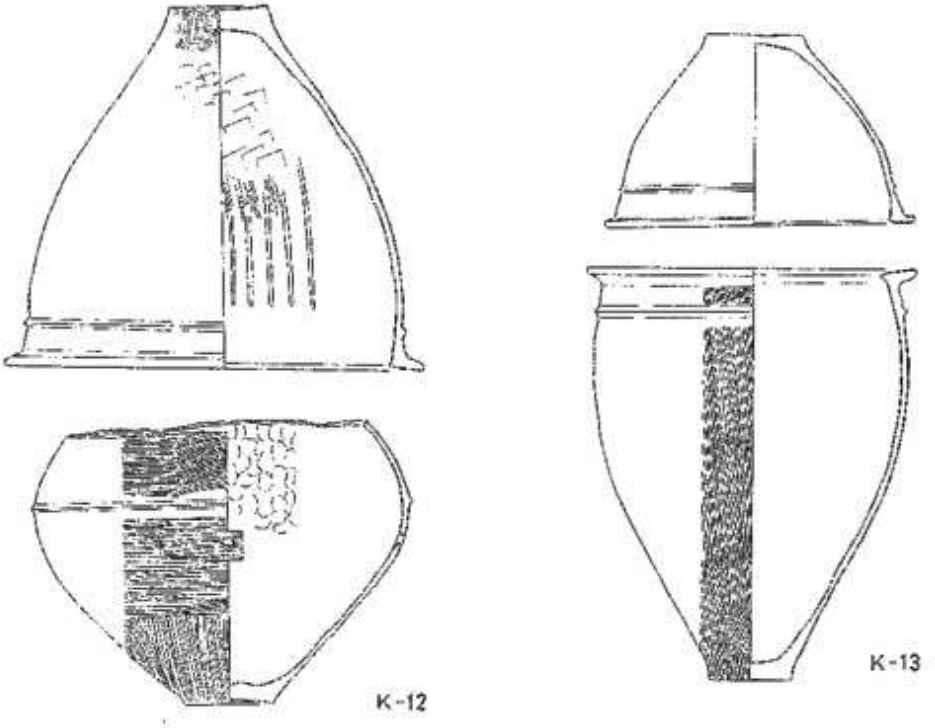
第21図　9・11号甕棺実測図（1／8）

見られる。外面に黒色顔料が残っている。

上甕は、甕形土器で、器高35.6cm・口径28.5cm・底径6.6cm・胴部最大径25.9cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、底部はやや上げ底で、突帯は付されていない。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面はナデで仕上げている。胎土に砂粒をかなり含むが、焼成は良好で、口縁部上面と底部の内外面に黒斑が見られる。胴部中位に穿孔が見られる。下甕と異なり顔料の塗布は確認できない。

11号甕棺（第21図　図版22）

下甕は、甕形土器で、器高46.8cm・口径39.0cm・底径8.5cm・胴部最大径35.6cmを測る。口縁部はほぼ水平のL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面はナデで仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好で、底部内外面に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っている。



第22図　12・13号甕棺実測図（1／8）

上甕は、壺形土器の肩部から上を打ち欠いて使っており、器高28.5cm・口径36.9cm・底径9.1cm・胴部最大径（突帯部）39.4cmを測る。胴部中位に一条の三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、底部内外面に黒斑が見られる。外面に黒色顔料が残っている。

12号甕棺（第22図　図版23）

14号甕棺と合葬された二基の小児甕棺のうちの一つである。

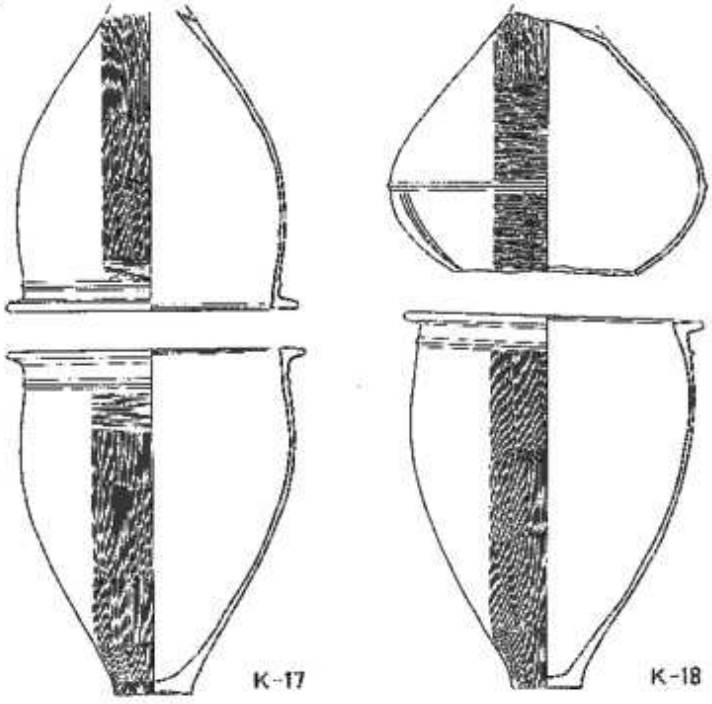
下甕は、壺形土器の頸部から上を打ち欠いて使っており、器高29.4cm・口径30.8cm・底径9.1cm・胴部最大径（突帯部）39.4cmを測る。胴部中位に一条の三角突帯を付し、底部は上げ底である。器面調整は、外面は縦方向と横方向の磨きを施しており、内面はナデで仕上げているが胴部上半には指頭圧痕が見られる。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。外面に黒色顔料が塗布されているため、黒色磨研の様相を呈している。胴部中位に穿孔がある。

上甕は、甕形土器で、器高37.5cm・口径43.3cm・底径10.0cm・胴部最大径38.6cmを測る。口縁部はやや内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部はやや上げ底である。器面調整は、内外面ともナデで仕上げているがナデた時の工具の痕跡が残っている、外面底部付近にはハケ目が残っており、さらに内面上半には磨きによる暗文がみられる。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。

13号甕棺（第22図　図版23）

12号甕棺と同様に14号甕棺と合葬された小児甕棺である。

下甕は、甕形土器で、器高42.6cm・口径34.1cm・底径8.5cm・胴部最大径32.4cmを測る。口縁部はやや内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、外面底部付近にわずかに黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っていて、内面の残り方はさほど良くないが指でナデたような条線状の部分が見られる。



第23図　17・18号甕棺実測図（1／8）

上甕は、鉢形土器で、器高19.8cm・口径31.9cm・底径9.9cmを測る。口縁部はL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で、外面下半に黒斑が見られる。口縁部の上面から内面にかけて丹の付着が見られるが、全体に塗布されてはいなかったと思われる。また、外面下半に線状のものが見られるが、黒色顔料塗布の可能性もある。

17号甕棺（第23図　図版24）

下甕は、甕形土器で、器高35.7cm・口径30.7cm・底径7.9cm・胴部最大径28.0cmを測る。口縁部はL字状を呈し、口縁下に一条の弱い三角突帯を付し、底部はわずかに上げ底である。口縁部の内側の一部には、故意に打ち欠いたと思われる部位も見られる。器面調整は、外面は主に縦方向のハケ目を施しているが、突帯の下には横方向のハケ目といえるような強い横ナデが見られる。口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をかなり含むが、焼成は良好で、外面底部付近に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っている。

上甕は、甕形土器で、底部を失っており、口径30.0cm・胴部最大径27.5cmを測る。口縁部はわずかに内傾するL字状を呈し、下甕と同様に口縁下に弱い三角突帯を付している。器面調整も下甕と同様に、外面は主に縦方向のハケ目を施しているが、突帯の下には横方向のハケ目と

いえるような強い横ナデが見られる。口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で、外面下半に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っている。

18号甕棺（第23図　図版24）

19号甕棺と合葬された小児甕棺である。

下甕は、甕形土器で、器高38.6cm・口径30.9cm・底径7.2cm・胴部最大径29.2cmを測る。口縁部はわずかに内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好である。内外面ともに黒色顔料が残っており、外面中位には煤の付着も確認できる。

上甕は、壺形土器の頸部から上を打ち欠いて使っており、器高26.5cm・口径18.7cm・底径10.5cm・胴部最大径32.9cmを測る。胴部中位に一条の三角突帯を付している。底部は打ち欠かれているが、埋納位置などから考えて、これは後世の攪乱などによるものではなく埋葬時にすでに打ち欠かれていたと思われる。器面調整は、内面はナデて仕上げているが、外面は磨きを施しており、底部付近は縦その他は横方向の磨きである。突帯部より上の胴部上半に3本を一単位とした縦方向の条線が五か所見られるが、この条線は打ち欠かれた口縁端部で交わっており、頸部以上を打ち欠いた後に施されたことが分かる。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好である。外面には黒色顔料が塗布されており、特に、下甕によって覆われていた口縁部付近は明瞭に残っている。

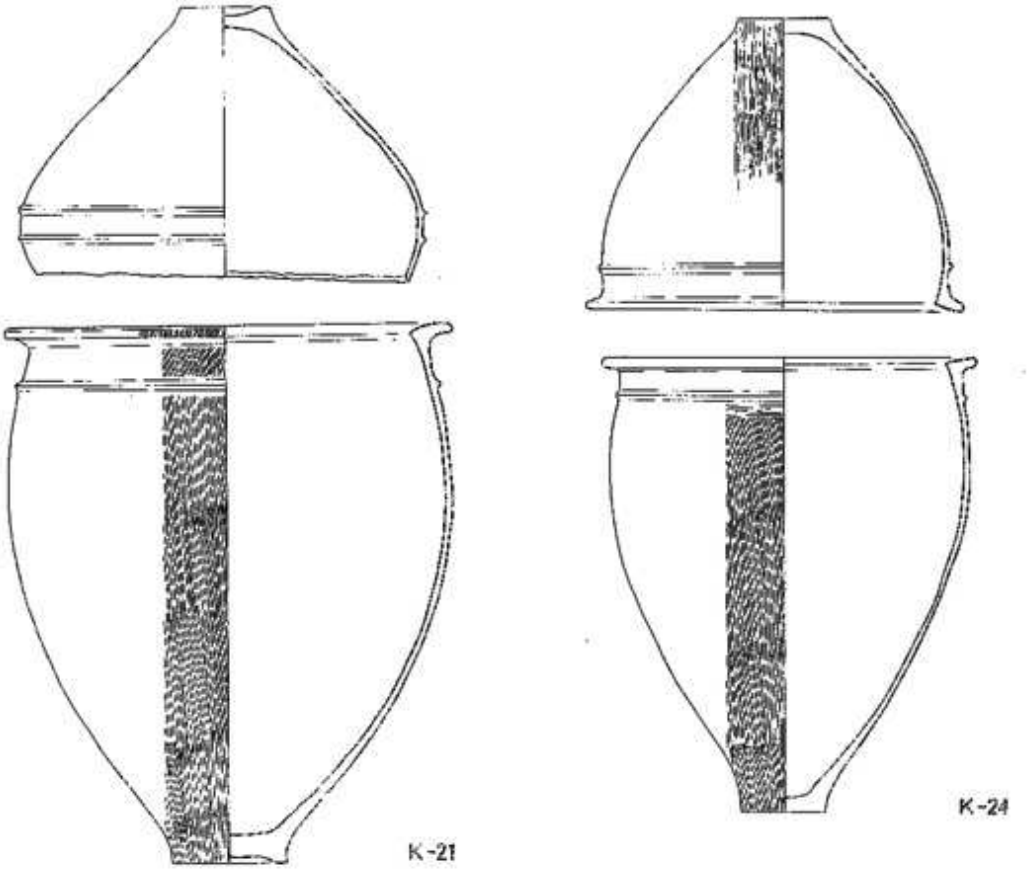
21号甕棺（第24図　図版25）

下甕は、甕形土器で、器高55.8cm・口径46.2cm・底径11.9cm・胴部最大径45.7cmを測る。口縁部は上面が丸みを持つ内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は上げ底である。口縁の外側端部に刻み目を施しており、胴部の張りがやや強い土器である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目を施し、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒をわずかに含むが、焼成は良好である。外面のほぼ全体と内面の下半に黒色顔料が見られ、これとは別に外面の中位から下半にかけてかなりの量の煤が見られる。

上甕は、壺形土器の上半を打ち欠いて使っており、器高28.0cm・口径38.2cm・底径9.4cm・胴部最大径42.1cmを測る。胴部中位に二条の三角突帯を付し、底部は上げ底である。器面調整は、内外面ともナデて仕上げている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。外面の大部分と内面の一部に黒色顔料が残っている。

24号甕棺（第24図　図版25）

下甕は、甕形土器で、器高47.1cm・口径38.6cm・底径8.6cm・胴部最大径37.1cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、



第24図　21・24号甕棺実測図（1／8）

外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をやや含むが、焼成は良好で、底部の内外面に黒斑が見られる。外面のかなりの部分と内面の一部に黒色顔料が残っており、外面中位から下半にかけては煤の付着も見られる。

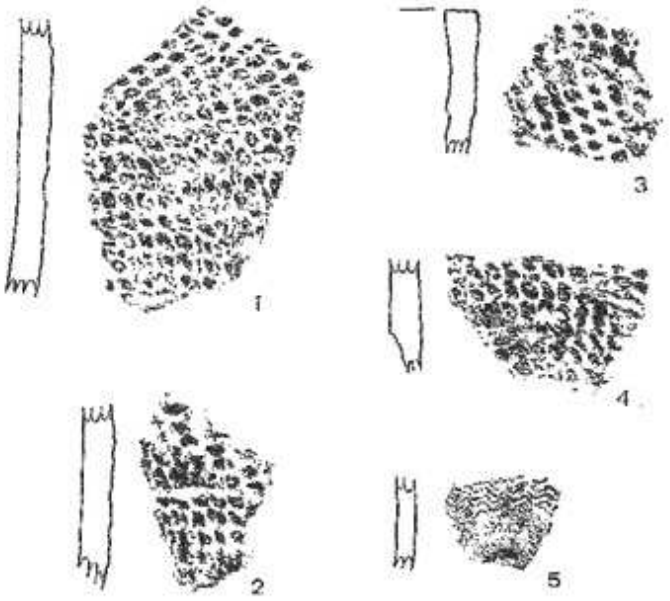
上甕は、鉢形土器で、器高30.3cm・口径38.8cm・底径9.4cmを測る。口縁部は内傾するL字状を呈し、口縁下に一条の三角突帯を付し、底部は平底である。器面調整は、外面下半に縦方向の磨きが見られるが上半は器表の摩滅が著しいため不明で、口縁部から内面にかけてはナデて仕上げている。胎土に砂粒をかなり含むが、焼成は良好で、外面底部付近に黒斑が見られる。内外面ともに黒色顔料が残っている。

(3)　縄文式土器（第25図　図版26）

表土層および甕棺墓の埋土内から出土した縄文式土器のうち図示可能な5点について記す。なお、全体では、細片も含めて11点が出土し、いずれも押し型文土器であった。

1～4は梯門押し型文、5は山形押し型文である。3は口縁部の破片であるが、他は胴部の破片で、いずれも器形を特定することはできない。1は12号甕棺墓の土壙埋土内から出土した

もので、胴部中位と思われるが、残存部の中位に横方向の指頭幅ほどの窪みが見られ、このあたりを境に文様の方向が、上側が横方向、下側が斜め上方向と変わっている。内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、やや赤みがかった暗黄褐色を呈している。2は16号甕棺墓の土壙埋土内から出土したもので、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、外面は暗褐色、内面は淡赤褐色を呈している。外面には黒色顔料の塗布ではないかと思われる部位もある。3は16号甕棺墓の土壙埋土内から出土したもので、口縁部の破片である。内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、やや赤みがかった暗黄褐色を呈している。内面の下方に接合部が剥離した痕跡が残っている。4は9・10号甕棺墓の土壙埋土内から出土したもので、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、やや赤みがかった暗黄褐色を呈している。この個体にも、内面の下方に接合部が剥離した痕跡が残っている。5は9・10号甕棺墓の土壙埋土内から出土したもので、山形押し型文の施文部と無文部の境あたりの部位の破片で、内面はナデて仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈している。外面には黒色顔料の塗布ではないかと思われる部位もある。



第25図　縄文式土器拓影（1／3）

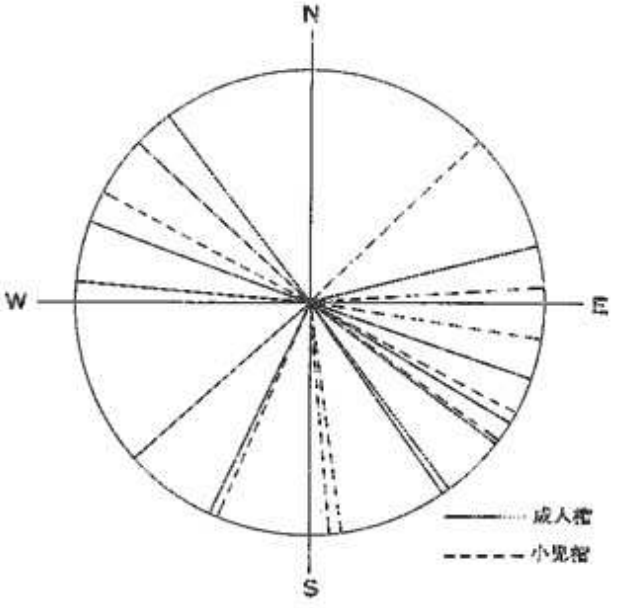
Ⅳ．まとめ

高上石町遺跡の今回の調査が、これまでの経過からして弥生時代の甕棺墓群が存在しているのは確実という状況のもとで実施されたのは、先述のとおりである。調査開始の原因の性格上約200㎡という極めて限定された狭い範囲での調査で遺跡の全容を明らかにはできなかったが、予想どおり残りの良い甕棺墓群が存在することが確認されたほか、いくつかの点において非常に興味ぶかい成果を上げることができた。ここでは、それらの特徴について述べて、今回の報告のまとめとしたい。

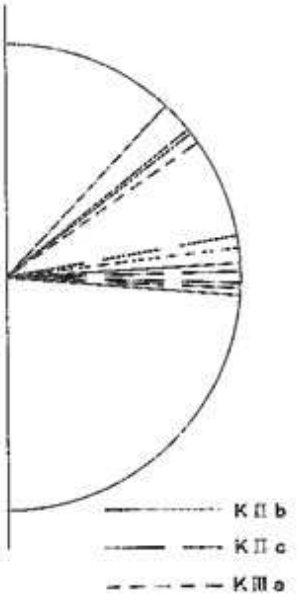
調査では、成人棺12基、小児棺10基の計22基を検出したが、これらが埋葬された時期は、弥生時代中期中葉である。それぞれを橋口編年(註10)にしたがって成人棺を分類すると、全体の型式はＫⅡｂからＫⅢａの範疇に含まれる。具体的には、ＫⅡｂが３・４・16・19・20・23号、ＫⅡｃが５・８・15・22号、ＫⅢａが10・14号となる。なお、16号は口縁部を打ち欠いているが、胴部の突帯の位置やややすぼまるプロポーションからＫⅡｂとした。また、かつて調査した１号と２号は、それぞれＫⅡｂとＫⅡｃである。

調査範囲が極めて限られているため、甕棺墓群全体の集合状況や列埋葬を断定的に論じることはできないが、調査区においては概ね４グループに分けることができる（①３～８号、②９～16号、③17～19・22～24号、④20・21号）。また列埋葬については、甕の上下は別として、成人棺の主軸方向が尾根線と同じ北西方向とそれからややずれる西方向の幅で集中が見られ、一定の方向性を持っているようである（第26図）。ただし、ここでは「二列埋葬」と言うより、三本以上の列を形成しているのではないかと思われる。

それぞれのグループについてみてみると、③における成人棺は23→22→19の順で西から東に向かって埋葬されているのが分かる。22と19が型式的には逆転することになるが、使用期間の重複の範囲内であると考える。また、②と④を同一の方向性を持つ一つのグループとして考えると、埋葬の順番は③とは逆に東から西へとなる。①については埋葬の順番を明らかにはしがたいが、列埋葬の一部であることはまちがいない。



第26図　甕棺墓主軸方向



第27図　成人棺の傾斜角度

次に、成人棺の埋葬時の傾斜角度について若干触れることにする。それぞれの値をまとめると第27図のようになるが、特徴的なのは4基のKⅡcの甕棺墓が10°～－3°の範囲内に納まりほぼ水平に埋置されているということであり、個体数が少ないとはいえ、KⅡbやKⅢaの甕棺墓のばらつきに比べるとその差は歴然としている。このことは、甕棺墓の傾斜角度について詳しく言及している春日市原遺跡の調査報告書(註11)の中に述べられている「(弥生時代中期中葉の) 須玖式甕棺墓では古式のタイプほど埋葬傾斜角度が小さくほぼ水平に近い状態であり、新しくなれば徐々に角度をもってくると言えよう。」という指摘に合致するものである。

さらに、今回の調査では、3組の合葬墓が確認された。9・10号、12・13・14号、17・18・19号がそれであるが、成人棺と小児棺の合葬墓については、これまで、筑紫野市永岡遺跡(註12)・春日市門田遺跡(註13)・春日市原遺跡(註14)などで確認されており、小児棺の埋葬にあたっては血縁関係のある成人棺のそばに埋納したと考えられている。

高上石町遺跡においては、9・10号の状況が他に例を見ない合葬の在り方といえる。すなわち、小児棺を追葬する形の合葬ではなく、主軸の方向や棺の埋納の位置から見て明らかに同時に埋葬されているのである。10号甕棺の中からは成年女性の人骨が出土しており、この両者は母と子であることは間違いないと考える。したがって、成人と小児（この場合は母子）を同時に埋葬する場合でも、一つの棺に納めるのではなく、それぞれに棺を用意するということを示す例となる。また、10号甕棺は単棺式が採用されているが、このことは埋葬の緊急性によるものか、あるいは小児棺との位置関係を重視することによるのか、さらには他に理由があるのか、興味ぶかいところである。

先に述べたとおり、成人棺の下甕を挿入した横穴が方形の墓壙の中心をはずれていること、3基がほぼ同じ主軸で極めて接近していることから、12・13・14号も小児棺の追葬ではなく成人棺との同時埋葬と考えられる。また、11号甕棺墓は、成人棺の墓壙を大きく切って埋葬されてはいるが、これも14号甕棺墓との合葬（追葬）の可能性がある。

17・18・19号の場合は、小児棺の追葬のようである。18号甕棺墓については、19号の土壙を全く壊さずに埋納されているため同時埋葬かとも考えたが、19号甕棺墓の横穴にずれがないことや19号甕棺に18号甕棺を埋納したときに生じたと見られる破損があることから、追葬と判断している。18号は19号をきずつけているとはいえ、墓壙を壊さぬ程度に埋土を取り除いて丁寧に追葬されているということができる。

最後に、黒色（一部赤色）顔料の塗布について若干触れることにする。高上石町遺跡においては、以前に調査した2基を含めた24基の甕棺の内22基に黒色顔料の塗布が見られたが、これは実に91.7%という高率であり、そこには成人棺と小児棺の間での差も見られない。以上のことからして、当時の甕棺葬では棺を黒く塗ることが一般的に行なわれていたといってよいと考えている。

これまで、この調査で明らかとなったいくつかの点について述べてきたが、「高上石町甕棺墓群」の全容を捉えるにはまだまだ不充分という感は否めない。これは、何度も触れたように、推定される遺跡の範囲に対して調査地域が狭いというところから生じているのであるが、例えば今回、祭祀遺構を確認することができなかったし、列埋葬などについても推定に留まっている、さらには弥生時代の遺構の下に存在していると考えられる縄文時代の遺構についても明らかにすることができなかった。

近年、開発などにともなう調査件数の増加や財政的な制約から、緊急発掘調査がそのほとんどを占め、体系的な調査を行なう機会がほとんど得られないという状況になっており、この高上石町遺跡もその様な遺跡の一つと言うことができる。さしせまった危機はないとはいえ、耕作による小規模の破壊や突然の開発計画が持ち上がるなどの恐れはある。できることならば、開発のための緊急調査ではなく、保存・活用のための全体に対する調査が実施できればと考えているところである。

最後に、末筆ながら、土地所有者の重松健児氏、人骨の鑑定と原稿執筆をお願いした中橋孝博先生、甕棺の合葬などについてご助言いただいた県教委の橋口達也氏、その他、ご協力いただいた各位に対し謝意を表して、報告を終える。

註 10. 橋口達也「甕棺の編年的研究」（福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XXXⅠ－』 1979年）

11. 木下 修編「原遺跡の調査」（福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第10集』 1979年）

12. 浜田信也、新原正典編「筑紫野市所在永岡甕棺遺跡（本文編）」（福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集』 1977年）

13. 佐々木隆彦編「春日市・門田遺跡門田地区甕棺墓群の調査」（福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第6集』 1978年）

14. 註11に同じ。

付　論

福岡県前原市高上石町遺跡出土の弥生時代人骨について

九州大学医学部解剖学教室第2講座
中　橋　孝　博

はじめに

福岡市の西隣、前原市一帯は、かつて魏志倭人伝に伊都国として登場する地域であり、三雲遺跡や平原遺跡を代表例として、これまで数多くの重要な遺跡、遺物が報告されている。地理的にも玄界灘沿岸の朝鮮半島と向かい合う位置にあり、いわゆる「一大率」が設置されていたことからも明らかなように、朝鮮半島や中国との交流、折衝、物品流通において、西の末盧国などと共に重要な役割を果たしたとされている。また、我国で最も早く稲作農耕が定着した地域の一つでもあり、いわば北部九州における弥生文化の発祥地として、その社会や当地の住人についての考察を進めていくことは、永年議論の続いている日本人の成立にまつわる疑問の解決に向けて不可欠の課題となろう。しかし、残念ながらこれまでのところ、当地域からは考古遺物はともかくも、人骨資料の出土はいまだ報告されておらず、当時どのような人々がこの地に居住していたのか、依然不明の状況が続いている。

1989年、この前原市における発掘調査の結果、弥生時代の甕棺墓から初めて人骨が出土した。保存状態が不良で、その特徴を窺えるのは1～2体に留まったため、当地の弥生人を代表させるにはまだまだ不十分なものではあるが、従来の資料空白地からの初めての出土であり、その意義は小さくない。今回、人骨資料を精査する機会を与えられたので、以下にその検討結果を報告する。

番　号	性別	年　齢	時　代	保存状態	抜歯	備　　考
K－8	♂	熟　年～	中期・中葉	不　良	?	屈強な男性
10	♀	成　年	〃	不　良	なし	
12	?	?	〃	小片のみ	?	
13	?	幼　児	〃	不　良	－	
14	?	?	〃	小片のみ	?	
19	(♂)	(成　年)	〃	小片のみ	?	
23	?	?	〃	小片のみ	?	
24	?	(乳～幼)	〃	小片のみ	－	

表1　高上石町遺跡出土弥生人骨

遺跡・資料・方法

遺跡：高上石町遺跡は、福岡市の西隣、前原市大字高上字石町に所在する。1989年度の発掘調査によって、当遺跡から22基の甕棺が出土し、その中の8基に人骨が検出された。副葬品は見られなかった。

所属時代：甕棺に対する編年学的考察から、弥生時代中期中頃と考えられている。

人骨資料：表1に示したように、人骨の出土総数は8体だが、大部分は保存不良で破片のみのものも多く、形態上の特徴が深れたのは、僅かにK－8，K－10号の2体に留まった。人骨の計測はおもにMartin-Saller(1957)に従い、脛骨には一部、森本（1971）の方法を、また、性判定には筆者らの判別関数法（中橋・永井、1986）を援用した。

		高上石	北部九州・山口[1]				西北九州[2]		広田		津雲[3]		北九州・山口	
		（弥生）	（弥生）		（古墳）		（弥生）		（弥生）		（縄文）		（現代）	
		K－10	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	174	132	176.7	37	175.6	15	178.1	22	159.7	39	175.9	42	172.8
9	最小前頭幅	96	129	93.1	32	91.9	－	－	12	98.7	33	94.3	42	89.2
43	上顔幅	107	106	103.9	24	102.2	－	－	5	102.2	28	103.3	42	98.6
46	中顔幅	103	100	100.0	31	100.4	11	95.9	6	91.8	21	99.6	42	93.6
48	上顔高	68	96	69.5	33	67.7	12	60.9	4	62.0	23	62.6	40	68.6
48/46	上顔示数(V)	66.0	86	69.5	27	67.7	11	63.5	4	65.3	15	63.8	40	73.2
52	眼窩高(左)	34	97	33.9	34	33.9	10	31.2	4	30.3	14	33.8	42	34.0
54	鼻幅	26	105	26.4	32	25.9	12	26.6	5	24.8	26	25.4	42	25.2
55	鼻高	49	104	49.6	32	48.5	12	46.3	4	44.0	25	46.2	42	48.7
54/55	鼻示数	53.1	100	53.3	30	53.8	12	57.4	4	58.0	23	54.7	42	51.4
74	歯槽側面角	68	47	67.9	23	68.6	－	－	3	65.7	11	69.6	40	67.1
69 (3)	下顎体厚	15	105	12.8	13	13.7	－	－	24	11.4	51	12.2	13	12.4

1）中橋・永井（1989）、2）内藤（1971）、3）池田（1988）

表2　主要頭蓋計測値の比較（女性）

結果

1，頭蓋骨

頭蓋についての計測、観察結果が得られたのは、K－10号（女性、成年）と、K－8号（男性、熟年）のみであった。比較的保存の良いK－10号女性人骨について、その計測結果を表2に比較群と共に示す。また、北部九州弥生人を基準線とした偏差折線を図1に示した。

A，K－10号（女性、成年）

頭蓋左半から頭蓋底にかけて大きく欠損しているため、得られた計測値は限られたものであるが、全体的にはやや幅径が大きく、その割りには高径が比較的小値をとる傾向が窺える（図1）。

まず頭蓋冠では、北部九州弥生人の平均（中橋・永井、1989）に較べて頭長がやや短いのに対し、最小前頭幅は少し広いが、いわゆる長、短頭傾向の如何については欠損が大きいため、不明とするしかない。頭高についても同様である。

顔面部の特徴としては、まず鼻根から前頭部、眉丘にかけての起伏がごく弱く、鼻骨のわん曲も合めて上顔部の著しい偏平さが目立つ。この点は近辺のいわゆる渡来系とされる弥生人の特徴と軌を一にするものと言えよう。また、顔面諸径では、上顔幅や中顔幅のような顔面幅径が比較的広いのに対して、上顔高がやや低く、その示数値も北部九州弥生人の平均より下回っている。眼窩はしかしかなり高く、鼻型も縄文人などに較べるとかなり狭鼻に傾く。

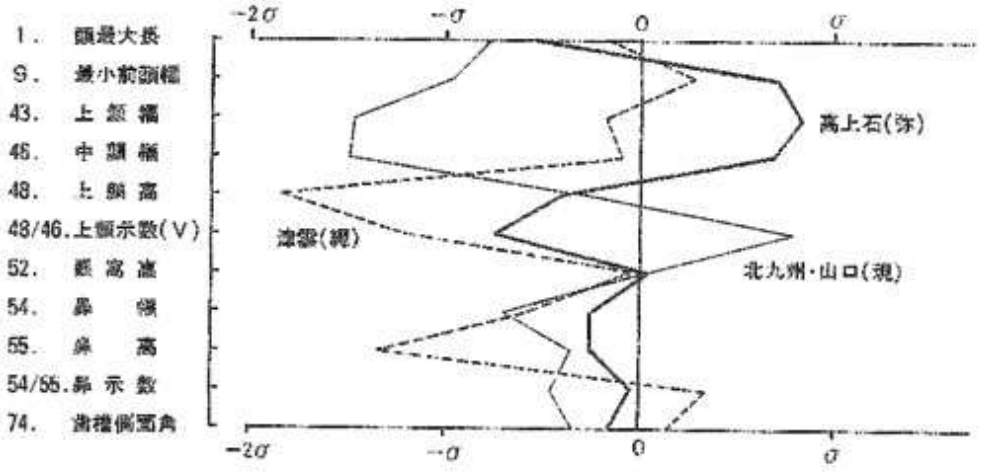


図1　偏差折線（基準線：北部九州・山口弥生）

また、下顎はやはり右半しかないが、眉間あたりの特徴とは対照的に、著しく骨体の厚い点が目につく。以下に歯式を示すが、風習的抜歯の痕跡は認められない。右下顎第2、及び第3大臼歯に虫歯が見られる。

M^3 M^2 M^1 P^2 P^1 C ○ ○	○ ○ ○ P^1 P^2 $\dot{M}^1$ $\dot{M}^2$ $\dot{M}^3$
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 ○	／ ／ ／ ／ P_2 $\dot{M}_1$ $\dot{M}_2$ ／

（○：歯槽開放、／：欠損、・：遊離歯）

B，K－8号（男性、熟年）

頭蓋冠のみ遺存しており、顔面部、下顎、歯等は消失している。

全体的に大きく、眉間部、外後頭隆起部等の発達の良さが目立つ。

計測しえた頭蓋大長(192mm)、最大幅(145mm)、最小前頭幅(98mm)、および水平周(541mm)等はいずれも北部九州弥生人の平均を（それぞれ、183.7，142.4，96.1，529.2mm）上回っている。頭長幅示数は75.5で、やや長頭に傾く。

2．四肢骨

四肢骨は上記のK－10号の右上腕骨の一部が遺存している他、K－8号の下肢が比較的良好に残っていたので、表3にその計測値を比較群と共に示した。

K－8号は、全体的に非常に太く、筋付着部の発達も良好で頭蓋における特徴と符合して、頑強で大柄な体格の男性であったことが窺われる。また、大腿骨ではかなり柱状性が、脛骨では強い偏平性が認められた。その点では縄文人に共通した特徴と言えようが、近隣のいわゆる渡来系弥生人にもある程度の頻度で出現する形質であり、特に珍しい例という訳でもない。また、大腿骨、脛骨の頑強さとは対照的に、腓骨の筋付着部の発達は目立たず、縄文人はもとより、他の古人骨集団と較べてもむしろ細い。こうした腓骨が脛骨に対して相対的に細い傾向は、近隣の弥生以降の集団に共通した特徴である。推定身長は不明だが、骨幹部の長さから推測して、160cmをかなり越える高身長であったと思われる。

一方、K－10号では右上腕骨のみその特徴が窺えたが、表4に示したようにかなり太い骨幹の持ち主である。諸径はいずれも比較群の平均を上回っており、また、その断面形状にはやや偏平性も認められた。ただ、三角筋粗面の発達度はやや弱い。

	高上石K－8		北部九州[1]		山　口[1]		大　友[2]		津　雲[3]		九　州[4]	
	（弥生）		（弥生）		（弥生）		（弥生）		（縄文）		（現代）	
	r	l	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
1　最大長	－	－	60	430.9	37	434.4	15	420.1	11	415.3	59	406.5
2　自然位長	－	－	18	427.7	26	433.8	17	413.9	11	411.3	59	403.2
6　中央矢状径	33	33	162	29.7	72	29.1	41	28.6	20	28.9	59	26.5
7　中央横径	30	30	166	28.0	72	27.2	42	26.4	20	25.5	59	25.6
8　中央周	99	100	161	90.8	72	88.9	41	87.0	20	86.6	59	82.4
9　骨体上横径	－	36	115	32.6	74	32.7	38	31.6	19	30.4	59	29.4
10　骨体上矢状径	－	27	115	26.2	74	26.0	38	25.2	19	24.8	59	24.3
8/ 2　長厚示数	－	－	18	21.4	26	20.5	16	21.4	11	21.1	59	20.4
6/ 7　中央断面示数	110.0	110.0	162	106.4	72	107.6	41	108.6	20	113.2	58	103.8
10/ 9　上骨体断面示数	－	75.0	115	80.5	74	80.0	39	80.1	19	81.7	58	82.8
脛　骨												
1　全　長	－	－	27	345.0	19	350.5	10	345.3	10	337.0	61	320.3
1a　最大長	－	－	52	350.5	21	356.9	11	354.8	10	343.0	60	326.9
8　中央最大径	－	－	74	32.0	36	30.6	43	31.0	21	31.7	61	27.8
8a　栄養孔位最大径	38	37	153	36.5	60	35.7	35	34.5	19	34.7	60	30.6
9　中央横径	－	－	75	22.9	36	22.3	43	21.4	21	19.7	61	21.1
9a　栄養孔位横径	23	22	153	25.3	59	25.1	35	23.3	19	21.5	61	23.7
10　骨体周	－	－	74	86.5	36	83.6	41	83.4	20	82.5	62	78.4
10a　栄養孔位周	97	95	151	96.9	58	95.5	34	92.6	19	90.7	61	88.9
10b　最小周	－	－	122	78.4	63	75.4	38	75.6	17	75.6	60	71.3
9/ 8　中央断面示数	－	－	74	72.2	36	72.0	43	69.1	21	62.4	61	76.1
9a/ 8a　栄養孔位断面示数	60.5	59.5	152	69.5	59	70.5	35	67.7	19	62.0	60	77.5
10b/ 1　長厚示数	－	－	26	22.7	19	21.5	10	21.9	10	22.9	60	22.4
腓　骨												
1　最大長	－	－	8	347.9	14	343.6	－	－	8	333.3	58	322.9
2　中央最大径	(15)	－	46	17.0	34	16.8	－	－	19	17.5	59	14.5
3　中央最小径	(11)	－	46	11.6	34	11.4	－	－	19	12.1	59	10.0
4　中央周	(42)	－	47	47.2	34	47.2	－	－	19	50.7	59	41.5
4a　最小周	－	－	24	39.7	25	40.1	－	－	18	41.8	59	35.6
3/ 2　中央断面示数	(73.3)	－	46	68.3	34	67.9	－	－	19	69.3	59	69.5
4a/ 1　長厚示数	－	－	8	11.0	13	11.8	－	－	8	11.8	58	11.1

1）中橋・永井（1989）、2）松下（1981）、3）池田（1983）、4）阿部（1955）、鳥巣（1965）

表3　下肢骨計測値（男性、左）

	高上石 (弥生) K−10	北部九州 (弥生) N	M	山口 (弥生) N	M	大友 (弥生) N	M	津雲 (縄文) N	M	九州[1] (現代) N	M
1 最大長	−	11	283.2	31	284.4	4	262.3	13	261.2	36	271.7
2 全長	−	8	282.3	29	279.4	4	257.8	13	257.3	36	268.6
5 中央最大径	23	35	21.0	43	20.4	20	21.0	25	19.7	36	19.8
6 中央最小径	16	36	15.3	43	15.4	20	16.8	22	13.9	36	14.8
7 骨体最小周	59	47	56.9	49	56.0	19	57.6	24	54.5	36	54.8
7a 中央周	64	33	60.7	41	59.1	19	61.8	−	56.7	36	56.9
6/5 骨体断面示数	69.6	35	73.2	43	75.9	20	75.9	21	70.8	36	75.3
7/1 長厚示数	−	11	19.8	31	19.6	11	22.4	15	23.0	106	20.9

1）寿頃（1957）

表4　上腕骨計測値（女性）

総括・考察

1989年春の発掘調査によって、福岡市の西隣、前原市所在の高上石町遺跡から、弥生時代中期の人骨8体が出土した。保存状態が不良で僅かに1，2体についての所見しか得られなかったが、当地域からは初めての弥生人骨出土例であり、従来の資料空白地を一部補填したという意味でも貴重なものと言えよう。その特徴を概括すると、

・男性頭蓋（K−8号）：頭蓋冠のみ遺存していた。全体的に大きく、眉間や外後頭隆起部の発達も良好で屈強な男性であったことを窺わせる。頭型はやや長頭に傾く。

・女性頭蓋（K−10号）：頭型は不明だが、顔面はやや幅広く、高径は近隣の弥生人の平均よりやや下回って、幾分、低、広顔傾向を見せる。ただ、眉間から鼻根にかけては著しく偏平で、眼高や鼻型にも高眼窩、狭鼻傾向が窺われる。下顎骨体はかなり頑丈である。

・男女とも、四肢骨体は太く、特にK−8号男性下肢骨は、筋付着部の発達が良好で、大腿骨には柱状性が、脛骨には偏平傾向が認められた。但し、腓骨は細く、弥生人的特徴を見せている。身長は、男性については160cmをかなり上まわる高身長であったことが窺える。

今回出土した資料は保存状態も悪く、数も少ないので、その評価には自ずと限界があるが、図2に示したペンローズの形態距離（女性頭蓋、8項目：M，1，9，43，46，48，52，54，55）にも示されているように、やや低・広顔傾向が見られるものの、全体的特徴としては、やはり近隣の、いわゆる渡来系弥生人の一員と見なし得るものと言えよう。また、男性下肢骨に柱状性や偏平性が認められた点も、一応、北部九州弥生人の変異内には入るものであるが、ただ問題は、上で見たような、北部九州弥生人の平均形状からやや外れる傾向が、当地域の弥生人の特徴をどの程度あらわしたものなのか、という点である。

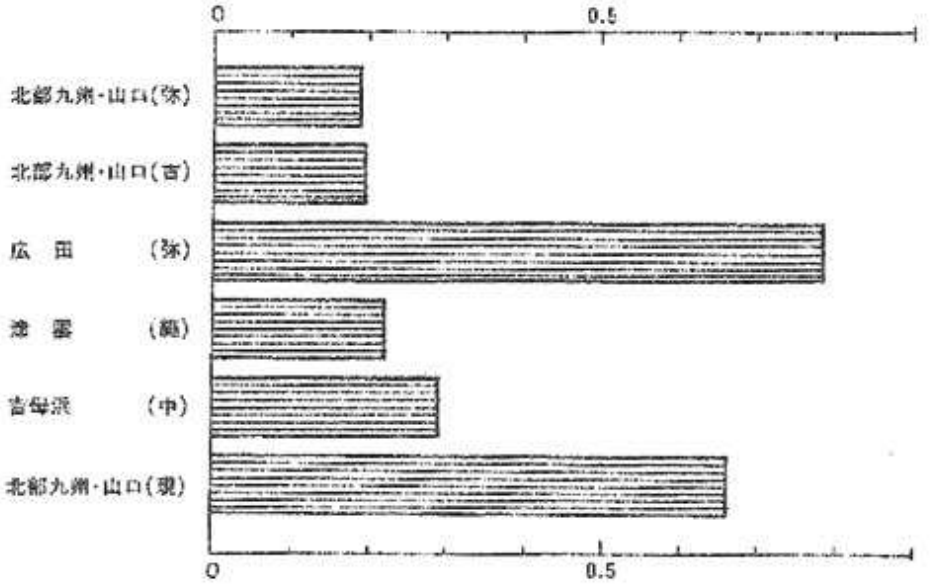


図2　高上石町弥生人からのペンロースの形態距離（頭蓋8項目、♀）

北部九州弥生人については、周知のように、その、従前の日本の古人骨には見られない特異とも言える形質の由来を大陸からの渡来人に求める考えが定着しつつある。しかし同時にまた、近年、人骨資料が増えるに連れて、当地域の中にも幾らかの地域差のあることがわかり、例えば、いわゆる渡来系弥生人の代表的特質とも言える高顔性では、福岡市の金隈弥生人（中橋、他、1985）などより、少し内陸に入った、太宰府から筑紫野市あたりにかけての遺跡から出土する人骨（中橋、1990）でより強まる傾向のあることが明らかになりつつある。こうした地域差をより具体的に明らかにし、その由来を考察することは、弥生文化の発祥地における当地の人類学上の課題となろうが、古代弥生社会において重要な位置を占めていたとされる前原市一帯の住民の特徴を明らかにすることは、その意味で残された疑問点の一つであった。今回見られた特徴は、上記のような高顔性における地域性にも一応合致するものと言えなくもないが、しかし、もとより現時点での踏み込んだ考察にはまだ無理があり、その正確な理解にはなお相当数の資料が要求されよう。高上石町遺跡の今回の成果によって、この地域からも将来、弥生人骨が出土する可能性が示された訳でもあり、今後の資料追加に期待したい。

謝辞：当人骨を研究する機会を与えていただき、いろいろと御教示くださった前原市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝いたします。

文　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」　人類学研究　2

鑪鍋勝登（1955）：「九州人下顎骨の研究」　人類学研究　3

池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」　考古学と関連科学（鈴木義昌先生古希記念論文集）

Martin-Saller(1957)："Lehrbuch der Anthropologie" Bd.1, Gustav Fischer Verlag. Stuttgart

松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」　大友遺跡　佐賀県呼子町文化財調査報告書　1

森本岩太郎（1971）：「脛骨横断指数の算出をめぐって－Ｍａｒｔｉｎ法への反省」　人類学雑誌　79

内藤芳篤（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」　人類学雑誌　79

中橋孝博（1990）：「永岡遺跡出土の弥生時代人骨」　永岡遺跡　筑紫野市文化財調査報告書第26集　筑紫野市教育委員会

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」　吉母浜遺跡　下関市教育委員会

Nakahashi T. and M.Nagai(1985)："Sex assessment of fragmentary skeletai remains." J.Anthrop.Soc.Nippon 94.

中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質」　弥生文化の研究　1　雄山閣

中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」　史跡金隈遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書　123

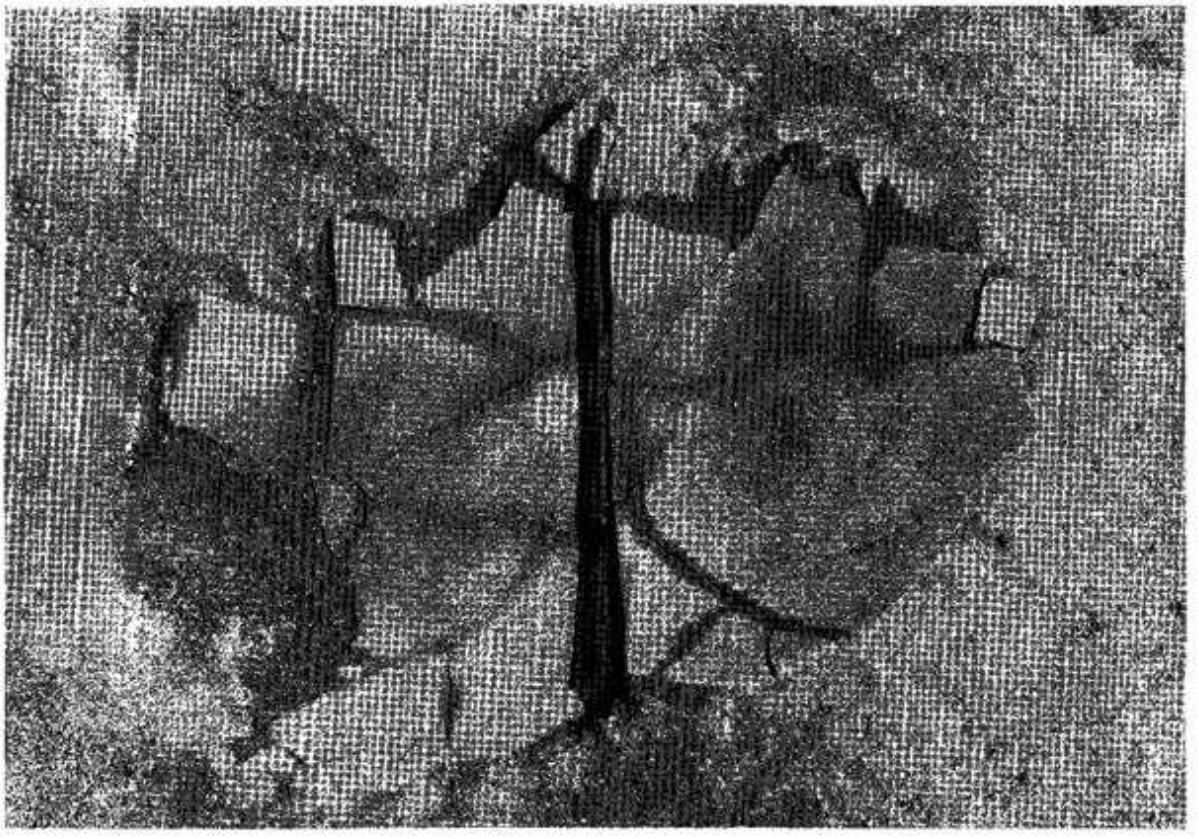
平頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」　人類学研究　4

鈴木　尚（1973）：「日本人の骨」　岩波新書　477　岩波書店

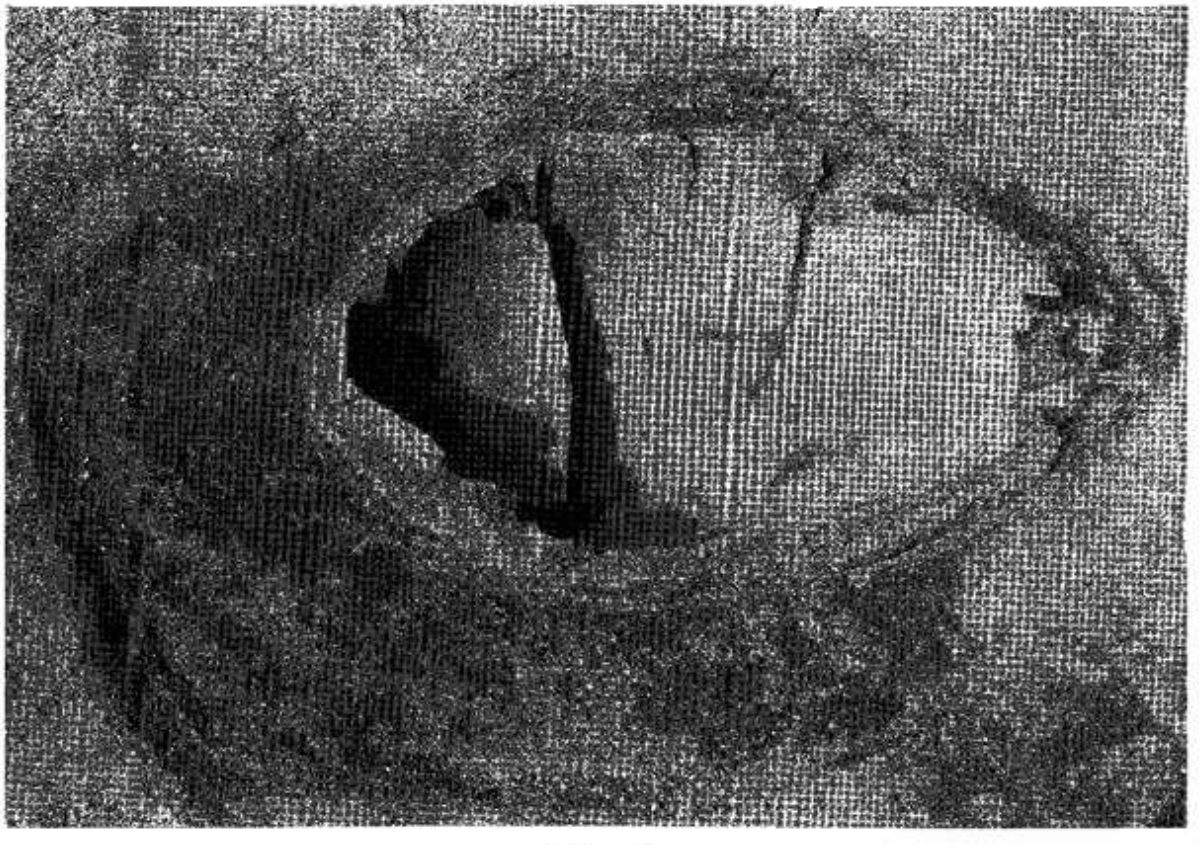
図　　版

調査区全景

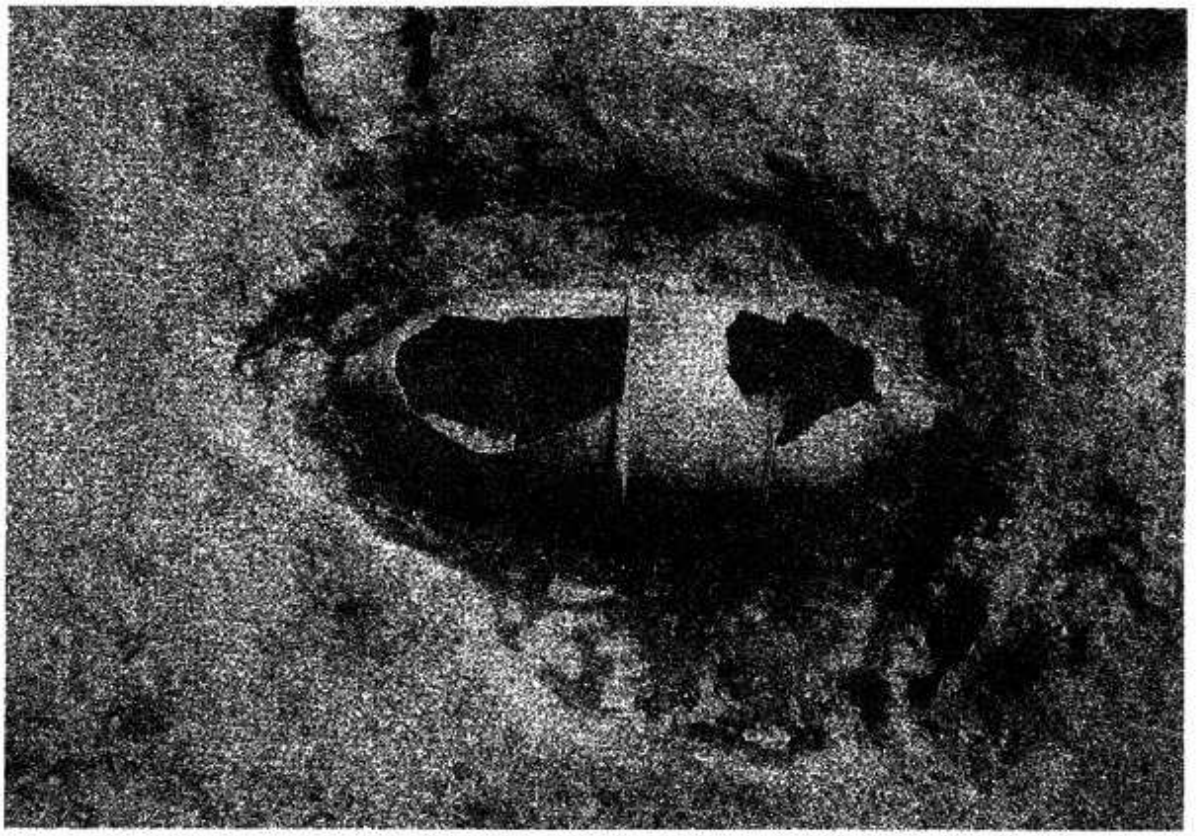
図版　2



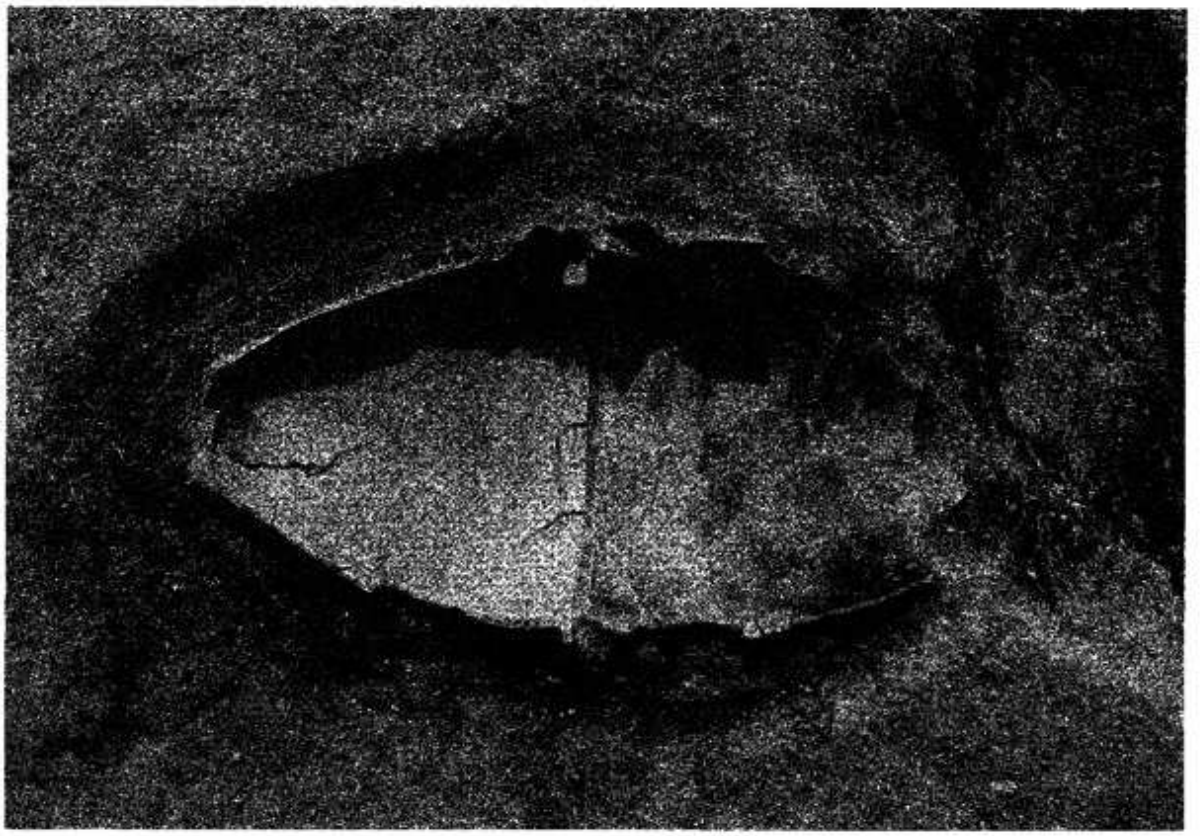
3号甕棺墓



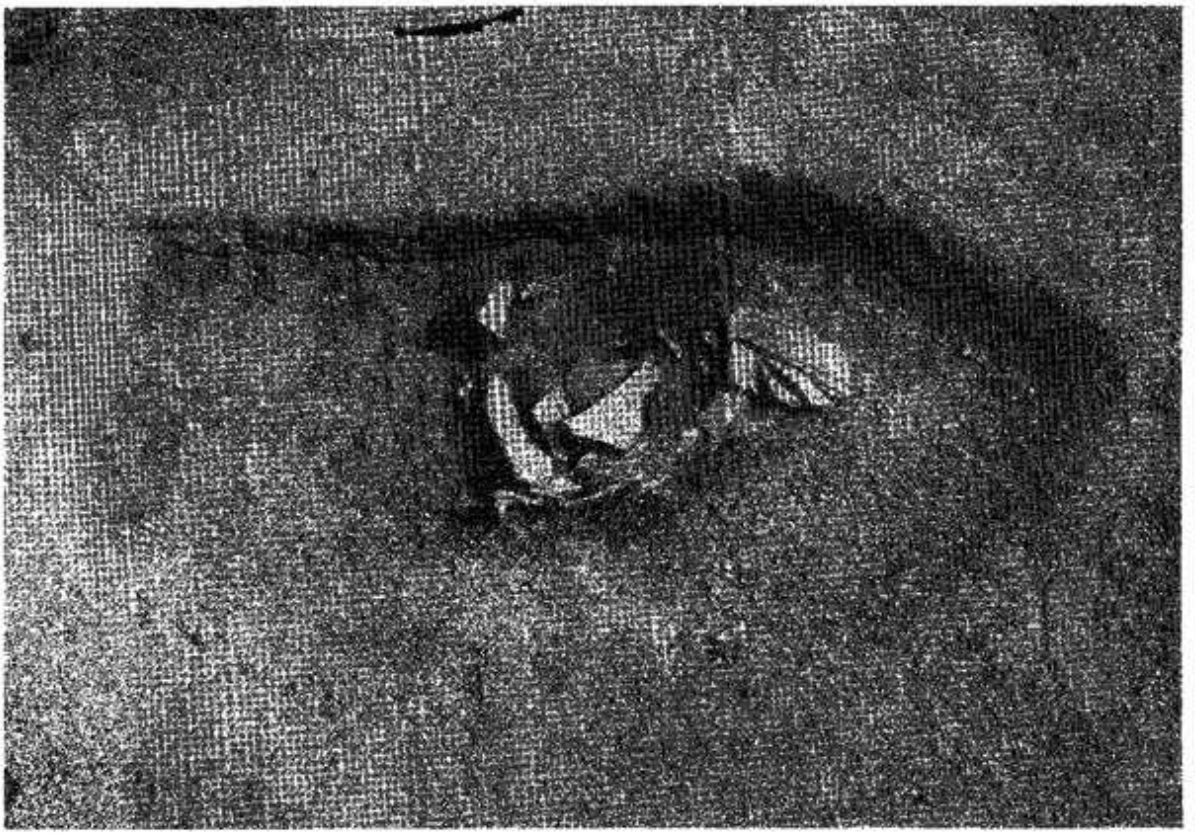
4号甕棺墓



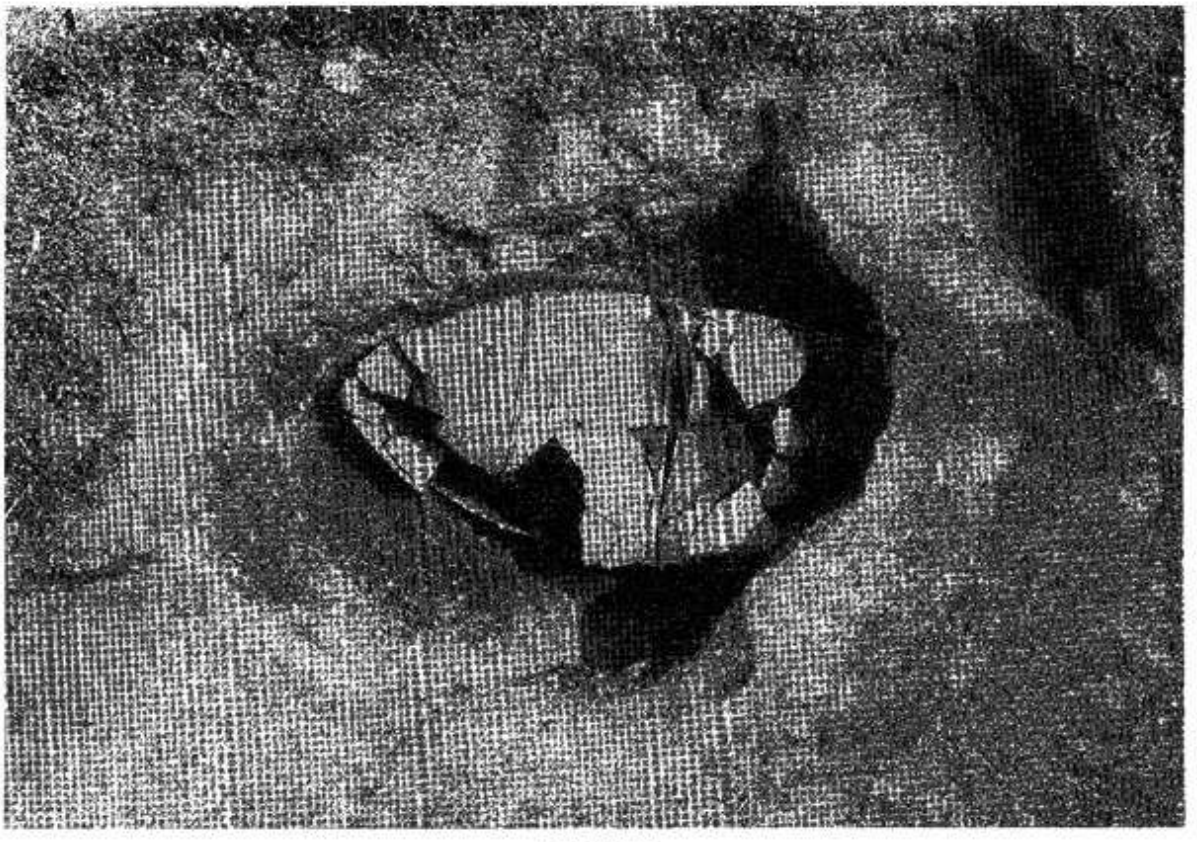
5号甕棺墓



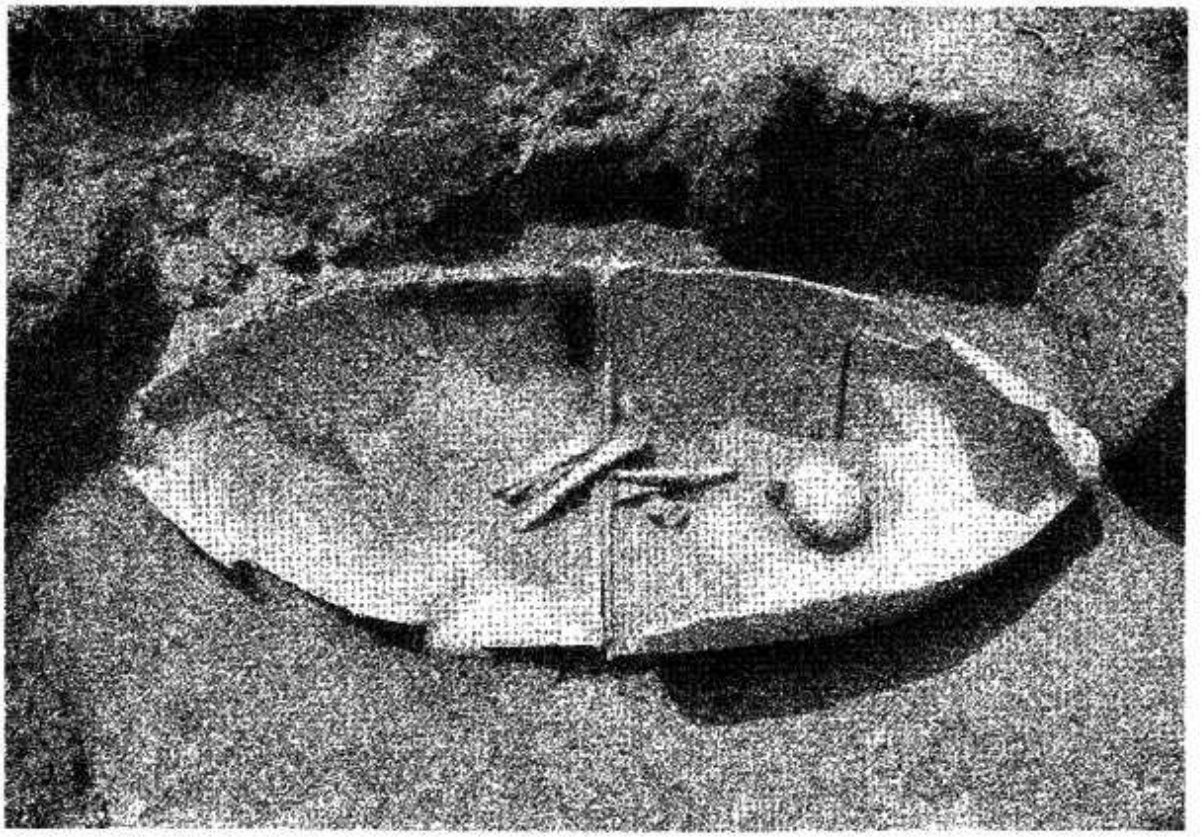
6号甕棺墓



7号墓棺墓



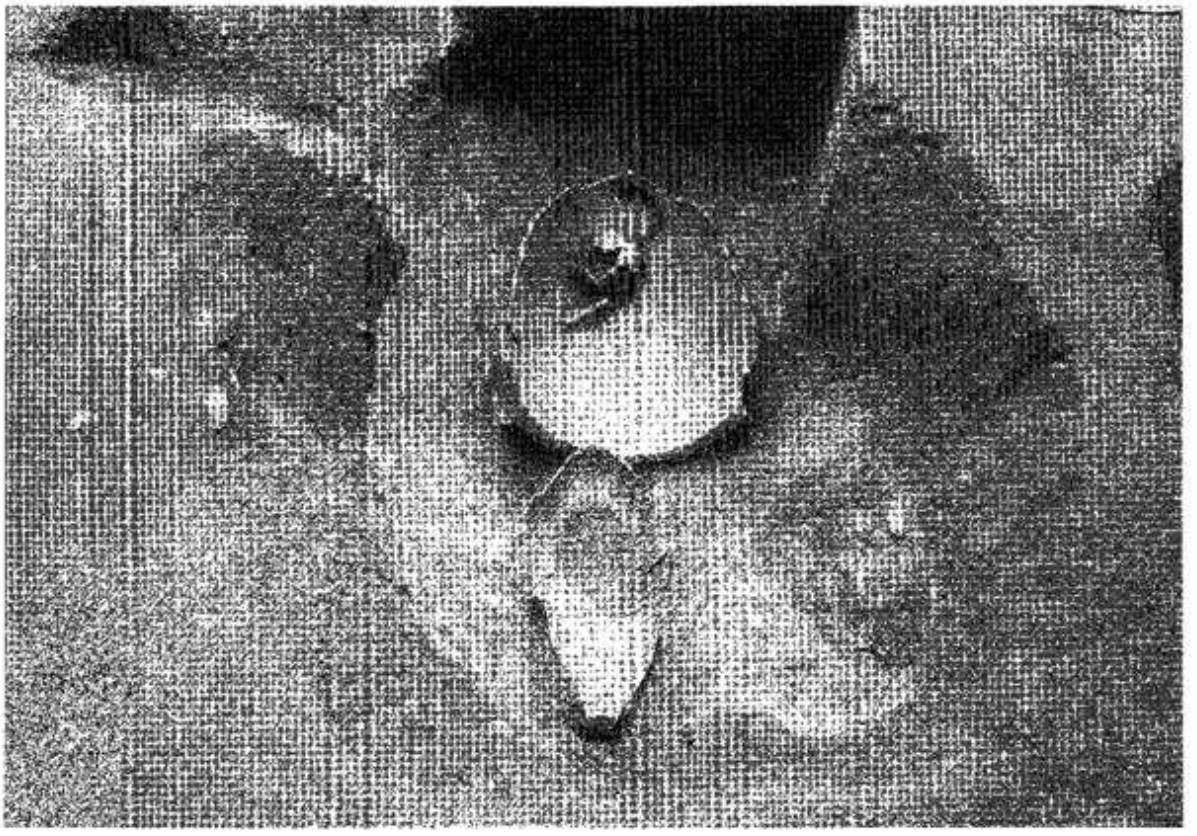
8号墓棺墓



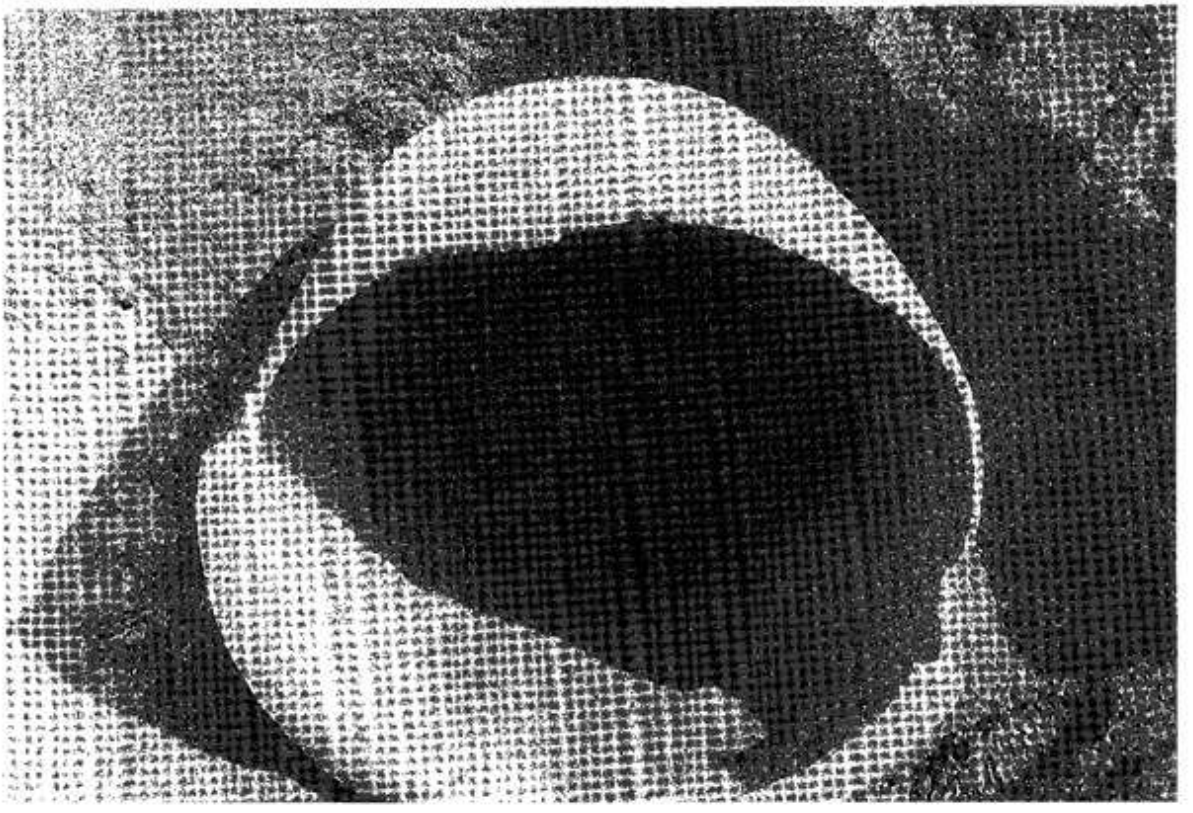
8号甕棺墓人骨出土状況

9・10号甕棺墓

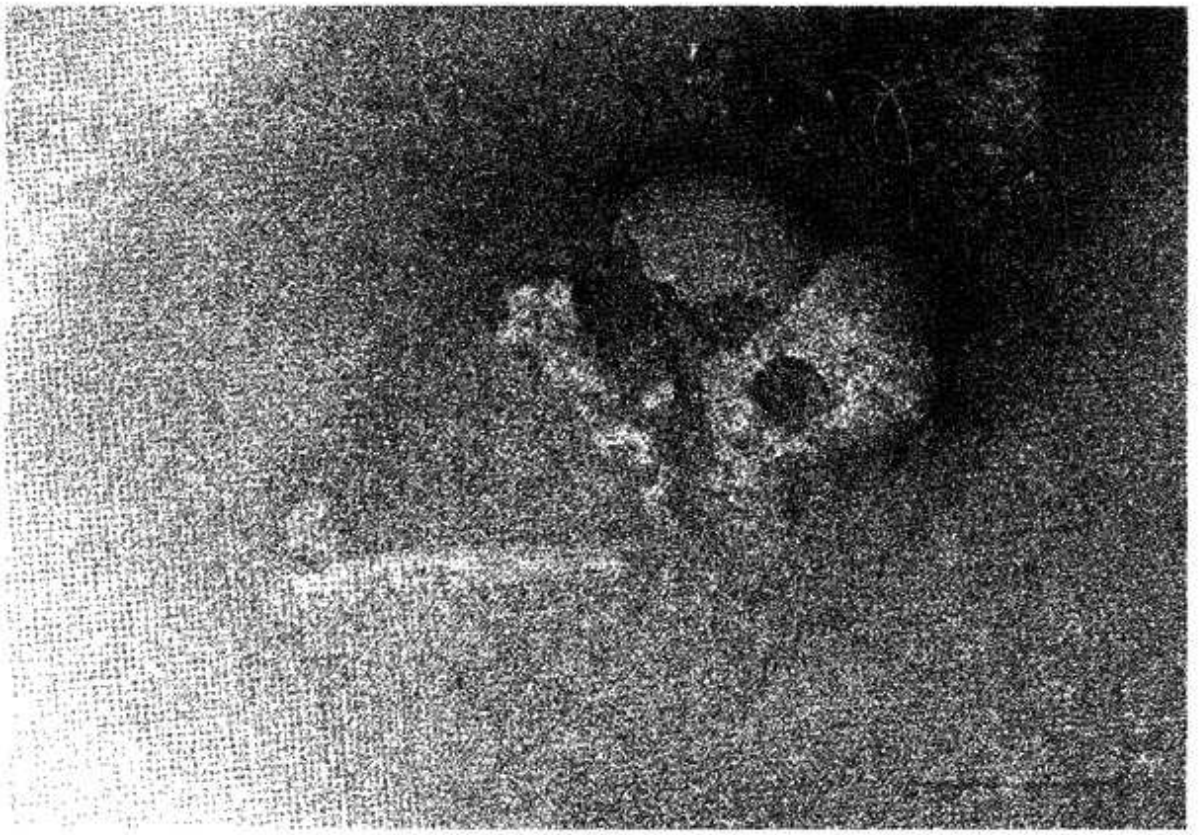
図版　6



9・10号甕棺墓

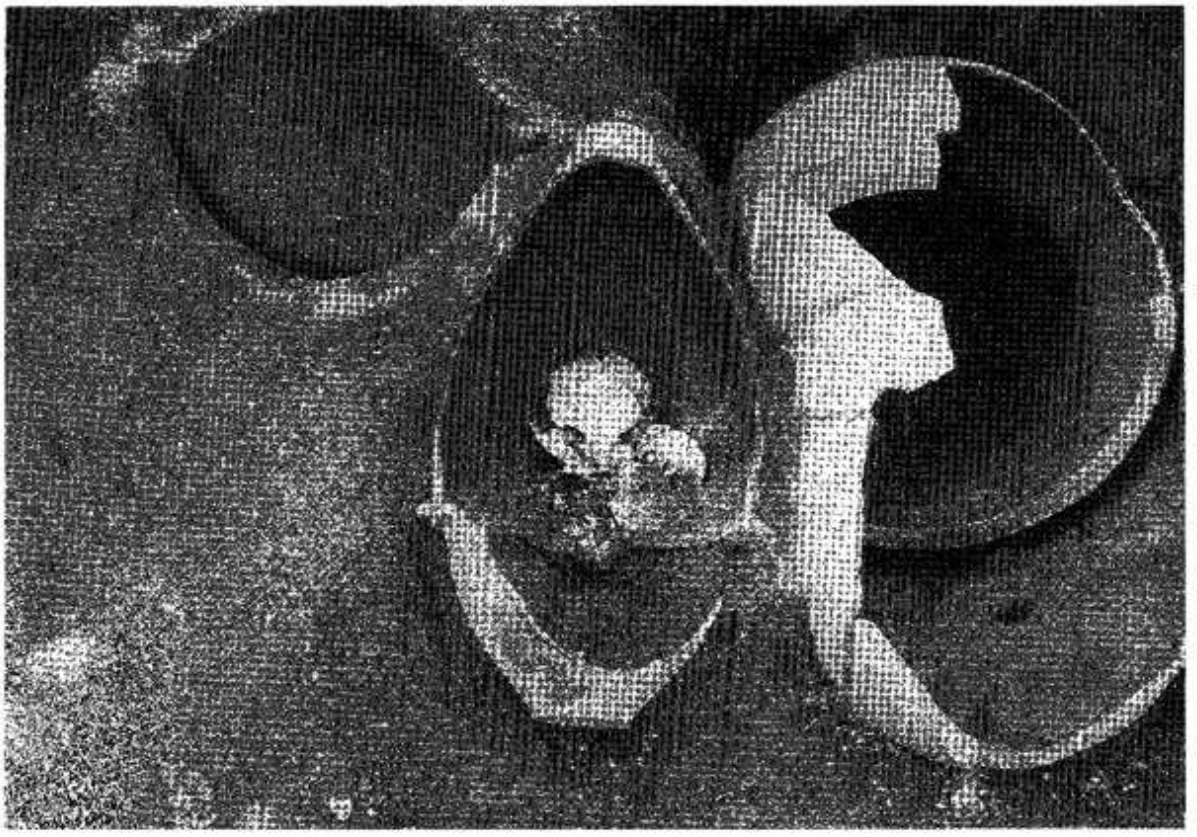


10号甕棺墓人骨出土状況

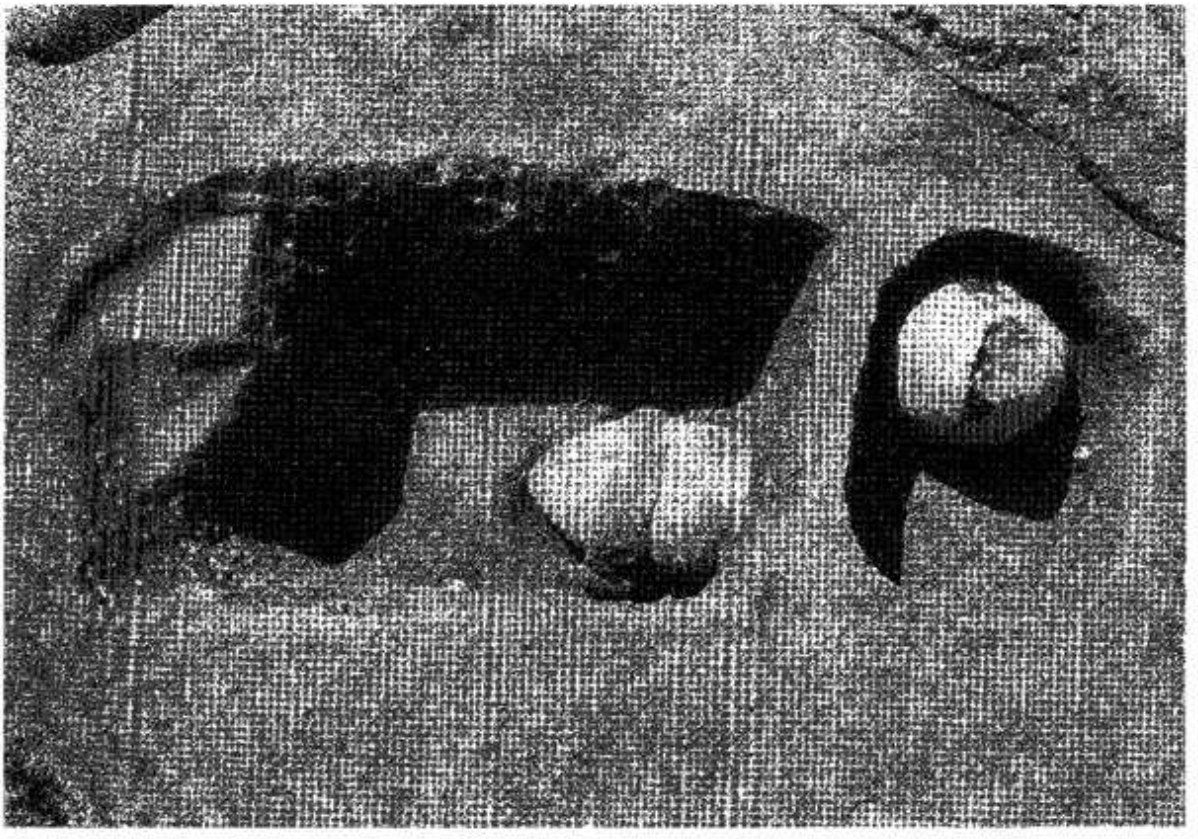


10号甕棺墓出土人骨近景

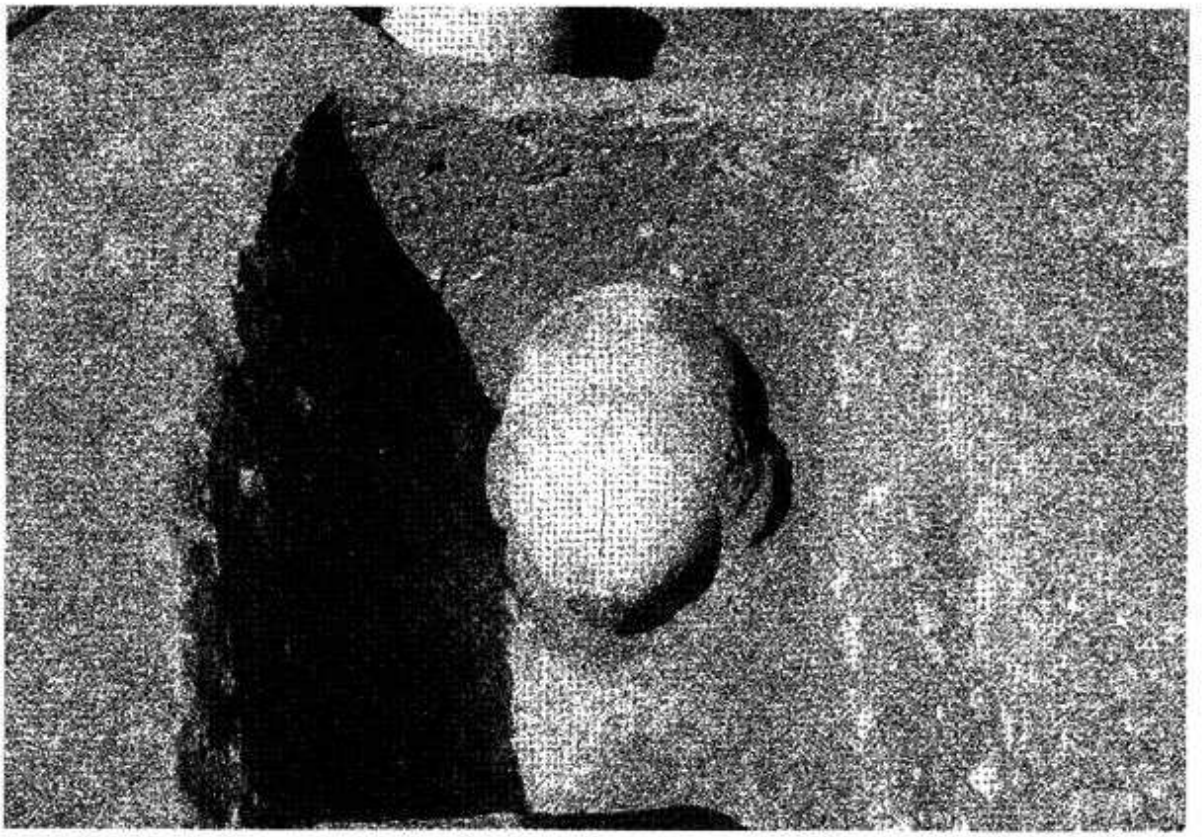
11・12・13・14号甕棺墓



13号甕棺墓人骨出土状況



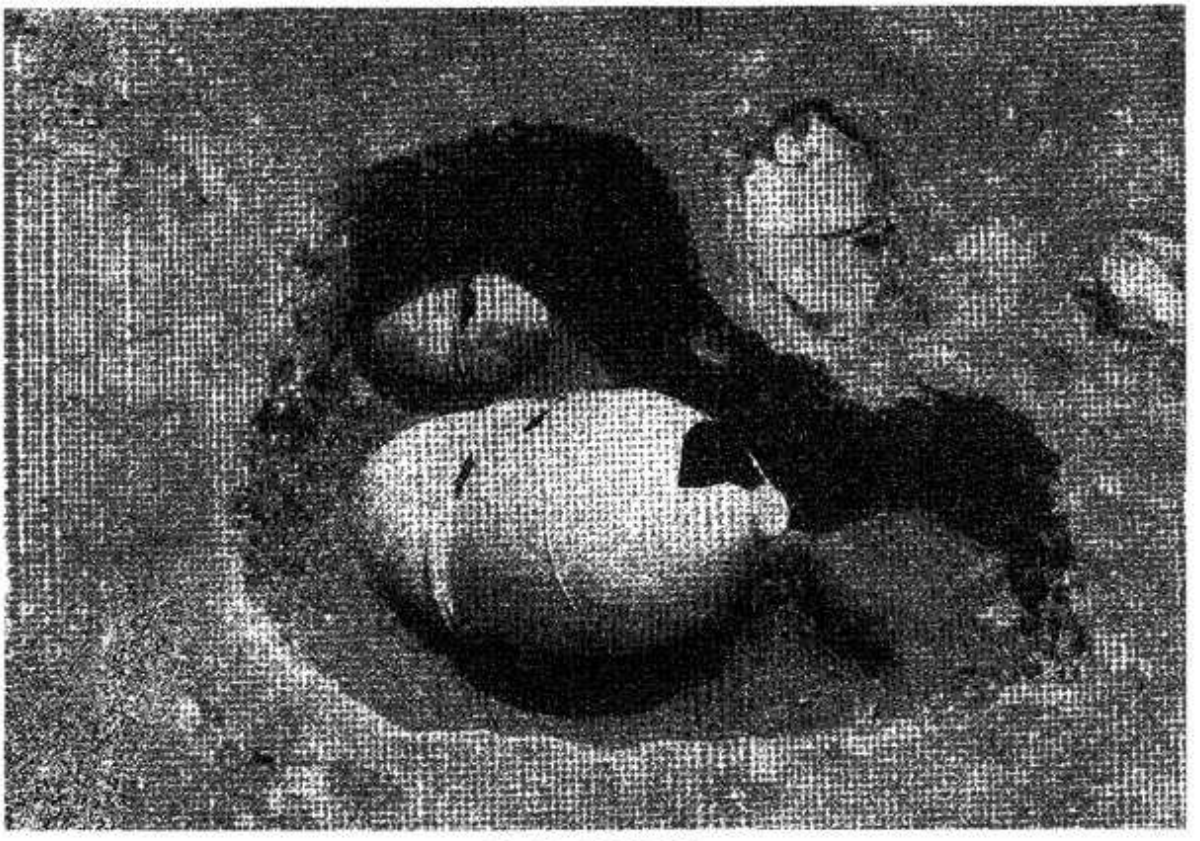
15・16号甕棺墓



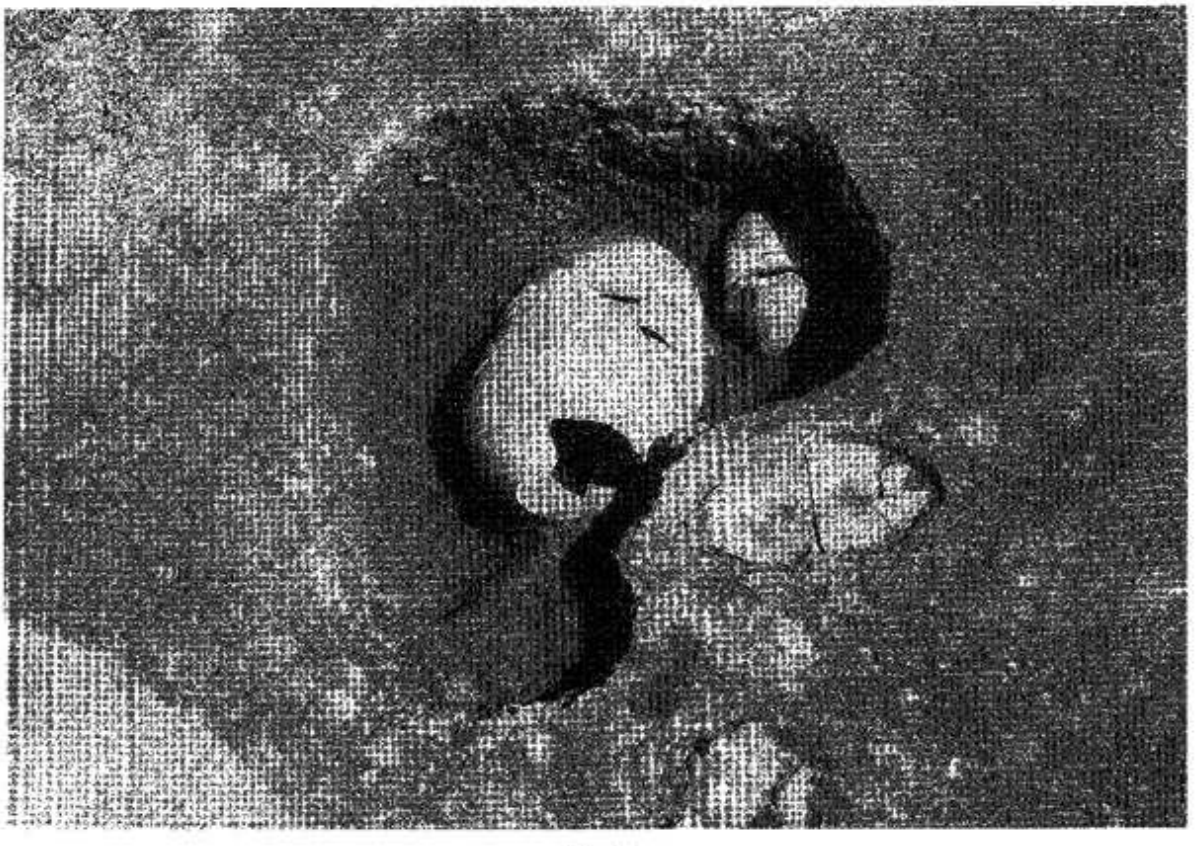
15号甕棺墓

16号甕棺墓

図版　10



17・18・19号甕棺墓

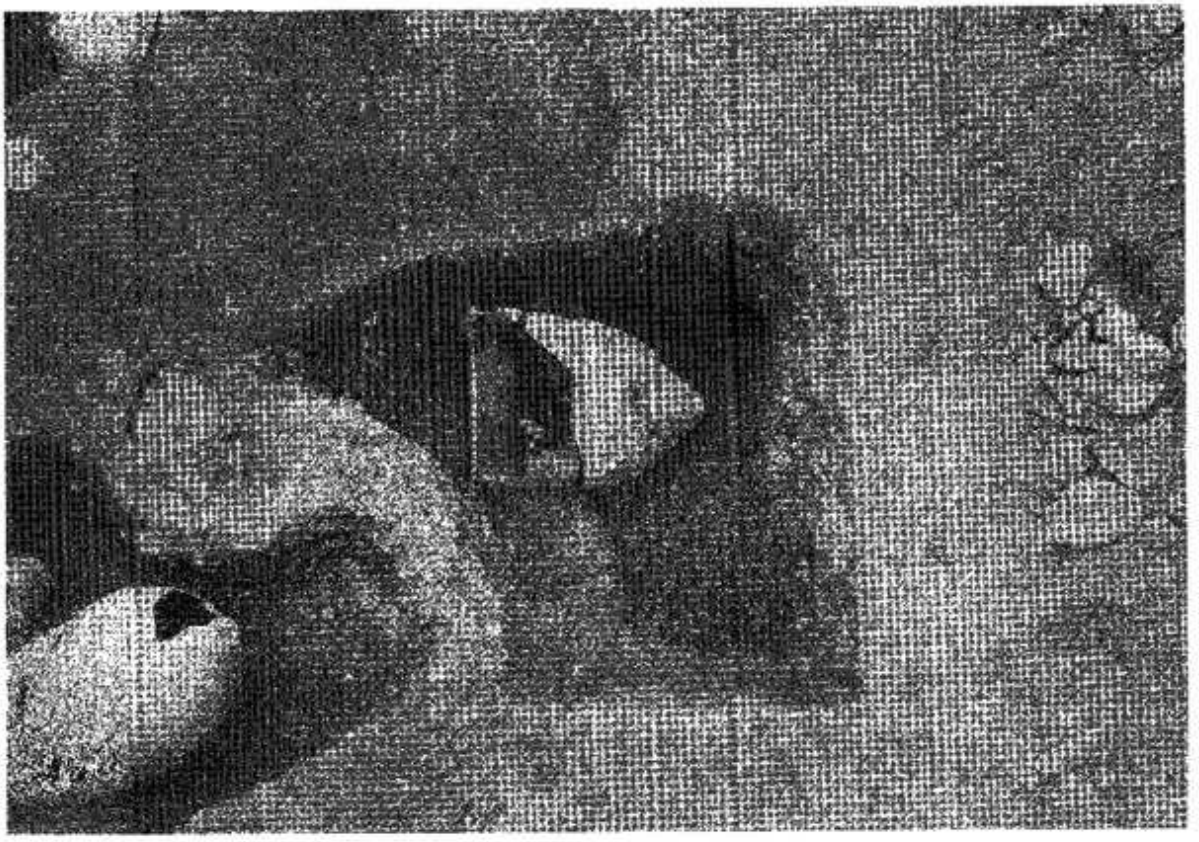


同　上

19号甕棺墓人骨出土状況

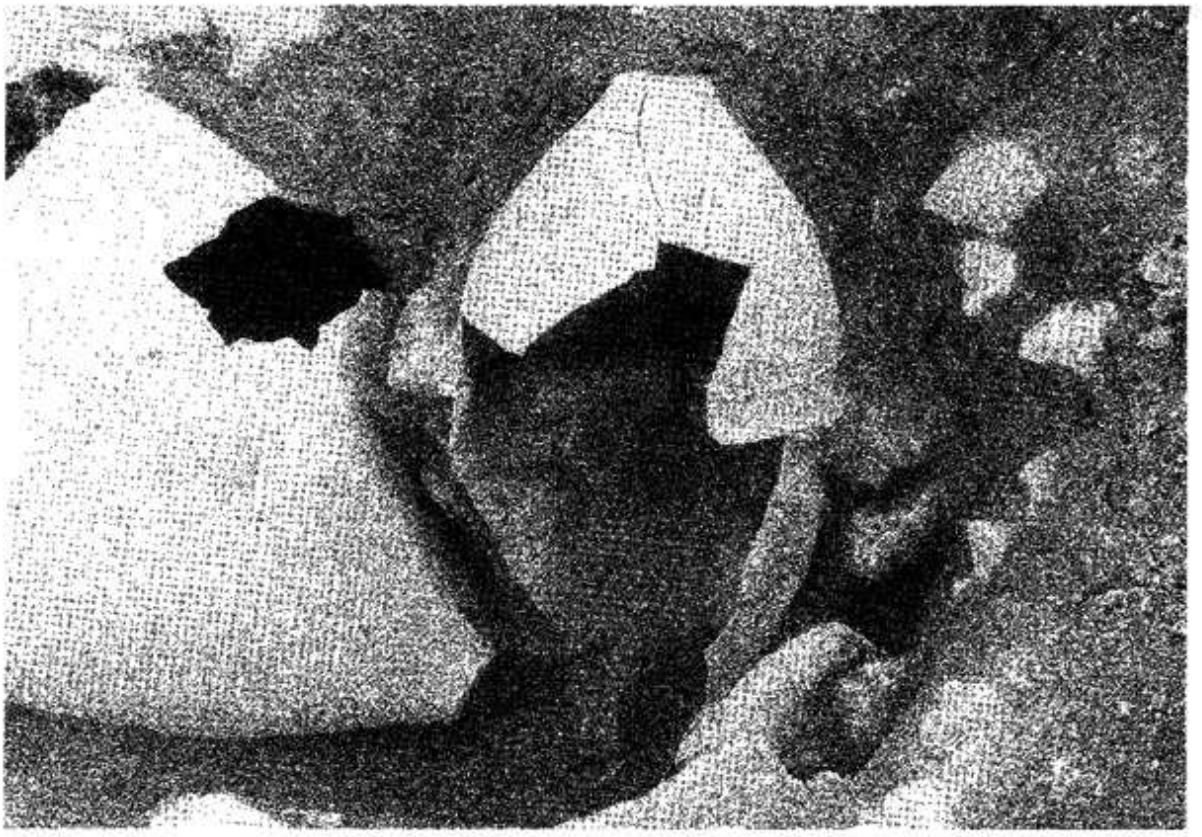
20・21号甕棺墓

図版　12

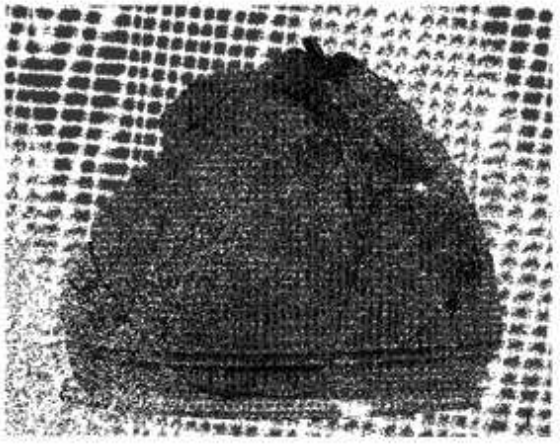


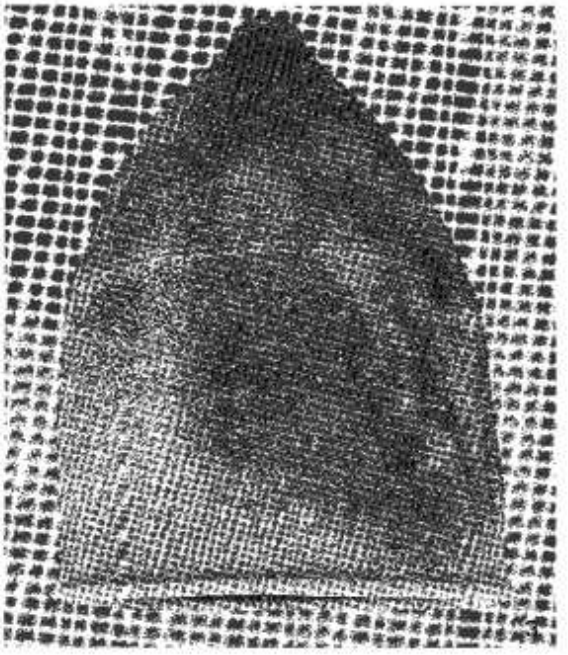
22号甕棺墓

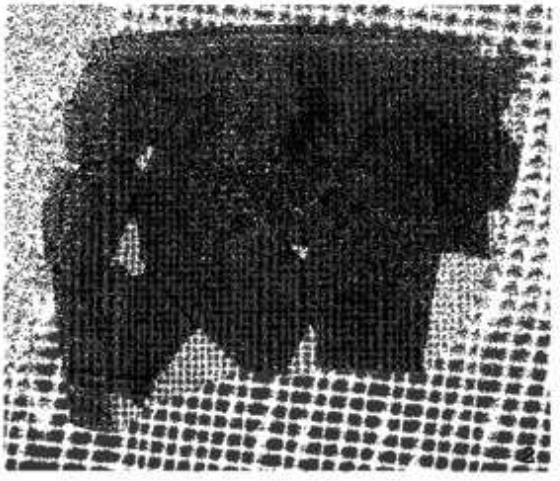
22・23号甕棺墓

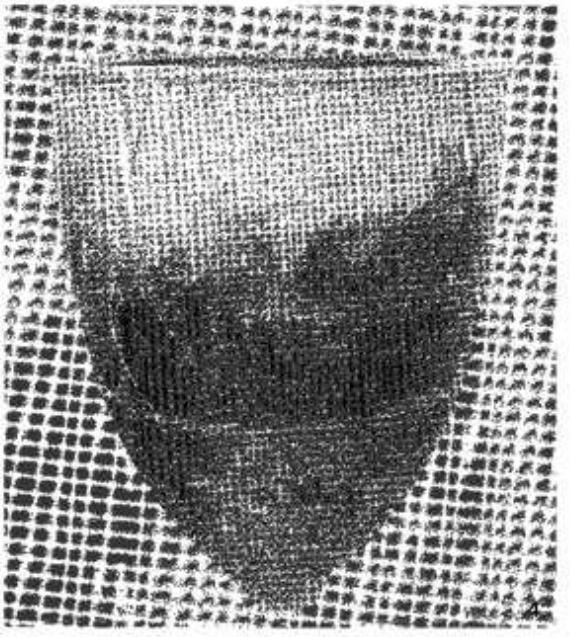


24号甕棺墓





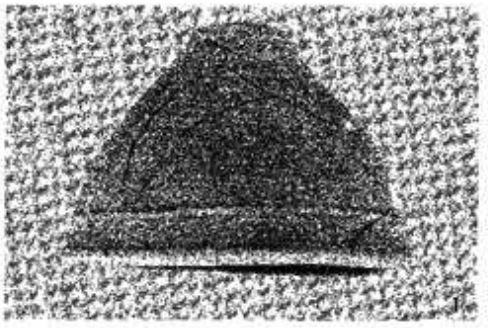


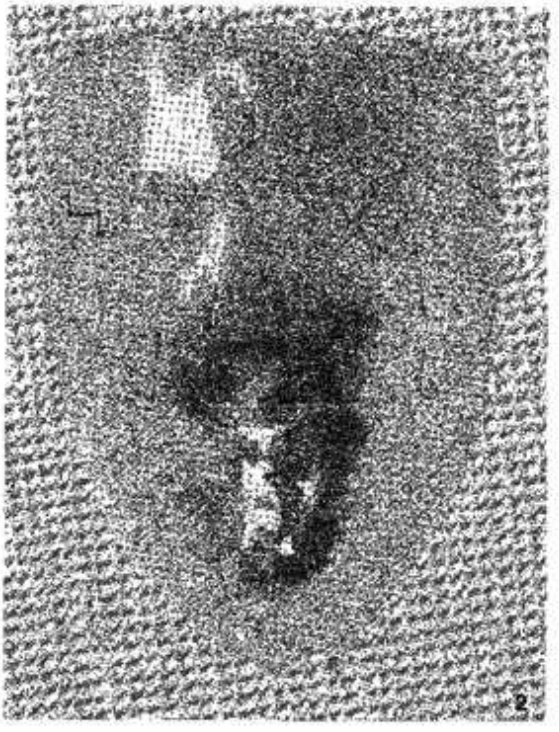


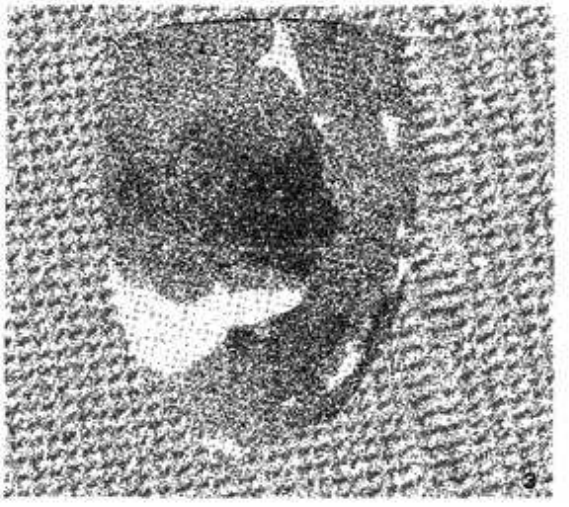
1. 3号甕棺上甕
2. 3号甕棺下甕
3. 5号甕棺上甕
4. 5号甕棺下甕

3・5号甕棺

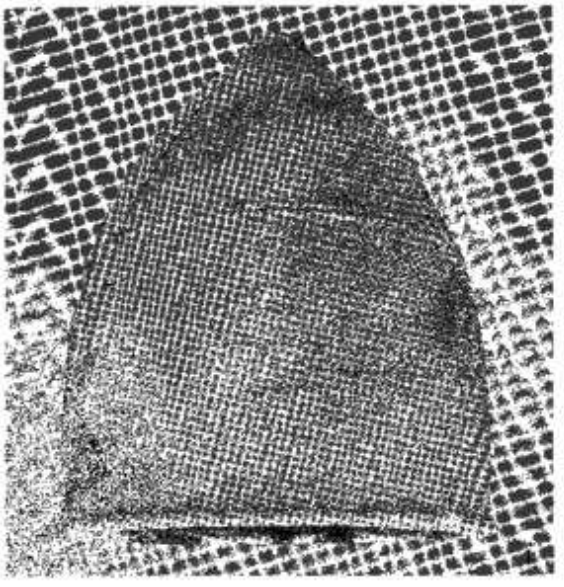
1. ４号甕棺上甕
2. ４号甕棺下甕
3. ４号甕棺（支え用）



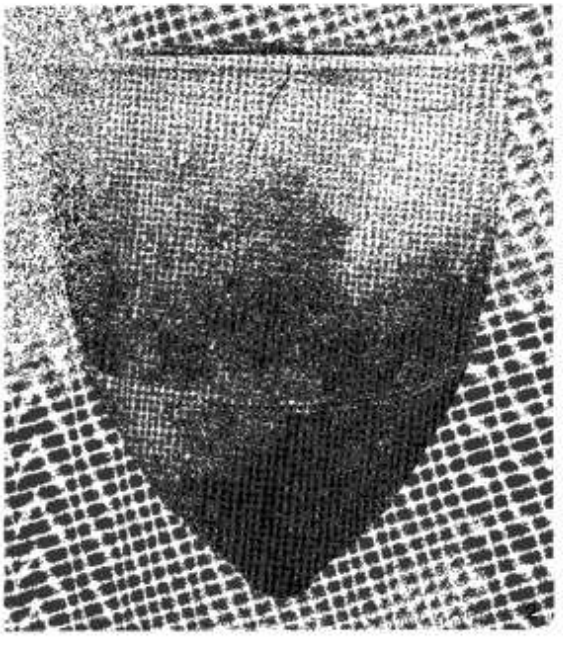


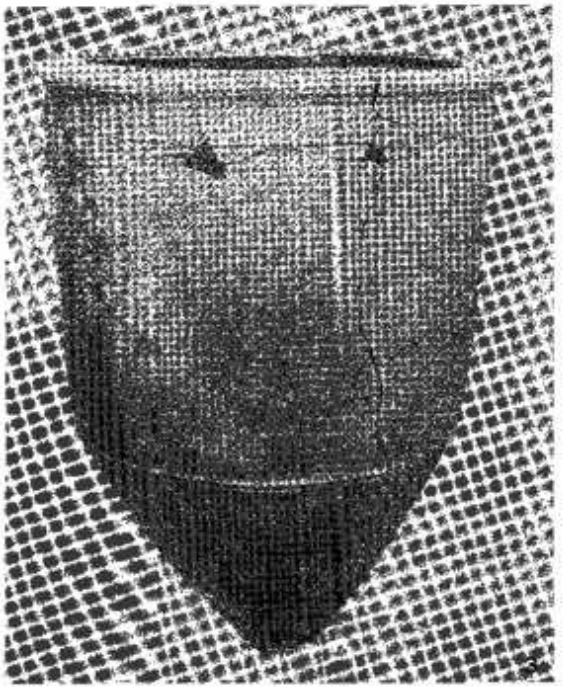


４号甕棺

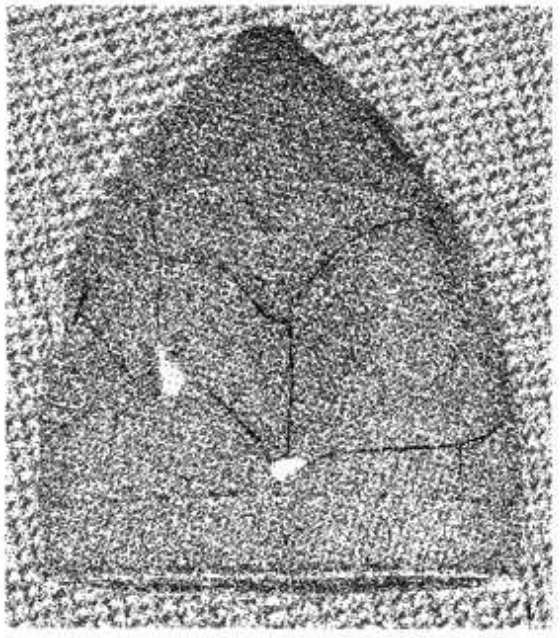


1. 8号甕棺上甕
2. 8号甕棺下甕
3. 10号甕棺

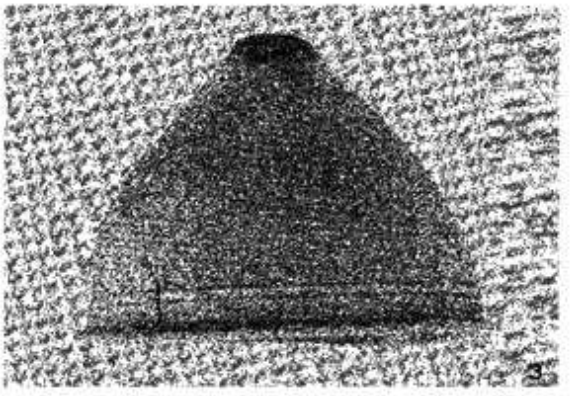


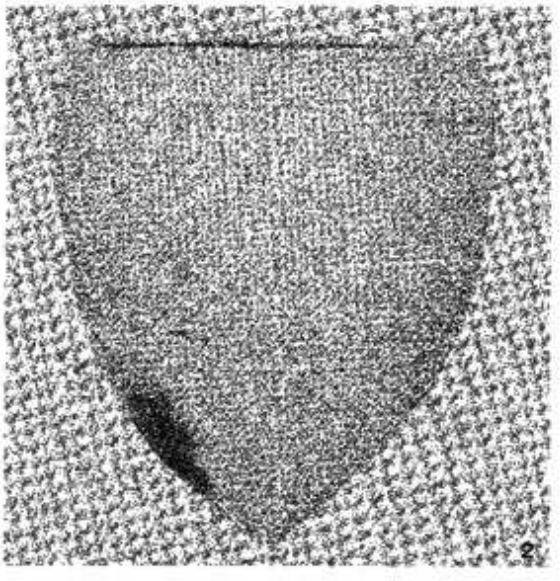


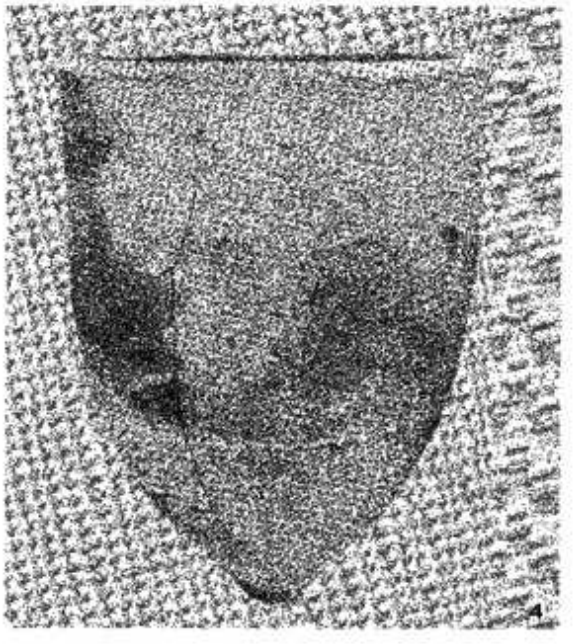
8・10号甕棺



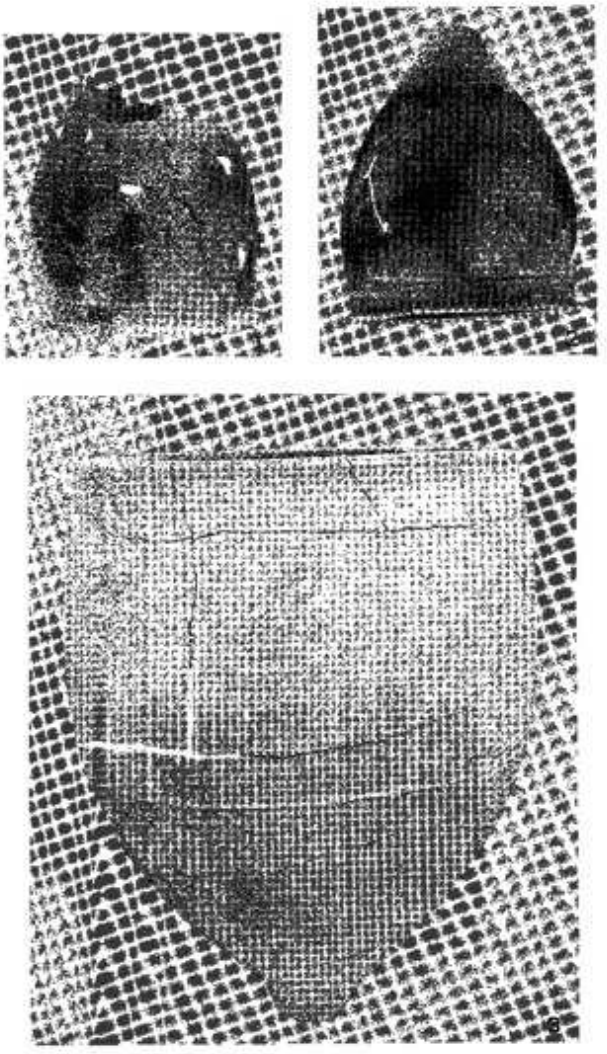
1. 14号甕棺上甕
2. 14号甕棺下甕
3. 15号甕棺上甕
4. 15号甕棺下甕





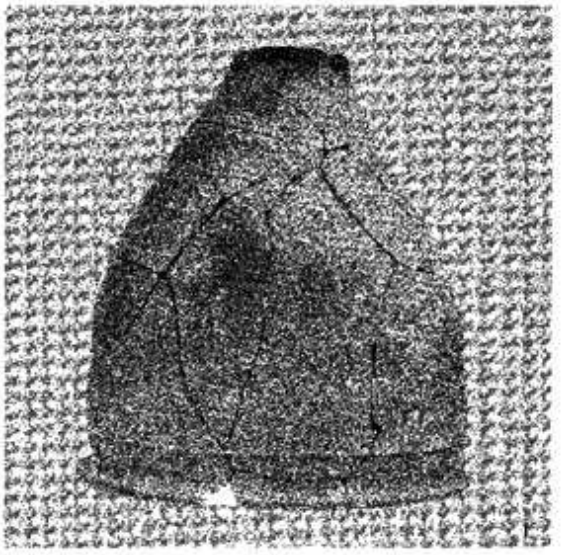


14・15号甕棺

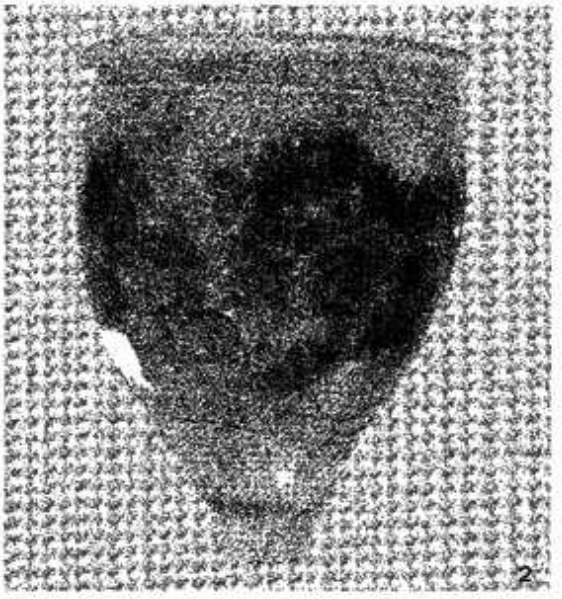


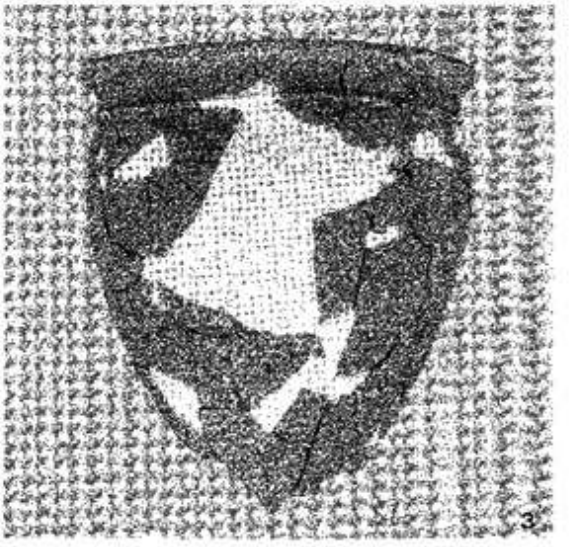
1. 23号甕棺上甕
2. 23号甕棺上甕
3. 23号甕棺下甕

23号甕棺



1. 6号甕棺上甕
2. 6号甕棺下甕
3. 7号甕棺

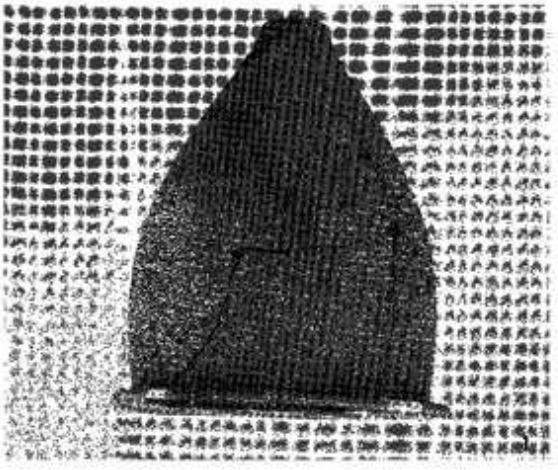


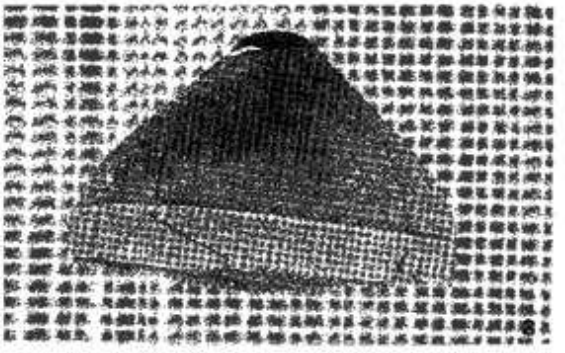


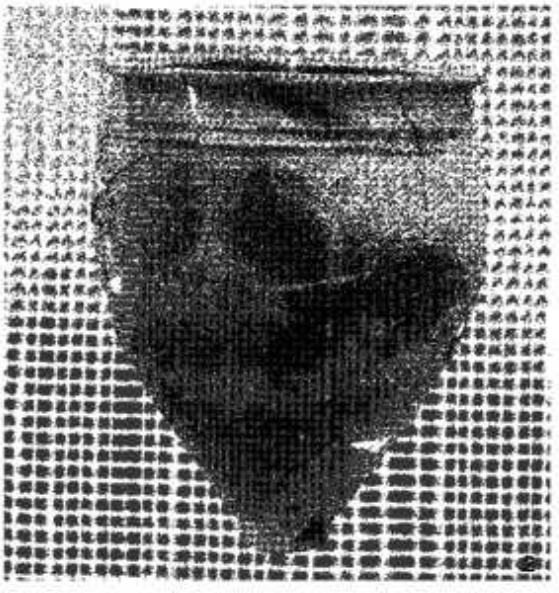
6・7号甕棺

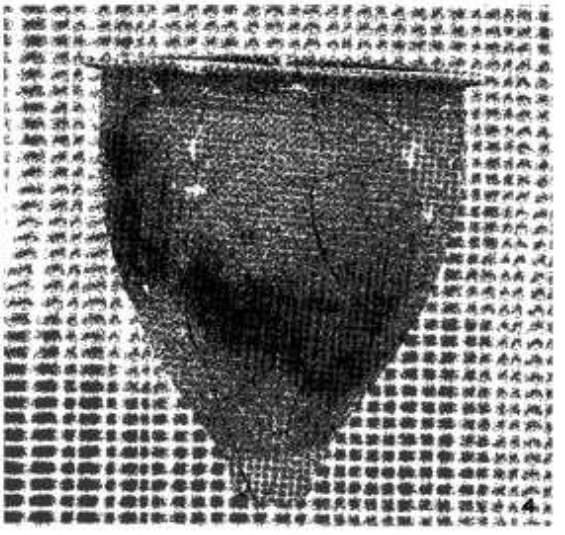
図版　22

1. 9号甕棺上甕
2. 9号甕棺下甕
3. 11号甕棺上甕
4. 11号甕棺下甕

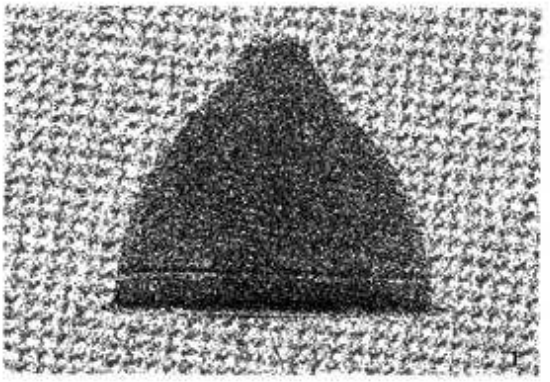


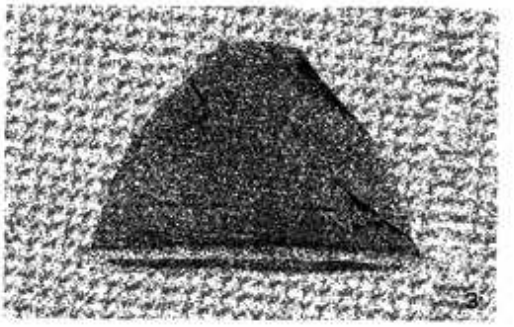


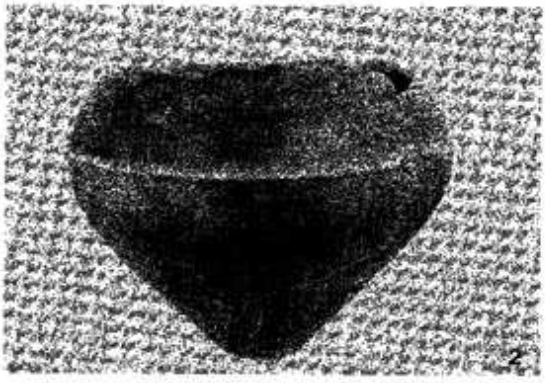




9・11号甕棺



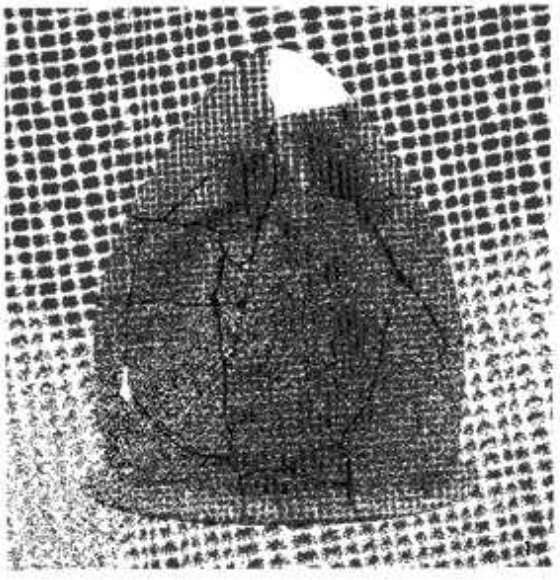


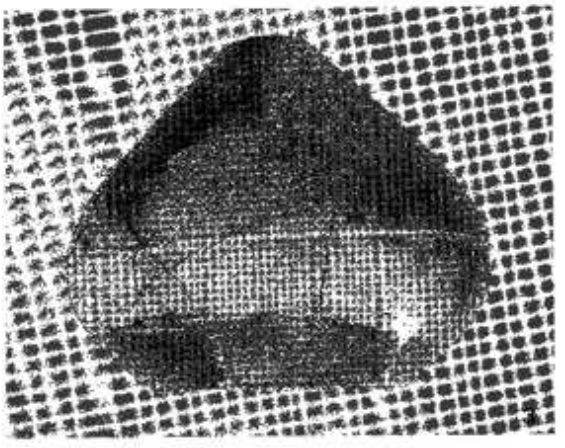


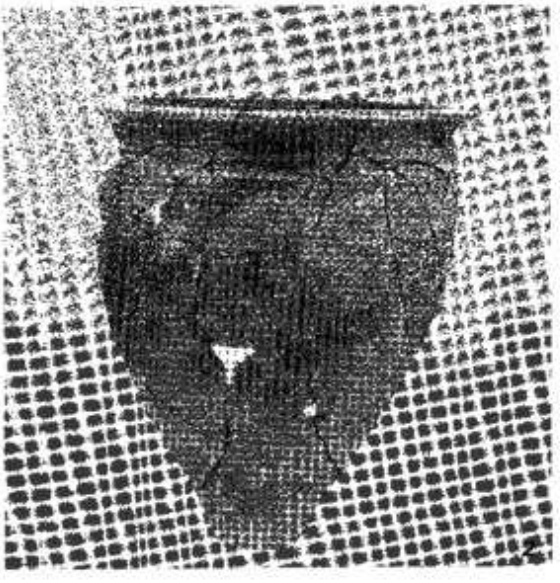
1. 12号甕棺上甕
2. 12号甕棺下甕
3. 13号甕棺上甕
4. 13号甕棺下甕

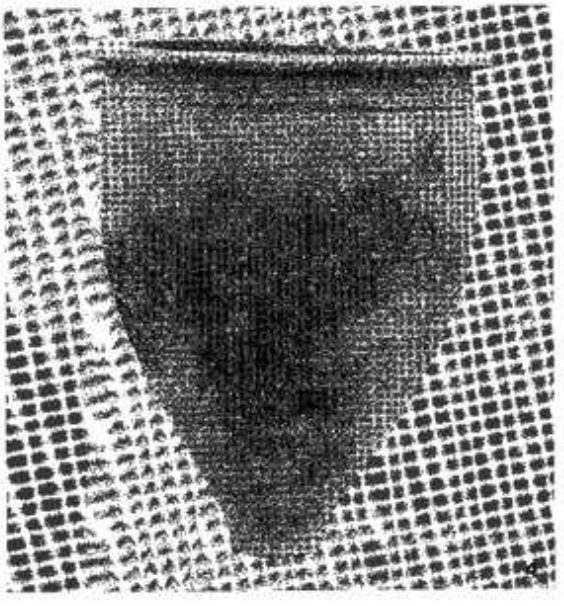
12・13号甕棺

1. 17号甕棺上甕
2. 17号甕棺下甕
3. 18号甕棺上甕
4. 18号甕棺下甕



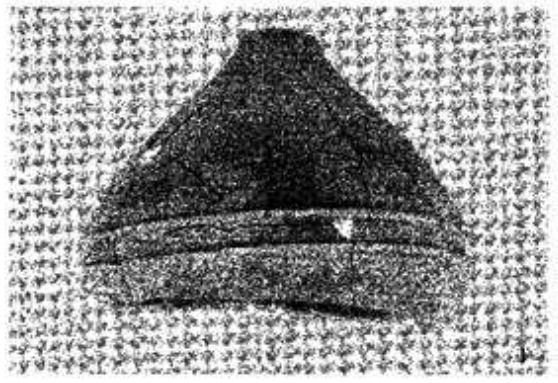


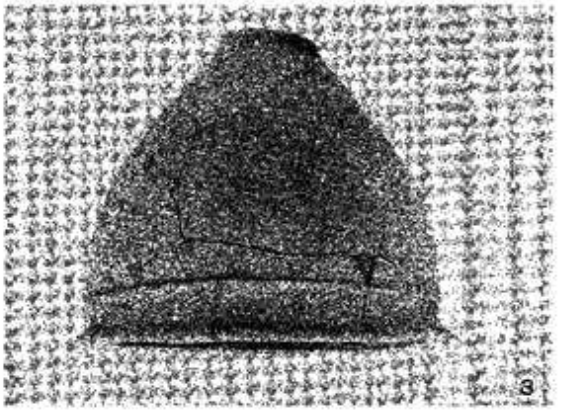


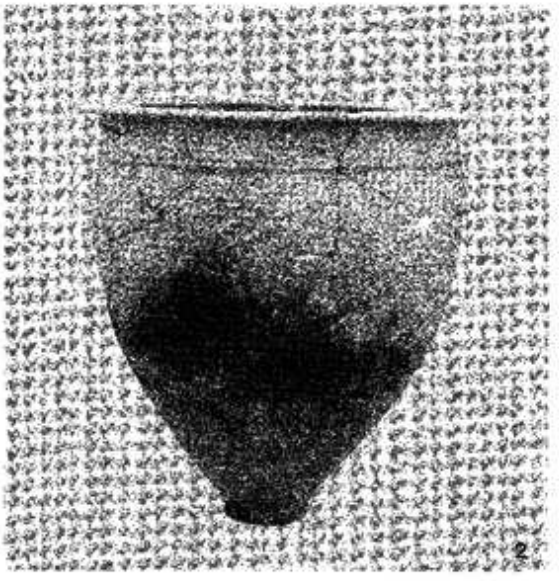


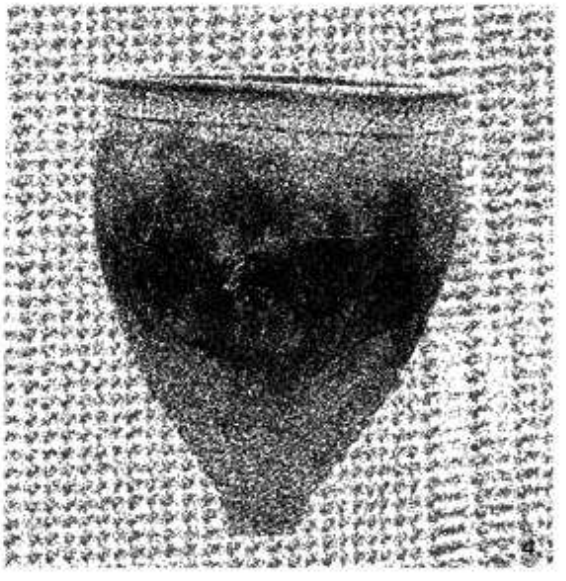
17・18号甕棺

1. 21号甕棺上甕
2. 21号甕棺下甕
3. 24号甕棺上甕
4. 24号甕棺下甕



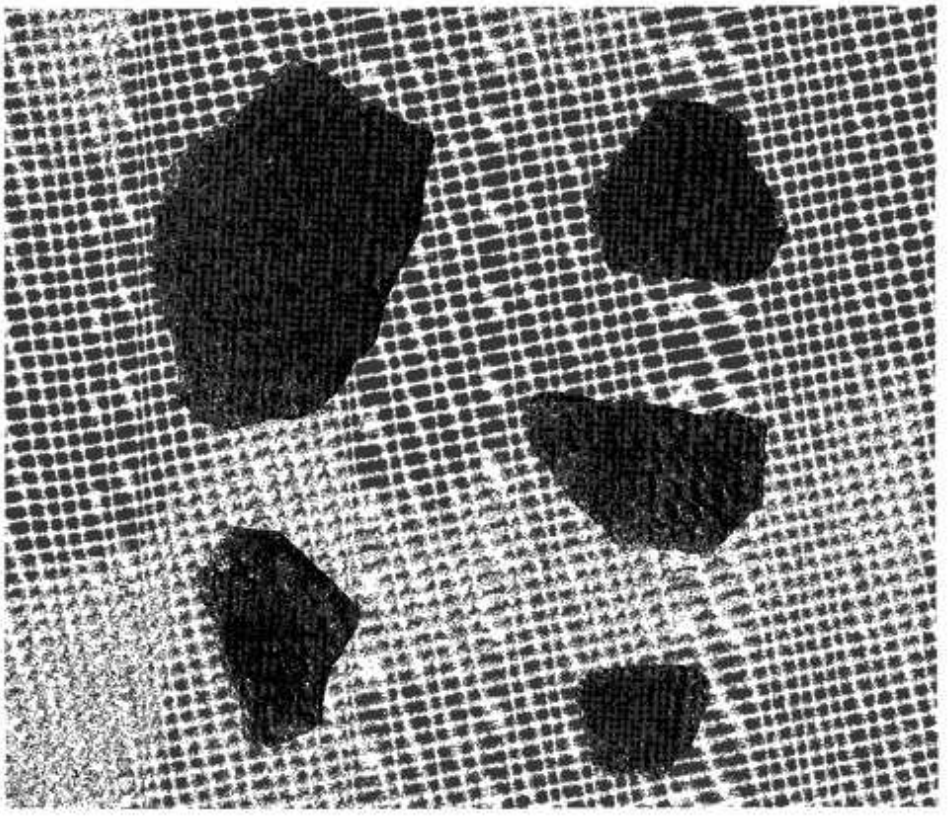




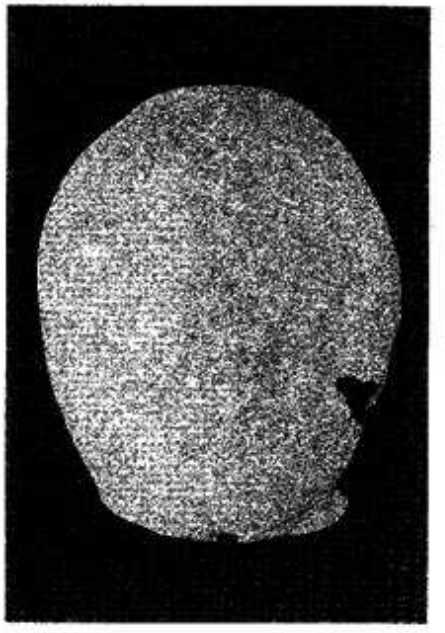


21・24号甕棺

図版　26



墓壙埋土中の縄文式土器



左列上・中・下：K-10号
（女性・成年）

右上：K-8号（男性・熟年）

高上石町遺跡
前原市文化財調査報告書
第 44 集
平成5年3月31日
発行　前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原 5 2 3
印刷　㈱津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16－8